

民族植物学ノオト 第 14 号 (2021) 目次
Ethnobotanical Notes No.14 (2021) : Contents

巻頭言 素のままの美しい暮らしと持続可能な開発目標 Preface: Sobibo and SDG's	 1
自然観察をめぐる天と地への旅 Travels around Nature Observation into Heaven and Earth	渡辺隆一 2 Ryuichi Watanabe
降矢静夫俳句集：躑躅やしお An Anthology of Haiku by Shizuo Furuya: Azalea Yashio	安孫子昭二 8 Shoji Abiko
コロナ禍を起点とする身近な生活におけるデジタルトランスフォーメーションとデジタル化による新しいネットワーク形成への期待 Expectations for the future on the Digital transformations (DX) networks inspired by the COVID-19 infection in 2020	西村俊 40 Shun Nishimura
山村農人の教養～降矢静夫 20 世紀末の山里暮らし～ The Culture of an Honest Farmer, Shizuo Furuya at the Rural Life in the End of 20th Century	木俣美樹男 52 Mikio Kimata
日本のムラ社会における撥撫発生の事例分析 Case Studies on the Occurrence of Ostracism in Japanese <i>Mura</i> Society	文福洞先斗 76 Pont Bunbukudo
[付録 1] 自然文化誌研究会 2020 年の活動記録 Appendix 1: A Record of INCH in 2020	黒澤友彦 116 Tomohiko Kurosawa
[付録 2] 植物と人々の博物館 2020 年の活動記録 Appendix 2: A Record of Plants and People Museum in 2020	木俣美樹男 118 Mikio Kimata
編集後記 Editor's postscript	黍稷農季人 119 Kibikibi Noukijin

素のままの美しい暮らし Sobibo を長年希求してきた。国際連合が提唱する持続可能な開発目標 SDG's には敬意を持つとしても、それをただただ遥拝する気はない。世界の若者が、大人を許さないとか、地球温暖化に対処せよとか主張するのは当たり前ではあるが、それでは、あなた方も過剰な欲望を自律制御するのかと問いたい。自由や民主主義に信頼し、生活様式の画一定型化を強要しないとするのなら、本質的にはラジカルな環境学習に基づき、個々人が過剰な欲望を自律制御することだと考えているからである。日本に限らず、これまでの世間は掛け声ばかりで、良くて第一歩に留まり、なかなか第二歩へと移行変化を進めないのが世の常だ。きれいな SDG's バッジも免罪符のように見えてしまう。

人新世における文明の病弊の根本要因は自律できないほどに膨れ上がった過剰な欲望である。科学技術の発達で、何もかもがいずれ解決できるということは、恐らく間違だろう。過剰な便利への欲望は限りないからである。自由、任意に個々人が質量の異なる欲望に、強制によるのではなく、第七感（良心）を育み、自給知足することを学び、自律的に制御しないことには、根本的な解決はない。

同様に、大方の人々が実は薄々分かっている、口を閉ざして思考を停止しているのはパンデミックの根本要因のことである。パンデミックという用語は一般的には感染症が世界的に流行することを意味するが、何らかの事象が世界的に流行する意としても用いられる。後者の用法の視点を逆転させて、病原菌以外に敷衍すれば、人間の人口爆発や穀物や家畜の膨大な単一栽培・飼育も他生物にとってはパンデミックとなる。

さらに鶏が鳥インフルエンザ、豚がコレラ、イネがいもち病になるのも、穀物にサバクタビバッタが襲うのも、パンデミックであろう。すなわち、人間の欲望による文明の過剰な拡大によって、諸々のパンデミックは生じているのである。

人間への COVID-19 のパンデミックだけに注目が集まって、見過ごしているようだが、他の種のパンデミックも進んでいるのだ。現在に生まれた人々の命の尊厳を護るのは最重要であるから、人間が COVID-19 に感染したからと言って、何百万の家畜や野菜の様に人間を殺処分して地面に埋めるようなことは決してありえない。それならば、将来に向けていかに人口を減少させるかが課題になる。激増し続ける人口が、自由と民主主義のもとに強要や強制なく、ゆっくり適正規模になるには、環境学習によって心の構造と機能を統合するように情理を承知、自給知足し、過剰な欲望を亢進から穏やかにすることであろう。

たとえば、物欲を多様な趣味の充足へと、精神性豊かに心の構造と機能を転換することだ。自然文化誌研究会が調査、研究、学習実践してきた成果である ELF 環境学習過程を中心にとりまとめた環境学習原論は人新世を生き物の文明へと移行するにはとても有効な人生哲学である。

学校で教えてくれなかったと弁解するのではなく、学校教育に依存しないように、自分で任意に学習することだ。学校では教えない現実が沢山あるのだ。学校履歴などに依存するのではなく、自らの学習履歴こそ、自由、平等や友愛を保障するものだ。素のままの美しい暮らし sobibo に移行する幸せがそこから始まる。

自然観察をめぐる天と地への旅 渡辺隆一（長野県長野市）

Travels around Nature Observation into Heaven and Earth
Ryuichi Watanabe, Nagano Prefecture

地元長野県の自然観察会の会報に「天と地と生き物」として10回連載したものを再構成、追記した。20代から自然観察会にふれ、実施し、30才でそれを職とし、定年後も続けている。その中で、自然とは何か、そして自然観察はなぜ楽しいのかを考え続けてきた。その一端を以下紹介したい。

自然への道

昆虫少年の時代はただ虫を採ったり観察したり、なぜかなどとは考えなかった。高校の生物部で解剖や分析など調査研究という手法を知り、大学で論文には目的・方法・結果を明確にしなければならないことを学んだ。自然に興味があり、森を歩くのが好きなだけから、自然に関わる目的が「自然の全体像を科学的に知りたい」と明確になった。その一步は「自然は生態系という環境と生物の作用を一体として理解することができる」概念を学んだことで、以来、生態系は私の自然理解の中心となった。それは後の環境教育を職務とするうえでも大いに役立った。さらに、自然観察会で山や川といった実際の地形、地質に接することで、概念としての生態系はより具体的な姿として理解できるようになってきた。

生態系は大気、水圏、土壌という3つの環境と植物・動物・菌類という3つの生物群とが物質循環とエネルギー流という動的システムとして作用している。仕組みとしてはわかりやすいのだが、生物の本質である「生命」や「進化」とは何か、となると生態系は何も答えない。生物はもちろん化学物質で構成され、それらは物理法則によって作用しているので、無機物たる山や川などと生物とは同じ自然物であるともいえる。水は海で蒸発すると上昇し、雲になり、山

にぶつかる雨となって降下し、川となって海に流れ、細胞内の液胞の動きや血液の流れに似ていなくもない。もちろん心臓やATPなどエネルギーの作用でもあるが、水の循環にも太陽のエネルギーが関わっているのでその点でも同じである。こうした生物と無機物とは何が違うのかという問いは昔から大きな関心事であり、哲学的課題でもあった。近代の科学はこの疑問にも大きく前進しつつあり、生物は「エネルギーを使ってエントロピーを下げるもの」という点でただの無機物とは異なるということを明らかにした。

石の来た道

庭を掘ったら石がでてきた。丸い石なら川で流されて角がとれた河原由来の石だろうが、これはあちこち割れた断面をもっている5cmほどの石なので河岸段丘の由来ではなさそうだ。さて、この石はどこでできて、どのようにしてここに来たのだろうか。

私の住む豊野町は千曲川左岸の丘陵部400mにあるので、飯縄山系の地質である。元は火山だからその火成岩が風化し、地滑りで割れながらここに来たのかもしれない。また、長野はかつて海であり、そこでたまった泥で堆積岩ができ、やがて隆起して現在の地形になっている。なので、この石は火成岩と堆積岩の両方の可能性がある。火

成岩はマグマが固まったものなので鉱物の結晶がみられるのに、堆積岩は砂や粘土が固まったものなので組成は不規則かまたは細かい。この石の表面はやや茶色だが断面は灰緑色でルーペで見ると一面細かい粒子の塊である。とすれば、これは堆積岩ではないだろうか。すると、その元の砂や泥はどこから来たのだろうか。長野の海の時代の古地図をみると、西に北アルプス、東に河東山地があるのでそこから川の流れによって風化しながら運ばれ、大きな礫や石は岸边近くに沈み、細かい砂や粘土だけが海の底深くに堆積したのだろう。この砂や粘土のものと石は周辺の山地のものだろうが、風化して石を構成する様々な鉱物に分解されていただろう。主な鉱物の石英は透明で、長石や橄欖石などは白色や緑色、雲母は黒などその色も多彩である。石は、こうした多様な鉱物の集合体であるが、その量比や鉄などの金属元素が含まれ、さらにできた時の熱や冷え方で実に様々な岩石が生まれたという。こうした岩石の元である鉱物のさらにその元は地球内部のマグマであり、その地球も元は宇宙の塵が集まってできたのであり、さらにその塵の元は以前にあった原始の太陽が原子核反応で様々な重金属を作り、寿命がきて爆発して大量の塵を宇宙空間にばらまいたことに由来する。この石は、原始太陽の核反応でできたケイ素を主体に、地球内部のマグマが地表に出ることで冷えて多様な鉱物となり、それらが集まって様々な岩石となって大地をつくり、それが風化して崩れ流されて海底に溜まって堆積岩となり、それが隆起して、今、私の目の前にある。普段目にする石もその歴史を考えると、生物以上に長い劇的な石の辿って来た宇宙的な道、歴史があることを知る。

地球の来た道

太古の海で藻類が光合成することで大気に酸素が増えて、植物や動物が上陸する舞台を用意したことは、地球が時代とともにその姿を大きく変えてきたことを物語っている。この地球の変化を「地球進化 46 億年の物語：ロバート・ヘイゼン著」では多くの研究から以下のように紹介している。最初の陸地である玄武岩を「黒い地球」、次いで海ができ「青い地球」に、光合成による酸素で陸地が酸化して「赤い地球」に、CO₂が減少したことで氷に覆われた「白い地球」になり、遂に植物が上陸して「緑の地球」になったと色の変化で表現している。この様に地球は大気と大地、生物との相互関係によって大きく変化してきたことがわかる。足元の土や大気、そして何よりも私たち自身の体を構成する様々な元素も元をたどれば、核融合により輝いていた恒星が進化を辿って宇宙空間で爆発、四散して、再び地球という惑星になったことに由来しているのであり、星から地球に、そしてあらゆる生き物まで全ては関係している。そんな地球の上の小さな島の山裾に私たちは、大地の栄養で育つ食物を得て、四季折々の天気や季節の変化を感じながら暮らしている。こうした自然や宇宙、その歴史を「知る」ことはまさに人間自身とその周囲である環境とを科学的に理解するために発達したもので、人の唯一の特徴でもあるとされる。動物も環境を感じ、知り（認知）、生存のために使うこともあるが、直接生活には役立たない宇宙や自然のことを「知りたがる」のは確かに人の大きな特徴であり、それが文化や文明を発展させてきた基盤であるだろう。普段の自然観察会では自然の不思議さや多様さに目がいき、何億年にもわたる長期の自然の変化や隠れた現象を実地に見たり考えたりする機会は少ないが、目の前の自然や自分自身も実は大地や地球、宇宙へと限

りなく深くつながっている、という視点と思考は持ちたいものです。

生き物の来た道、進化とは

人は誰もが誕生日をもっている。両親がいて初めて私たちは生まれることができる。両親が子どもができる年齢まで無事に事故や病気を逃れて生きてきたからこそ今の私たちがいる。そして、その両親もまた生まれるまでその両親が生きてくれたから生まれることができた。ということが人類の進化の時代に延々と続くことで今の私たちがいる。それはサルの時代にも、魚の時代にも、単細胞の時代にもいえることで、最初の生命が発生した 36 億年前から私の DNA は変化しつつも連綿とつながってきたのである。その 36 億年という気が遠くなるほどの永い間に事故や病気で一度も途切れることなく世代をつないできた命の糸の先に今の私がいることを考えるとそれはまさに奇跡の連続としか言いようがない感動を感じる。

それは科学的には進化としてチャールズダーウィンが時代とともに複雑な生物が生まれてくることを「種の起源」で明らかにした考えでもある。さらに最近では、鉱物や地形においてもその形態や機能が時代とともに変化してきていることを進化として認識し、鉱物進化や地形進化などと無機物にも使われるようになってきた。その背景には、生物も鉱物も基本は化学物質からできており、エネルギーを得ることで組織が変化し、構造や機能が変化する点で同一の事象とみることができ、また、時代とともにより複雑な構造になることもあることから「進化」という語が学術的にも使われるようになってきた。実際に、地球誕生時には 12 種類しかなかった鉱物が現在は 4500 もあり、その大半は生物が関係しているという。さらに、原生代の藻類の光合成によ

り酸素が増えて大気組成が大きく変化することで、植物や動物の上陸の舞台を準備したなど「生物は変化しながら、地球の表面を変化させ続けてもいる」のであり、それらは「地球進化」ともいわれる。しかし、その変化は必ずしもその生物自身が生き残るようにではないところに進化が必ずしも「進歩」という目的論ではない所以がある。近年のその最大の現象が人類の活動による気候変動や温暖化である。「星の進化」もあり、この宇宙も含めてこの世界の全て、山や川、そして生物たちはエネルギーや化学変化によって互いに関連しながら変化を続けており、自然を理解するとはそれら全ての関係性を考えることでもあるといえる。

生と死の道

生物だけでなく、石や地球そのものも進化してきたという。生物もその組成は炭素・酸素・水素を成分とする無機物からできている有機物であり、ただ、多くは個体として生まれ、死んでゆく、そのことが、いわゆる命を宿していることが動きゆらめく川や風などの第 1 の自然体とは異なった第 2 の自然体と言われる由縁でもある。しかし、近年ではその生死の狭間は明確ではない、例えばウイルスは自ら増えることはないの生物とは呼ばれないし、死んでも水をかけると復活するものもある。また、動物でも死ねばただの無機物だし、道路で死んだ動物はゴミとして社会的に処理される。しかし、人でもヒトでも死後は粗末に扱われることはなく、他の生物の死とは大いに異なっている。それはひとえに人が意識を持ち、人の死を他の生き物の死とは異なったものとして認識しているからである。たぶん、虫や魚は死を意識することなく死んでゆくのではないだろうか、つまり、人は自分の死も予感することで仲間の死をも考えることができる、これは人と他の生物とを

わかる大きな区分点であり、第3の自然の扉を開いた存在といってもよい。一方で、子どものころ「砂漠は生きている」という映画をみた。そこでは様々な生き物が絶えず変化する砂の中で生きている姿が描かれ、そこでの砂漠は全体として生きているととらえられていたのだろう。また、地球もガイアという一つの生態系として生きている存在であるという概念も提案されている。生きている＝命は生物のみでなくその環境を含むシステムもまた相互に物資やエネルギーをやり取りしている点で生きているとみることもできよう。そして、それは人のみがそのように認識できることでもある。生物にとっての環境とは水や気温、餌など生物を育むものであり、その中で生きる限り命と環境とを区分して生きることには不都合はないだろう。しかし、人はその環境を単に資源や物質としてみるだけではなく、宇宙の星のかけらから自身の身体をも成り立つていることを知ること、無機質である川や風などにも同じ命を感じることができる。あらゆる存在が自分の心身に関連していることを知れば、この世界はやはり一つにつながっていることが実感できる。自然といい、天地といい、ともに自分ともつながっている感覚こそが命の本質であると思うのである。

人の時代への道、人新世とは

地球は生まれてから46億年の間に大きく変化し、そうした時代変化は「地質年代」として区分される。現在の私たちが生きているのは6億年の前からの顕生代と言い、その中で260万年前からは第四紀、その中で1万年前からは完新世という地質年代になる。これら、代、紀、世という段階はそれぞれ地層などに残る大きな変化を元に区分されていて、そして今「人新世」という新たな時代区分が提唱されるようになった。生

物の一種である人の活動があまりにも大きくなり地球全体へ影響を及ぼすようになり、地層にもその痕跡が明瞭に認められるようになったからである。農業の発達による世界規模での森林破壊による土壌のかく乱、産業革命による石炭使用による煤などの大量発生、核実験による放射性物質の世界中への拡散、プラスチックなど人工物質の深海底への堆積など、世界規模での人の活動の痕跡が地層にも顕著であり、もはやこれは地球にとっても新しい時代と考えざるをえない、というのが多くの地質研究者の意見だという。温暖化など、地球規模の大きな環境問題に対する科学界の一つの反応でもあり、人類に対する「地球を危機に迫いやることは人類を滅ぼすこと」という大きな警告でもある。6千万年前に大きな隕石が地球に落下し、地球全体が灰燼に覆われて巨大恐竜たちが絶滅したことで、夜行性の小さな哺乳類が生き延びて、現在の生物界の主流になったことは有名である。その後、インドで玄武岩溶岩のマグマの大量流出があり広大なデカン高原が作られたのも、この隕石落下の影響だとも考えられている。私たちのエネルギーの大量使用の生活が地球の温暖化を引き起こしていることは周知であるが、その悪影響は単なる気温の温度上昇だけではなく、火山や地震など地球内部にまで大きな影響を与えかねないほどの危険性をもっている可能性も考えなければならない。人の歴史を学ぶことと同時に、地球の歴史をも学ばなければ地球と人類の未来は危ういのである。

歴史への道

今朝も200羽程のヒヨドリの群れが南に渡っていった、この秋の渡りの最後だろうか。年々群れが小さくなったような、かつては500羽を超す群れが何日も見られたのに。近年、鳥が減ってきているとも聞く、農

葉のせいか虫も少なくなっているようだ。虫が少なくなればそれを食べる鳥も減るだろう。自分の子ども時代でもホタルはたくさんいたし、夏の夜には電球に無数の虫が集まっていた。江戸時代には日本でもバッタの集団発生があり、はるかに多くの虫やトキやタンチョウなどたくさんの鳥がいたことだろう。ではそれ以前の縄文時代にはどれほどの虫や鳥がいたのだろうか、貝塚などの獣の骨などから推定できるものもあるが、土中の花粉から植生を復元するにはそれらの生息数などを知るのは容易ではない。もっと前の人のいない時代の自然の中ではどれほどの虫や鳥がいたのだろうか。想像もできないほどに満ちあふれていたのだろうか、それとも深く暗い単調な原生林の連続であれば意外に多くはなかったのかもしれない。カタクリが原生林のわずかなガレ場に稀に生えるように、現代の畑の栽培キャベツを食べるモンシロチョウなどは極めて稀な蝶であったのかもしれない。食物連鎖を考えると昔は上位捕食者の種類も数も多いはずなので虫や小鳥は意外に少なかったのかもしれない。ましてや氷河時代には寒冷化なので一般的にも多くの生き物達は少なかったのではないだろうか。自然を理解するときに歴史を考えることが重要であることをこの連載では考えてきたが、過去の自然の全体像を復元し、理解することは、それぞれの時代にどれほどの虫や鳥がいたのだろうかを考えても容易なことではない。化石や地層などからわかる過去の事象も多いが、今に見る目の前の自然の全体像さえなお多くの謎と不思議にあふれているのを考えてみれば、過去の時代の景観やその動態を考えたり、調べたりすることは今後とも極めて重要である。改めて自然観察会の中でその場所の過去の様子を考えて話し合ってみるのも面白く有意義ではないだろうか

天と地への道

天と地とには様々な比喩が考えられる。天は広くて漠然として柔らかく、地は硬くはっきりとしていて確かなもの、天は大きくて、それに比べれば地はやや小さいかもしれない。天と地との間には多くの関係があるだろうが、その矢印はどちらへ向かうのか、天からは太陽の光のエネルギーが降り、地からは立ち上る水蒸気や人の眼差しだろうか。また、人は考える、「人はどこからきてどこに行くのか」と、普通には「過去から未来へと」だろうが、神話では不確かな天から確固とした地へと人は降りてきたという、確かな大地という基盤がなければ生活の知恵や技術は育たないのだから。で、地に降り、知恵を使って社会を作り繁栄してきた人類は今度はどこへ向かうのか、いわば漠然とした未来としか、つまりまた漠然とした天、つまり宇宙に向かって、ともいえるかもしれない。天と地とは、現在の地球の生態系を表しているとも、過去から未来への歴史の流れを暗示しているとも考えられる。自然を考えるのに自然という言葉に代えて思いついたのが「天と地」であったが、それなりに符合しているかもしれない。自然といっても人によってイメージが違うことから、やはり言葉は難しい。例えば、「生物」も一見わかりやすいが、今はやりのコロナウイルスも学的には無生物とみなされているという。自然観察会の対象である実際の自然もその多様性ばかりではなく、それらの生物や石のそれぞれの過去の時代から現在までの様々な環境や他生物との関係や進化の物語までを考えてみると、実に奥が深く、私たちはこの世界をまだまだ漠然としか知りえていないことがわかる。それもこれも、自然という言葉有别な語に置き換えて考えてみてわかったことでもある。言葉とは便利ではあるが「自然」のような大きな言葉はあまりにも膨大

な内容をひとくくりにして、わかったような気にさせてしまうものでもあるとわかる。改めて様々な視点から考えてみることの大切さと面白さを知りました。

自然観察への道

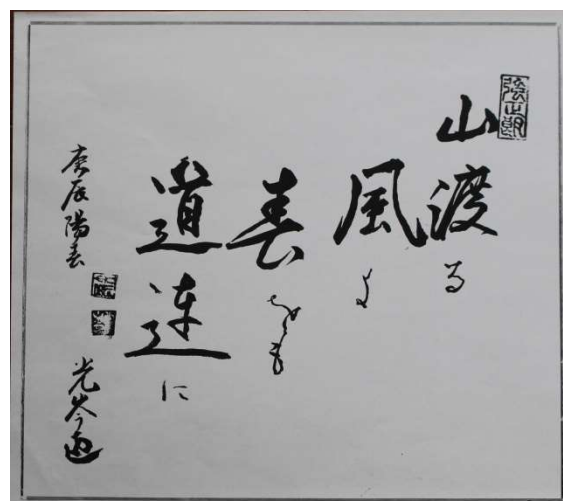
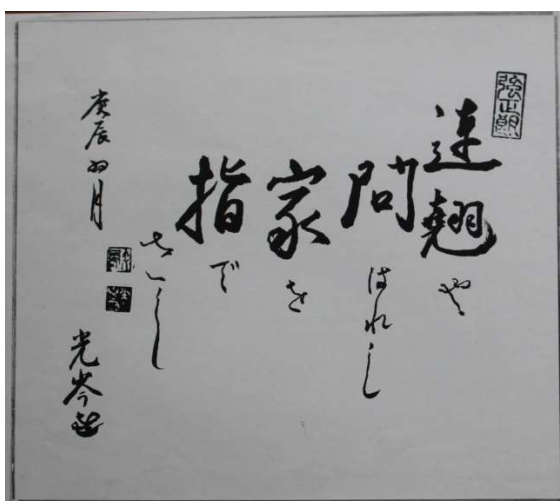
人はきれいな花を見たり、カマキリが虫をとらえた瞬間をみたりすると思わず見とれ、うれしい気分になえる。直接に食べられるわけでもなく、世渡りに役に立つわけでもないが誰でも一定の関心をよせ、楽しさを感じたりもする。自然観察会はその感情に働きかけることで成り立っている活動でもある。自然のあれこれを見たり、考えたりすること自体が楽しいのである。でも、それはなぜだろうか、長年自然観察会を実施し、指導もしてきた中で考え続けてきた。その一つが以下のようなことではないかと。自然観察では、花のきれいさや虫や動物の動きに目を引き付けられるが、それら事象の背景には、花が受粉のために色や匂い、形を工夫してきた長い進化の歴史があること、虫や動物の食う、食われるの関係の中にエネルギーや豊かな命の流れがあることを感じ取っているからではないかと思う。表面的には花や虫の動きを見ても、実はその背景にある見えない進化の歴史や直接には見えないエネルギーや命の流れを感じていのではないか、見えないけれど、その背景を無意識に考えているのではないだろうか。虫や動物はただ、餌や敵としてまわりの環境を知り、意識するのだろうが、人がものをじっと見るときはその表面のみではなく実は様々な事象の背景をも知らず知らず感じ取っているのだろう、それは人が必ずしも餌や敵を認知するためばかりではなく「知りたがり」という性質をもっているからなのではないだろうか。もちろん、「知りたがり」が生まれた背景はヒトの進化の過程でより良く餌や敵を知り、

生き残るためではあったろうが。己を知り、環境を知る、その知りたがりの性質によって人の文化や芸術もまた生まれてきたのだろうし、これからのよりよい未来を創るためにもこの世界のあらゆることを知ることは必須の素養でもあろう。自然観察会はその楽しみの裏に地球や宇宙への過去と未来にもつながるこうした深い意味があるのだと改めて考えた。自然を生涯の友として今後とも永い付き合いを続けていきたい。



降矢静夫俳句集

躑躅（やしお）



凡例

1. 『降矢静夫俳句集 躑躅（やしお）』は、降矢静夫（光岑）（1910.12.2003.2）の交誼をえてきた木俣美樹男・安孫子昭二・金子愛愛・滝川照子が保管してきた降矢の書簡に副えられた俳句を、年代の順に編集した。1.17は降矢の句稿から、18.151は木俣の收受、152.547は四人の收受である。
2. 掲載句のうち405句までは、降矢の米寿記念誌『降矢静夫俳句集 雪虫』（1998.8）からの再掲、406.547の142句はその後に降矢が他界するまでの4年半に作句された。
3. 表題「躑躅（やしお）」は、松姫峠で採取した幼苗が17年目の2000年5月に初めて開花したことに感動し詠んだ、「⁴⁶¹明暗を込めて咲きにし躑躅（やしお）かな」に因んだ。表紙写真はそのときの情景である（撮影・安孫子昭二）
4. 表紙下の色紙は、降矢が卒寿を記念して揮毫した俳句である。
5. 降矢静夫に関しては、木俣美樹男が降矢の書簡とインタビューを基に詳細に分析している（「山村農人の教養」降矢静夫20世紀の山里暮らし）。安孫子も別途、500通に及ぶ書簡を公開するとともに、本書に所収する俳句を項目別に分類して簡単な解説を付す用意である。
6. 降矢書簡の引用箇所の人名はともかく、敬称は割愛した。
7. 降矢書簡の引用箇所の数字は漢字のままとし、一般的な数字は新聞に倣い算用数字で統一した。
8. 本俳句集は、木俣美樹男の懇憑により安孫子昭二が編集し、俳句集の末尾に、降矢の書簡等を基に解説を付した。

昭和51（1976）年 降矢66歳

（1.17句は降矢 1・2月のメモより）

- | | | | | | | | | | | | |
|-----------------|-------------|-------------|----------------|----------------|----------------|-------------|-----------------|-----------------|----------------|---------------|---------------|
| 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 背のびしつすくすく伸びて杉木立 | 冬樹の枝打ち鉈は枝打つ | 山眠る妻が先なり半纏着 | さとの川よどみは氷って寒明る | 木々の影春になる陽のまだ厳し | つれなさよ雪になりたる農の葬 | 杉売りて山寂寥の冬日か | 屋根はいだ風に首だす山羊の小屋 | 背なの子に風呂敷かぶせて霰なり | 雪となり小鳥こつこつ板びさし | 山眠りくぼみくぼみの雪光る | 過疎の里冬川瀬の音絶もせず |

23	22	21	20	19					18	17	16	15	14	13		
咲きのぼる葵の花の炎天下	あくびして背のびする猫と雨の私	みそさざい仕事の合図の如く鳴く	梅の風日脚ののびの頼母しき	野は荒涼鳥喰柿薄日して	昭和 52 (1977) 年	降矢 67 歳	(18 句ゝ 151 句は木俣収受)				刈干柴 (かりぼし) 刈りされど蜂の威は弱し	かたかたとさや鉦鳴し山下る	生活の疲れ黙して寝る夜寒	目ざし売り風花背中に凍る道	空洞木 (うとうぼく) 撲けば響きし冬の山	鶴蔭の荒畑草枯れ頬白 (とり) のなく
35	34	33	32	31	30	29	28					27	26	25	24	
馬祀る碑の時雨たり山の村	忽然と炎の如く曼殊沙華	夏草や若蟬縋って朝の露	降れば読む晴れば耕す冥加かな	日の延や紅梅あからむ春ごろ	春泥や馬蹄ぼくぼく小径かな	竹林の竹伐る音や山眠る	松とれて侘しき妻との生活かな	昭和 53 (1978) 年	降矢 68 歳	短日や干葉あむ手へ日もあんで				立冬の穏やかな日和麦蒔きて	楚々として雨にも耐えて今日の萩	稗ぬきを終えて山の子昼寝かな

昭和54（1979）年 降矢69歳

舳斗雲（きんとうん）の如き雲浮く春の空

寒梅やひそかに花あり旧元旦

紅梅の花のふるえや余寒来ぬ

みそさざい早春の譜峽へ告ぐ

早春や吾へといえる黒砂糖

菜の花や石の地蔵も眠そうな

桜（はな）散りてかじか鳴く水田に入れる

御神木の伐られて若葉の空ひろし

万緑や昼寝の日課水うまし

戻り梅雨ポコポコ木魚の施餓鬼会（せがきえい）

夕立や稗抜き終えて昼寝よし

雨の日は茶の間一つぞわが砦

夏去ぬ白露置きたり萩の花

49
日を重ね秋雨降りて蕎麦の花

盆栽の乾く小春日妻は留守

51 冬立ちて吾子は母へ似妻にも似て（木俣さん長女誕生に）

昭和55（1980）年 降矢70歳

春ごころ茶の実から山の畑

松明けて一輪一輪寒梅が

着ぶくれて猶ちじみ込む寒の空

日の延べや町から運ぶ砂利車

今朝の雪木へだけ積り降っている

赤蛙騒ぎ出したる峽の川

梅の風山並遥か日のあかし

花冷や咳かぜつらし葱坊主

60 黙念と桑の細枝の尺取虫

74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61
山へ雪そろそろくるか秋の虫	古都不知ず古都の味知る冬である	好日やほのぼのいたたくしめじ汁	秋桜のなよやかな花ゆれて晴れ	新涼や葬送の日の秋海棠	妻眠る蚕上る夕べ栗落ちぬ	狐よけ針金張ってとうもろこし	はかなきや夜空の夢の流れ星	稲の穂のようやく見えて冷夏ゆく	夏冷え鎌研ぐ山の杉木	紫蘇もめる香がする昼の雨の音	遅れ梅雨緑したたる夏木立	遅れ梅雨あじさい咲きて繭出荷	蚕上簇（こあがつて）暑くなる山の桜ん坊
		84		83	82	81	80	79	78	77	76	75	
	鶯声朗々春鶴蔭 薯古来窮乏救援	讃 清太薯（せいだんぼ 中井清太夫が齎した馬鈴薯を讃え）	戻来如月之歌	萌兆展開如月空 香雪麗黄鳥	春の雪山なみ白く遥かなり	うめ咲いて猫が背のびす日の溜り	雪おおう石に蹟く寒さかな	義齒入れて街の雑踏春遠し	物忘れ重ねる老いへ寒の風	死せる者生きいる者も雪の道	溪声脈脈山容麗 村落点散西原郷	ことなげに温水器調べさすはつ日（年賀状）	昭和56（1981）年 降矢71歳
	終日斜面段畑耕 噫中井徳不朽輝												

96	95	93	92	91	90		89	88	87	86		85
短目の落日小豆打ち終る	ガサゴソと大きな朴の葉が落る	秋冷の木立寂しく木の実ふる	熟年の秋ほのぼのとこのつどい（十年振りの同級会）	懶雲（ものういくも）ほどなく秋の夏木立	朝顔や老て耕す屋の庭に	雨止薯花咲段畑 旬日蚕児忙給葉	新緑深山幽谷鬱 郭公麦秋告眞近	母の忌や新薯供え新茶そえ	新梢やだんだんそだつ桜ン坊	新梢へ郭公鳴きて山の麦	春來咲花年々変 老境再若還春	養花一年丹精盡 花開旬日命知誰 桜花頭
	110	109	108	107	106	105	101	100	99	98	97	
	生き残る稗に網張る暑さかな	濁流も事なし蟬は鳴きつづけ	あじさいの梅雨の終わりの雨である	蚕上りやまなこくぼみつ髯ののび	茶摘みの青葉の眩し日は照って	若葉風藤の花ぶさ揺れつづく	沈丁花新宮殿へのぼる坂	堀なる鯉の魚紋や水ぬるむ	あらとうを雨晴れ千代田春霞	黄梅のひと花みつけ春ちかむ	干支六度巡りきたれる日を拝す（年賀状）	昭和57（1982）年 降矢72歳

119	118	117	116		115	114		113	112	111
しとしと春になる雨土へしみ	雪ふれば隣も遠し奥郡内	梅からの花信にふれた奥郡内	冬枯れや何処へ出るのも峠あり	年を迎え三恩に只感謝す 鶴蔭の小盆地で安住す (土竜)	快し麦飯と葱味噌汁 日日南面に陽を楽しむ可く	奥郡内霧の中より年あける (年賀状)	昭和58 (1983) 年 降矢73歳	奥郡内柿の実赤くかがやかす	月代 (きかやき) に似る禿げこみやわれの秋	稗の穂の収穫する手に実のこぼれ
131	130	129	128	127	126	125		124	123	122
蚕上りを初栗めしも著りなり	こおろぎの土間に来て鳴く雨の宵	春凍る桜さけずして黙想を	山居して稗がゆ囃る雪こんこ	かた眼いれ蚕えのねがい達磨かな	みんなぎよめる雪がふり年あける	霧うまる奥郡内年明けそめし (年賀状)	昭和59 (1984) 年 降矢74歳	短目の足より冷えて干葉あみ	草きずにしみる夕べの風吹きぬ	荒梅雨の明けて炎帝威を弄す
									121	120
									花の雨春眠さめず雨しきり	咲けば散る花を追つて蝶である

141	140	139	138	137		136	135	134		133	132	
万緑や忙々（せつせつ）とわれほととぎす	かたくりも春と別れてしほみたり	さくらいま駄々こねやつといま咲きいでり	鶴蔭も雪どっさりとかぶりたり	新雪のあかさ眼にしむ初日かげ（年賀状）	昭和 61（1986）年 降矢 76 歳	虻に夢破られる午睡かな	春立ちて根雪の山へ雨けぶる	大かがびの如き山なみはつ日いず（年賀状）	昭和 60（1985）年 降矢 75 歳	しぐれけり冬めく鶴蔭（さいはら）柿あまし	菊さけど女おどしの日もありぬ	
152		151	150	149		148	147	146	145	144	143	142
ほどよけりしめりもたらすめぐみ雨	（151 句までは木俣、以下は木俣・安孫子・金子）	露のとう 摘むのも奢り 山居なり	凜然と 紅梅花もつ 寒明けり	かぎろびの 谿々そめし はつ日いづ（年賀状）	昭和 62（1987）年 降矢 77 歳	雪虫の母のまつこどもそばをとぶ	焼酎を草庇うづきぬる今宵	茶の花やししみじみ秋の日向なり	山村に棲いてやつと吾亦紅（種苗屋より購入）	いたどりの花のこぼれや冷し麺	蚊を追って団扇ものうし手のだるさ	万緑の奥の山より郭公は

164	163	162	161		160	159	158	157	156	155	154	153	
春寒し爆撃忌きし世のさかえ	雪ならば壁の種穂へ鳥が来る	凧（こがらし）や石の地藏尊寒そうな	かべに掛く黍のたね穂へ初日さし（年賀状）	昭和63（1988）年 降矢78歳	析餅や山家吹雪いて炉端かな	落葉ふむ冬のあし音カサコソと	菊の香や初鮭うれし山居かな	初雁が小豆はんでるたそがれる	夏の日のコビリは薯と稗の餅	万緑のいよいよ深しほととぎす	父の日の父老いたればじじの日か	六月は白い花のみ多く咲く	
178	177	176	175	174	173	172	171	170	169	168	167	166	165
なが雨や粟穂うなだれ老にけり	金一封これはこれとは背をかがめ	酒肴板野の里のよい祭り	黍のたれ穂ほのぼの手にし秋に入る	こおろぎや祭りの留守居黙念と	山霧がたれて雨来る暑消ゆ	むろがやの郡内のもろこし穂いでけり	炎天下もどれば井戸の水へ縋る	さみだれの雨間若ものの葬ありき	雨ありて四国稗うゆ夏至であり	万緑の雨にいき付くあか牡丹	葉桜やつばめの来る日になっている	行く春へ雉鳴くなり人恋し	花待てど奥郡内は雪である

179	木枯しの粟穂ゆすぶる秋なかば	191	沙羅散つて炎暑の夏きたりける
180	菊す枯れ峠へ雪来て野はむなし	192	喘ぎつつ小豆蒔ける合歓の花
		193	山百合や土用出水の山の村
		194	螢飛ぶ鶴川ダムの噂たつ
181	昭和 64・平成元（1989）年 降矢 79 歳	195	ゴキーンと玉蜀黍をかいて竈
182	海こゑし稗のすこやか祈る歳（年賀状）	196	滔々と鶴水流る夏終る
183	雪ふらずとはいうものの冬である	197	名月の間近となりぬ露白し
184	立春の日ざしの紅梅はじらいて	198	草刈らばあまた野良着へ草の実は
185	花の雨黙念ひと日家居かな	199	こおろぎや夏もあつたろういまの老
186	葱坊主ならんだとなり南瓜うえ	200	ハラハラと落葉す山草刈て
187	鎌倉のみやげ甘し青葉あめ（孫の修学旅行）	201	しぐれけり杖つき歩く落葉みち
188	六月は白の花心にも咲く	202	星食った二日の月は細かりき
189	さみだれのやもうともせで薯病める		
190	花栗や心もむなし雨つづく		
	どくだみや梅雨の晴れ間を釈然と		
		平成 2（1990）年 降矢 80 歳	

216	215	214	213	212	211	210	209	208	207	206	205	204	203
みちのくの紅花今日郡内で咲き	花栗の終わりとなりて半夏生来し	花栗や四石稗植ゆ夏至暑し	ジャガ薯花咲く畑に更衣して	郭公よ里芋の芽が生えてきし	行く春や苺もぎたり露の葉へ	若葉風友にすすめる黍の餅	片栗や友（金子さん）の来ぬ間に花菱む	牛鳴いて桜咲きたり川はさみ	縄文の雑穀作り後の世人	残雪の坂道怖しするするり	冬眠の吾もはひ出ぬ春一番	如月の西原山地雪尺余	山河春暦日むなし山居かな
228			227	226	225	224	223	222	221	220	219	218	217
むろがやの奥郡内も初光り（年賀状）	平成3（1991）年 降矢 81歳		短日の霜の谿谿霜きえず	柚の香や日向嬉しく冬である	茶の花やあれこれ思う山の畑	秋日和大鍋囲む芋煮会（十一月三日鶴川畔で）	石仏も和む安曇野稲の秋	こおろぎの鳴く夜となりぬ山家かな	安曇野の石仏和む稲の秋	暑ければ暑しとグチす土用照り	炎天下南瓜もぎたり手へ重し	日ぐらしや入道雲の湧く夕べ	紅花とふれあうことの有難さ

242	241	240	239	238	237	236	235	234	233	232	231	230	229
木枯や里芋埋め山の裾	刈干やえっちらおっちら来ては刈る	僚友の去り又去り七月に	花蕎麦のすがし花咲く遺跡園（埋文センター雑穀見本園）	長生し眼を病み病棟夏木立（立川共済病院入院）	郷愁や桑の実熟す桑を見し	紫陽花や傘さす女の顔みえず	万緑へさんさんそそぐ日の光り	卵の花の病む眼へ淡く映じたる	若葉かぜジャガ薯の芽生えにけり	若葉かぜ眼しむ光街へ行く	桜咲くとはいうもののさりながめ	春の雀鹿の子模様に畑へふり	点滴の水滴見入りまた今日も
254	253	252	251	250	249	248	247	246			245	244	243
若竹や日長の空へ澆漉と	初つばめジャガ生えたり産毛の芽	春たけてなずな花咲く雨の畑	彼岸雪展墓もできず雪つづく	背をのばし南枝に咲ける梅を折り	紅梅やはずかしそうなうつむいて	仰山な雪ふり積る奥郡内	悪しきこと申の年なり福が来る	とし明ぬ出水の流木へ日がさして	平成4（1992）年 降矢 82歳		初雪の乾葉あめる軒へ舞う	小春日や友がおくりしシクラメン	時雨るや菊も素枯て山家かな

268	267	266	265	264	263	262	261	260	259	258	257	256	255
山茶花や白菜の圧し重くして	短日を着ぶくれの我が影とゆき	冬めきてあかぎれ膏を求めけり	雪虫や山の畑の土大根	茶の花へ蜂生きていて日ざしかな	茶の花へ蜂のまだ来る日ざしかな	菊咲いて篤実の技や今日の展	菊の香や野で焼く陶の展を祝ぐ (金子さん個展)	ぽつねんと孤独の秋や吾亦紅	虎杖の花のこぼれや蕎麦をまく	山裾の山百合咲きて香りきぬ	梅雨つづく奥郡内は霧のなか	花栗やつゆ空つづくほととぎす	松蟬や更衣で忙し女房どの
280	279	278	277	276	275	274	273	272	271	270	269	平成5(1993)年 降矢83歳	
山吹や山裾の屋に咲きたけり	やまぶきや山裾の家に咲き盛る	春の嵐散るも咲けるもあわただし	花の春散るも咲けるも慌しき	山裾や迎えし友とカタクリを	花冷えやジャガの発芽を待ちかねて	彼岸ゆき閑伽桶のみずつめたかり	花かげや嫁ぎゆく吾子を整然と (金子さん長女)	奥郡内ちらほらと梅が日がのびて	猪熊の騒ぎ談義で雪となる	雪もなく奥郡内は山眠る	若水でそば茶いただく冥加かな		

294	293	292	291	290	289	288	287	286	285	284	283	282	281	
夕蟬の送り火たける軒で鳴く	立秋やトウジンビエは出穂して	山の百合匂い漂う霧の里	夏冷え鎌研ぐ山の杉木立	ほおづきのまだ青くして夏若き	辣韭を掘りたる雨間つゆ知らず	深梅雨や友の送りし桜ン坊	花栗や雨間急ぎて薯（ジャガ）を掘る	あじさいや病んだ日のみよみがえり	馬鈴薯の花咲きそめてみなづきへ	苺うれむぎわら帽へ摘んでいれ	柿若葉寺の鐘なり友の葬	つばくろの来た日うれしく南瓜うえ	のらぼうのとうたち蝶のもつれかな	
306	305	304	303	302	301	平成 6（1994）年 降矢 84 歳			300	299	298	297	296	295
寒中の見舞いと友はお魚を	雪の日や音なし声なし山家かな	成人の日祝ぎうららか吾子ありて	松とれて寒さひしひし山の村	天の意とトウジンビエの実り手に	八十超えて四度の初日拝しけり				霜柱踏めば足への冬の感触	大根を抜きつ雪虫そつと追う	柚味噌のほのぼのと友のあり	祭り過ぎこおろぎ鳴きぬ夜となりて	秋海棠露のこぼれて眼ざむ朝	嵐過ぎ空の青さよ 吾亦紅

320	319	318	317	316	315	314	313	312	311	310	309	308	307
銀製の時計うでにし秋ふかし	蟪蛄の末枯れて草へ縋りつく	咲く菊や雨でなやめるひと日かな	秋雨や秋海棠の余滴かな	忽然と曼殊沙華やわが庭へ	こうろぎの土間へ来て鳴く雨の宵	こうろぎの鳴く夜となりぬ風涼し	炎天下トウジンビエの穂波かな	卯の花やジャガイも掘りて母の忌へ	若葉風連休明けやふじつつじ	ふじ咲きぬ相州武甲の山若葉	うららかや山の桜へ友在りて	カタクリや乙女のリボンふと想う	寒明けて裏へ日脚のそつとさし
332	331	330	329	328	327	326	325	324	323	322	平成7(1995)年 降矢85歳		321
新茶の香ほのぼのと立夏かな	鯉のぼり萌芽の風や山の村	春雷やありも私も慌てけり	菜の花やともかくうららうらかな	砂糖湯もほつと余寒の咳ぐすり	雛だんの蛤なきぬ雪つもる	小正月丸木の顔の門男	ほうかむりきさらぎのかぜのずらふく	かんの入り仔をもつ犬がよく吠える	としあらた翁とよばれし賀状かな	サバンナのヒエはろばろと畑にみのらし(年賀状)			冬耕や師走の空は冴えわたり

346	345	344	343	342	341	340	339	338	337	336	335	334	333	
雪虫を土大根で追う日かな	菊の花おののきたりぬ今朝の霜	菊の香や庭で栗打つ日和かな	鶴水やまつりの灯うかべ蜿蜒と	秋の雨ともかく家に帰りけり	秋の雨秋海棠もすがれけり	終戦忌南瓜の蔓は茂りけり	夏菊がうだつのあがらぬわが庭に	花栗や霧の中より匂いくる	花栗やしとしと雨は人恋し	みなづきや山の畑のジャガの花	つゆ空のやんではふりて鍬おもし	つばくろや雑穀の苗は芽生えけり	牡丹咲くとはいうものの逝ける人	
358	357	356	355	354	353	352	平成∞（1996）年 降矢 86歳			351	350	349	348	347
畑のみち春が来ている路の臺	雪どけの雫やねよりひねもすを	雪雪でかまくらのごと犬のこや	如月や砲煙のごと砂あらし	立春やヤット探した路のとう	犬小屋の白くなりたる春の雪	杖つきて山の端へ出る初日みん（年賀状）	年はゆく雪なき山はむなしけり			着ぶくれて日向の落葉乾くおと	着ぶくれてみじか日入日を惜しみけり	霜柱踏めば足への冬の感触	みじか日の入日の山は裸木して	

372 371 370 369 368 367 366 365 364 363 362 361 360 359

またの雪欠伸かみしめ刻み（タバコ）吸う
 ぬぐ冬着今朝は又切る山は曇り
 過ぎしこと問われるつらさ老いの身は
 キヤベツ枯れなずな（花）咲く畑となり
 都留のさと陛下むかえし桜爛漫
 桜爛漫陛下迎えしみよ栄え
 きじは鳴いて萌黄の山の夏近し
 黍播いて春の名残りの桐の花
 救い雨いとしくもろこし今日は植え
 つんつんと小麦穂を出し若葉風
 つばめの仔巢へ戻るか明日も又
 どくだみの花咲く径や友恋し
 海の日も山のはたけでジャガ掘る
 まずかろと知らねで作りしようもろこし

384 383 382 381 380 379 378 377 376 375 374 373

背のびしてどうかこうかと黍へ網
 芋月の（こゝ夜）雨後の夜半皓皓と
 山は霧麓の畑で蕎麦を刈る
 初霜の黍粟がらへ薄すらと
 秋しぐれ炬燵で猪の話など
 今年こそ今年こそとて年終る
 平成 9（1997）年 降矢 87 歳
 恙なく初日拝して老の倅（年賀状）
 門松の松伐る山へ孫も来て
 雪ごもり干魚かみしめ友恋し
 鯉のぼり尾をふるごとき青葉風
 雨なれど友の恵や桜ン坊
 茎立し慈姑の今日は花咲けり

396 395 394 393 392 391 390 389 388 387 386 385

慈姑咲く暑さ戻りし八月の空

末枯れたる慈姑侘しく鎌を砥ぐ

頬冠り腰をかがめて落葉掃く

雪虫やかこい大根埋めけり

山茶花の朱を落しつつ日を惜しむ

世にうとくいつか師走か疼く腰

はや冬至ゆず風呂の香に身を浸し

あれこれと思うばかりで年はゆく

明暗を重ね米寿迎えけり

平成10（1998）年 降矢88歳

雪もなく親山小山とし明ける

むつくりと親山小山かむる雪

着ぶくれて雪の砦をめぐしけり

冬ごもり雪の砦の山家かな

398 仰山な雪で戸惑う迂闊かな

節ぶんや友のめぐみし魚かな

残雪の凍りてピツケルほしき徑

雪掃いて犬と語りて雪ばれや

402
残雪へ春呼ぶ雨が今日はふる

親山も小山の木木も芽ぶきけり

404
葉ざくらや妻の葬すみたそがれる（このえ夫人）

牡丹だよとはいいつつも風さつき

(以上『雪虫』所収)

春雪の山又白し畑斑
(三月の句)

勲章も定年もなく句集かな（句集『雪虫』）

遠雷や赤とんぼにげて百日紅

初秋や拙き句集世に問はれ

- | | | | | | | | | | | | | | |
|-----------------|----------------|---------------|-----------------|---------------|-----------------|------------------|-------------------|-----------------|---------------|--------------|----------------|------------------|----------------|
| 421 | 420 | 419 | 418 | 417 | 416 | 415 | | 414 | 413 | 412 | 411 | 410 | |
| 安曇野のそらの青さも春めきて | 立春や庭へ風花ちらつきて | 冬天や雪虫舞いつつ日は沈み | 冬の夜や戸ゆすり風がふと眼ざめ | 洗顔の水ヒンヤリと寒の入り | 朴落葉がさごそ小鳥 日を浴びて | 鶴蔭の親山雪なし初日さし（元旦） | 平成11（1999）年 降矢89歳 | 年の瀬やあれこれ追れひと日かな | まごまごと師走迎える山の村 | 竹筒の一枝山茶花朱が冴る | 会釈して別れた畑を雪虫が | コスモスの抱きあっていて嵐去り | |
| 435 | 434 | 433 | 432 | 431 | 430 | 429 | 428 | 427 | 426 | 425 | 424 | 423 | 422 |
| マゴノ手で背を搔く夜長虫鳴きて | コスモスのうす紅色や秋である | 芋の露晝でも光る秋である | 炎天を逃れ樹下で蟬をきき | どっしりと石に腰かけ夏の空 | 遠き亡母忌日へ供えし新ジャガヤ | 万緑や握手交せる町候補 | むらさきの眼にしみ通る花菖蒲 | まちぼうけ新緑の雨で夕ぐれる | なずな咲く畑へ捨置く鍬へ雨 | カタクリや先立人の精霊か | あかつきや梅花滴して今日も雨 | 水中に河童しゃがみ（？）池を訪う | 輪をかいて鳶が春よぶ安曇野世 |

447	446	445	444	443	442		441	440	439	438	437	436	
春憂い地図披見しつ旅へ思慕	冬麗ら坂みち下る杖つくる	日向追う冬のみじか日山かげに	冬萌のあずみ野の麦つややかな	冬萌て木々の梢の芽が光る	双手あげ新千年の日を仰ぐ	平成12（2000）年 降矢90歳	冬枯れや襟かき合す葬の列	默然と冬枯の山見入りけり	霜柱踏ゆく足ざわり山の冬	小春日の黄昏れ三日月見つけけり	友と別れさつまを掘れば遠山日	冠雪の鳥海へありと友とも会へ	
461	460	459	458	457	456	455	454	453	452	451	450	449	448
明暗をこめて咲きにし躑躅（やしお）かな	日脚伸ぶ辛夷の寺や夕の鐘	10 道ふさぐ大風後の落た枝	9 厚着して風吹く空や曇はとぶ	8 息かけて梅の蕾や息白し	7 菜の蕾寄添う日射し春浅し	6 梅咲きぬ雛の節句や山の村	5 春通し水仙寄添う日射しかな	4 花の春閨浮檀金は夢の夢	3 山渡る風よ春をも道連に	2 天日浅し土手を背にして爺一人	1 立春や山葵萌出す鶴の川	蜜蜂が梅へ挨拶今朝は来し	カタクリや春を告けり日向ぼこ

475	474	473	472	471	470	469	468	467	466	465	464	463	462
こうろぎよ明夜も歌へ夜長かな	秋しぐれ初栗膳へ旬の味	百日紅晝の彼岸の回向かな	一ト畑へ南瓜胡瓜もゆうがおも	新涼や風に揺れてるコスモスが	さりげなく秋の虫の音聞く夜かな	秋に入り荒れた畑の竹煮草	山百合や人つ気なき郷日にひそむ	霧の巻く山村どうにか投票へ	沛然と雷雨に散れる沙羅の花	青葉冷えたずねて呉れたほととぎす	ぬっと出た枝に咲たる山法師	偶然の重なり躑躅友を呼ぶ	母の忌や白い躑躅が悦ぎて咲き
489	488	487	486	485	484	483	482	481	480	479	478	477	476
冬日背に宅配便へと作る小包	冬冬だ裸木を見あげて空がある	木守りの柿へこどくな小鳥かな	霜柱踏めば音する日影道	寒菊や三頭風におののきて	短日をねつ造きき空を仰ぎ（旧石器遺跡ねつ造）	秋闌けて日追う土手の草紅葉	短日やたばこ輪に吹き日を惜しむ	追憶の京菜漬たく小春日を	初霜やこうべ下げたり里芋も	雪虫か短か日舞いて冬となる	ゆく秋の歩めば咳して草紅葉	山の秋都庁の友よ紅葉せり	宵祭り山裾にかすかな灯が見えて

501	500	499	498	497	496	495	494	493	492	491	490	平成13（2001）年 降矢91歳	
山若葉待つ友来ず雨となり	花から葉へ新緑の世や鯉のぼり	木の芽風菜の花さくら咲くほどに	一人来て二人出て行く春床屋	残雪に猫と犬との足あとや	春ごころ柳の花芽皮をぬぎ	立春の陽光さんさん野も山も	掃き積で雪の砦を廻らしけり	雪の日やどてらの姿亡父に似て	どてら着て夢の亡父にぞ似たりけり	松七日明けて初雪仰山に	洗米を供えて若水汲む柄杓（年賀状）		
515	514	513	512	511	510	509	508	507	506	505	504	503	502
夏果てて秋の野菜や雨が打つ	新涼の夕べの庭に虫の声	新涼やこわばる腰へ葉はり	朝顔の蔓のびほうけ晩夏かな	里芋の葉日に焦げたる暑さかな	遠雷や急ぎ洗濯ものを入れ	海の日や山百合咲きぬ山の村	花栗やむっと暑さに花さかる	つゆ入りの雷雨にぬれて青葉冷え	茄子の花つゆの晴れ間惜しむかな	六月や眼ざめにききぬほととぎす	万緑や食膳にある桜んぼう	草青む羽置の里の美流館	山若葉菜たねつゆの世今日も雨

527	526	525	524	523		522	521	520	519	518	517	516	
一人居に部屋の広けり三月（やよい）まつ	立春や背戸の氷柱に日がとき	森かげのおらが住み家雪つもる	親雀仔雀も軒に氷柱かな	卒寿越へ明治は遠し初日かな（年賀状）	平成14（2002）年 降矢92歳	かそへ日の通院の頬に雪舞って	短日や音立てず部屋に一人かな	山茶花や師走の風にうつむいて	菊匂う月のかがやく 後の月	ここよりは川の名かわる 相州路（昭19）	やんでまた振り出す雨やそぞろ寒	秋茄子をもぐ手にらむかかまきりが	
541	540	539	538	537	536	535	534	533	532	531	530	529	528
おぼろ夜のほの暗きして春月のごと	しぐれけり野沢菜作れず戻りたり	しぐれけり今宵は裏で虫鳴けり	目まどいに追われてお盆の草むしり（目まどいⅡぶよ）	沙羅散って梅雨つづきけり夕の空	父の日やジャガの花咲く山は霧	若葉冷えジャガへつぼみだ晴れを待つ	析咲きぬ小豆の匂と亡母（はは）はいい	若葉冷えひねもす霧で竹の子掘り	美流館小籠ほしくて友に乞う（写真有）	卯の花や空家の垣に咲きにけり	葉ざくらや森の樹下に山吹が	杉花粉くすくす眼鼻へ沈丁花	独り居の部屋広し雛祭り

542

五錠なる薬忘れず秋深し

543

小菊咲く庭に雪虫日はみじか

544

行く秋や間引き菜洗う日を追って

545

木枯しや冬の粧い肌にしむ

546

初雪の粧いなせる小春日や

547

平成15(2003)年 降矢93歳

はりねずみのごとくまるくなりしんねんな(年賀状)

(2月10日 降矢静夫死去 92歳余)

解説

安孫子昭二

生いたち

降矢静夫は、明治43年(1910)12月20日に、周囲を峠に囲まれた山梨県北都留郡西原村下城(現上野原市)の農家の七人兄妹の末子として生れている。第2次大戦で徴兵されて2年ほど県外に出たほかはほとんど西原で暮し、教養ある農士として生涯をとじた(木俣美樹男「山村農人の教養」降矢静夫 20世紀末の山里暮し)。西原村は北都留郡では最も奥地の相模川水系鶴川の上流域にある。降矢の家は、標高520mほどの森蔭の高台に在るので、下城ヶ丘と称していた。

『西原小学校創立120周年誌』(1996.3)によれば、西原小学校は明治8年(1875)に村内185戸から学校資料金を集めて開校している。しかし、家の手伝いで来られなかったり、学校に入学できても毎日出席できる子は半数にもみえない時代だったという。その記念誌に86歳の降矢が、「私の大正時代」を寄稿している。「私の小学校の入学は大正六年でした。父に連れられての入学で、教室では知能テストと思われる○△□◇の型を示されて答えたり、数や名前を書いたりしました。形では菱形が答えられず、数はやっと十までで、名前はカタカナでどうにか書ける程度で、今の子供から見ると低能児のようでした。」というが、どうして、実に記憶力の良いことに驚かされる。

西原に電気が引けたのは大正10年で、降矢は大正12年(1923)に西原小学校を卒業する。「卒業したら父が病気で農もできず、旧制中学校に行きたかったが、母を相手に農の主任でした。父はその後七年ほど経て、多少畑に出ましたが、廿四才時で看取りもせず三日目で死にました。その頃から失意と困難がはじまりまし

た。宿命か天意か、過去の事は思い出したくないことばかりです。父の残し刻煙草を失意の中、吸又吸たのが煙草との縁でした。(便303・337・416)「西原を嫌い、農を嫌った私が逃れられもせず、生きるために農より他になく、酒でも呑んだらやけ酒で自滅するだけだったでせう。宿命と戦うために句を作り、畑を作ったのです。」

(便373)「

父の後を嗣はずの兄は早くに狭い郷閭を出てしまった。「若い頃は百姓になる気はなく、家庭の都合上、末子で準養子として家を嗣ました。然しどうせやるならと、努力して村の第一人者になったのです。無名無冠人ですが、農だけは誰にも負けられません。(便34)。」

戦争体験

降矢は29歳の昭和14年(1939)10月に、鶴川上流の飯尾のこのゑと結婚、4年目の1943年5月に待望の長女が生まれる。ところが、その5カ月後の10月に、第2国民兵(丙種合格)として海軍に応召される。村境の初戸まで盛大に軍歌で送って貰ったときは、「是が私の葬式と心で思つて、」横須賀の海軍に入隊すると、戦闘員ではなく整備兵だった。「海を知らぬのに海軍でしたから戦死すれば海底で、歌のごとく水つかばねを覚悟、遺書を書き、爪と髪を遺品として出しました。(便472)」

「横須賀から父島に移って航空機整備兵の訓練を受け、(昭和)十九年五月に中継基地の硫黄島に派遣され(一等兵でした)、翌六月より南方(テニアン・サイパン島)が破れ、島は最前線になりました。硫黄島のことは悪夢です。六月半より米国軍の砲撃で兵舎は灰と化して、活火山で灼熱の孤島でしたから水は無く、...雨水が飲料水で蓄蔵水樽も失い、防空壕として掘った岩窟で雨露をしのぐ居住地になり、狭いので一班ずつの居住でした。砲撃は

日々激烈し、幸か不幸か病弱ですから戦病で入室(入院のこと)、一週間後、送還予定者になり、それから一週間後の十月半に、島に物資を運ぶ輸送船が内地に戻るのに、私を加え四名送還されました。送還されし傷病兵は再起不能者で、島で戦死か内地で病死かです。航空隊は島の浜辺に近い空港ですから送還されるによく、陸軍は山の上でしたから同じ兵でも不可能でした。それだけ運があつたのです。深夜に厳しい警戒網を脱出して、三日後に横須賀入港でした。送還後、一ヶ月も経ぬのに硫黄島は完全に封鎖されて孤立し、私が横須賀の病院から湯河原の温泉旅館の假病棟に変わった二〇年三月に総員玉碎だったらしい。

運命は不思議で、翌二月は快方に向かい、三月は経過退院で海兵団に復帰し、横須賀から呉、佐世保を経て、昭和二〇年五月、下士官を含め二〇名程で大分の海軍空港に赴任しました。空港も爆撃されて飛行機も僅で、ここで終戦でした。沖縄は決戦場でしたから、終戦が遅れたら、当然沖縄の決戦場に支援だったでせう。終戦の夕方に、司令官宇垣纏中将は特攻機にて沖縄へ自爆したのです。(便224・472・474・475)「

「応召で出征した私は二年間に七回配置替で、一カ所に五〇〇六〇日でした。新しい所に行く度に一ヶ月は上司を覚え、同年兵でも一日でも早い人は先輩として敬意表するので、そうした調べをして、夕食の折に新任としての挨拶を述べます。軍隊は一番厳しい社会です。生涯農人で終る私には、今考えるとよい勉強になりました。(七回の配置替で...)日本の三分の一の府県人に逢いました。是は今になれば立派な勉強でした。西原で農人暮らしでは得られぬ事でした。命を賭した体験でした。(便475)」

降矢は配置替えの度に、西原とはちがう地域の風土や人間性を興味深く観察したのであろう。命を賭した悪夢の体験をも、前向きにとらえる。とはいえ、後年「大本営発表も捏造の報道が多か

ったことを知り(便442)「憤慨している。また、「上の姉たちの子供は(私を)兄さと呼びますが、四つ下の甥が生き残っただけで、私と兄弟同様の人達は五人戦死、一人か二人生き残っていれば話が合つて良かったのです。(便489)」と嘆いている。

戦後の苦難

降矢は、大分空港で1週間ほど戦後処理してから、汽車を乗り継いで3日ばかりで上野原駅に着き、夜通し歩いて8月24日の未明に復員する。ところが留守宅は昭和19年3月に類焼しており、最愛の母親も同年6月15日に他界していた。復員した暁には自費出版を目論んでいた短歌の句稿や多くの書籍も、すべて灰燼に帰していた。「物資のなく、社会福祉もなく、また自動車通わぬ時代の復員で、荒れた畑はあるが、農具も整わず、入植移民のよう为生きるために必死でした。(便224・429)」

その長く必死に働きつづけた過労の付けであろう、大厄41歳の昭和36年(1861)に、半年にわたる長期入院で胆嚢を摘出手術し、8月14日に退院する。「長男はまだ十歳で一カ月妻の手厚い看護で再生、以後三年がかりで本復するが、部落で一番の貧乏暮らし、妻らは向かつて没落(つぶれる)と言われた程、・・・床屋に行つたこともなく、妻に半襟の一枚買つてあげられぬ貧しさでした。自力で黙々六十年、歯をくいしばって苦難のどん底から這い出した私は、先祖の積善か、自分の努力又天意か、六十年の不遇から抜けて、晩年は人に羨望されるようになりました。然し代償として私のエネルギーは底をつきます。(便224・225)」

木俣と安孫子が収受した降矢の書簡から、降矢の年間の農作業を作成した『雪虫』巻末表)。すると75歳の昭和60年(1985)頃まで水田、養蚕と麦作を中心にした畑作が重なっている。老境になつても過酷な農作業を夫婦だけで続けたことが、「107 蚕上り

やまなこくぼみつ髯ののび」からもしのばれる。

冬季にも冬耕や植林の下刈り作業を行っている。雪が降るまでは暗いうちに起きて山に行き、干柴刈(かりぼし)を背負つて帰宅すると、額には汗がにじんでいたという。家の中興と生きるために休む間もなく必死に働き続けて3男2女を育て上げ、3男はいずれも大学を出して立派な社会人となった。「子供は今の時代に自分で選んだ道に進み、皆丈夫で、私の様な一つも望み叶えられぬ代りに、私より生まれ、増したんです。体は不自由ですが私の一生はこれでいいんですね。(便451)」と述懐する。

作物や花卉の栽培

下城の家は森蔭にあり、冬は日照時間が短く、気温はマイナス10℃まで下がることもある。寒さ厳しい土地柄で畑の土壌は細礫で堅くしまっている。それを克服するために降矢は、「秋の柴や草刈りが来年の作物の肥料原で、私の作物成績を左右するので。今ではこんな方法は私のみです。(便69)」という。

従来、西原で作られてきた主な作物としては、ヒエ、シコクヒエ、糯キビ、アワ、穂モロコシ等の雑穀をはじめ、麦、蕎麦(夏・秋)、馬鈴薯、甘藷、里芋、玉蜀黍、南瓜、大根、人参、小蕪、豆類、蔬菜類、蒟蒻、山葵等がある。西原で唯一の水田も作っていた。進取の気性から、「若い頃は、野菜に興味があり、西原でトマト、結球白菜、キャベツも最初に作りました。オクラ、西瓜、路地メロン、落花生も作りました。(便53)」1992年にはタマネギとアスパラガスも試作している。

降矢は新たな作物や花卉の栽培にも関心がたかく、1988年には木俣から粳キビ(長野県栄村産)を譲り受けて試作している。新品種の栽培を試みようとするとき、1年目はその種子が早生か晩生か判らないので、植木鉢に蒔いて発芽から出穂、結実等の期

間を克明に観察し、2年目にその観察を基に種蒔き期日を推定して畑に作って確認し、さらに3年目にそれを微調整して収穫に導く。こうして粳キビによる念願の“桃太郎の黍団子”を味わっている。1993年にはやはり木俣からトウジンヒエ（アフリカガ—ナ産）の種を貰い受けて試作も行っている。降矢は科学者の眼で作物の成育状況を観察し、逐一記録するとともに、創意工夫を怠らない。

私の実家は山形市郊外の高瀬で、「紅花の里」として知られている。1989年の盆に帰省した折に、紅花の種を調達してきた。たまたま降矢から、「東北には私の心をゆさぶるものがあった。紅花のロマンもその一つで、鉢にでも作りその花を一輪でもいい、実物にふれてみるのができたら感激です。（便66）」と便りをもたらした。そのときには私も土産の種を入手してあったから、その旨をお伝えしたら、「紅花有難うございます。来年は作れるんですね。（便67）」と興奮抑えられない風だった。翌年の春にさつそく試作すると、「7月10日 夢の花だった紅花現実として開花しました。待望久し85日かかりました。・・・西原ではじめて咲いた紅花なので、祖先に供えたり、菩提寺に捧げたりです。（便96）」との喜び様で、²¹⁶みちのくの紅花今日郡内で咲き」と詠んでいる。降矢は紅花を愛でるだけでなく、紅花の間引き菜を試食し、花を摘んで紅花茶を試飲し、種も炒って味わっている。さらに紅花の朱肉作りにも挑戦しようとしたが、翌年は天候に恵まれず、その後は体調を崩して叶わなかった。

降矢は紅花に限らず、慈姑（くわい）や宿根ソバなど、毎年のように新品種の試作に取り組んでおり、最期まで関心を切らさなかった。

俳句への道

長い耐乏生活でも降矢の知的欲求は絶えることなく、雨の日は勉強に励んだようである。「私は若い頃は文学青年で、短歌の方で同人誌に参加して、県下の歌友雅友は沢山ありました。詩も好きで、土井晩翠先生を敬慕し、私の処世訓を戴き、今も使っています。『強く正しく朗に』は愛用の判です。歌稿も整理し、沢山の同人誌も揃へ、歌集も作るはずでした。歌は農民歌人が好で、師事を仰いだ歌人（筆者註：斎藤茂吉か）もあり（ましたが）、関係のものは焼けて了たんです。漢詩を心がけた事もあり、郷土史に（も）熱くなったり。（便313）」

それでは降矢にとって俳句とは何であったのか。「・・・句は自己の挑戦でした。戦後は（短歌から）俳句に変ったが、今度は句帳もなく保存や発表も心せず、ただ自分の宿命へ挑戦のため、只便りには時候挨拶に代え一句を作るのです。ですから自選句集を考えていませんでした。『雪虫』は私を支援して下さる方々の尊い御厚志で、恐らく『雪虫』に集まった句より句数は二倍や三倍作ったでせう。（便373・470）」

その俳句の師は、「拙宅の上の家 元参議員降矢敬雄先生勲二です。敬雄先生は新俳句（井泉水）高弟で、私の句はこの流れですが、一茶風ですよ。（便161）」—「そういえばこんな飄逸な句もある（177 金一封これはこれとは背をかがめ）」。

過酷な農作業で苦しみながらも暗い俳句があまりないのは、降矢が後ろを振り返らず、前を向くつよい性格であったからである。「私は自分を厳しくしているつもりで、自己主義的な頑固物です。幸か不幸か野育ち（便76）」であったから、耳にする鳥や虫の啼き声、咲く花を農作業のはじまりとし、作物の日々の成育ぶりに眼を凝らす。「向いの山の裾辺が青葉、中腹が若葉、上は萌芽が一日と云えず変ります。（便391）」

このような自然がなく四季の移ろいが感じられない「都会では、

句はとらえきれない。(木俣便 82・3・20)だから、「正月に帰省した息子が、親爺の生活は今の(バブルの)世では最高だという。聞いてみると、心身をすり減らし、廃人になって行く同僚もあるといふ。(便16)」若いときは青雲の志をもって郷関をでることを夢想したが、山に囲まれ畑を相手にしながら句を詠んできた人生も、まんざらでもなかったのだとの想いもよぎったことであろう。

交友関係

降矢の交友は、雑穀研究家(木俣)、郷土研究家(窪田先生)、農家、地方の文芸家等、多彩である。仙台の土井晩翠と並んで敬愛した人に笹村草家人がいる。笹村は東京芸術大学助教授で安曇野の荻原碌山美術館建設にも貢献した彫刻家である。都会で生れ育ちながら桐原の山中に居住した笹村は、降矢とよほど気があつたらしい。昭和38年(1963)には降矢をモデルに何日も通つて来て、「光岑農子の首」(鉄)と「一茶の像」(木彫)、「雪虫」裏表紙写真)を制作している。この像は降矢の家宝となっている。

私が降矢の好誼を得たはじめは昭和62年(1987)5月初旬である。東京都埋蔵文化財センターに併設された遺跡庭園の一面に雑穀の見本園を作ろうと、無鉄砲にも何の伝手もなしに西原を訪れて、たまたま降矢から何種類かの雑穀の種子を分けていただいた。耕した庭園に種を蒔いて芽がでたので礼状を差し上げたところ、逆に雑穀の生育状況に副えられた格調高い俳句の便りをいただいたき、これを契機に往復の書簡がはじまった。秋季には恥ずかしげもなく実をつけた穂を持参したことから、折々の西原詣でとなった。

降矢76歳の時で、水田稲作、養蚕、麦作中心の農作業から雑穀作りに切れ替えて2年目であった。あれから亡くなられるまでの16年間に戴いた書簡は50通にのぼる。書簡には「自身の日常や、

農作業、農作物、雑穀、山村の食、草木の花、鳥や昆虫等が豊かな語彙で綴られており、山村の自然と暮しを彷彿とさせる俳句が副えられていた。すっかり魅了されて、いただいた書簡は欠かさず櫃底に保管してきた。それは私だけでなく、降矢の警咳に接した友人の金子愛愛、滝川照子も同じだった。

木俣美樹男は私より10年以上前から、雑穀研究のフィールドを西原と定めて降矢に邂逅している。降矢も山村の農業に深い理解と畏敬の念をもって学究する若い木俣を迎え入れ、共に雑穀研究を志す間柄であったから、木俣も降矢の書簡は大事に保管していた。

『降矢静夫俳句集 雪虫』の刊行

平成7年(1995)12月2日に、埋蔵文化財センターで木俣に「雑穀の栽培と調理」の講演をお願いした。その折に、4人も降矢の書簡を保管していることがわかり、3年後に米寿を迎える降矢に俳句集を編んで献呈しようとなつたのではなかったか。

ところが、2年半後の平成10年(1998)4月に、降矢は50年以上苦楽を共にされたこの多夫人を亡くされた。

「初七日が過ぎ、晝は独りです。畑には鋤を置いたまま四〇日一度も行きません。．．．もう三年程、妻も私も老化していて、雑穀作りや試作をやめればよかったのかも知れません。生き甲斐とばかり調子づいた面もあり、妻は特に三年程弱くよく休ませ、独りで頑張ってきたのです。．．．心・身も空気の抜けた風船のようなんです。．．．妻の死の恠しさはさりながら、不甲斐無いたことが恥ずかしいです。(便361)」

その衝撃から降矢の気力、体力はめっきり衰えていたが、9月4日に阿知河原(畑の隣人の民宿)で米寿の祝賀を催し、出来たばかりの『降矢静夫俳句集 雪虫』(1998・8)を献呈したこ

とが励みとなった。

『雪虫』思いもよらず、発刊して戴いたこと、米寿の年の勲章です。都留市の郷土史に努力する窪田先生から讃辞を頂戴したり、桐原長寿村育てた古守豊甫先生も素晴らしいと賛美してもらい、お札の手紙を苦勞して書きました。私は句(407 勲章も定年も無く句集かな)に勲章なしと詠みましたが、今回は勲章を戴いたという事だと思えます。感激です。名いらぬ無名の野人が勲章を戴くとは、未聞のことです。(便³⁷⁶・³⁷⁸)—降矢が旧来の友人・知人に送本した『雪虫』が奇縁となつて、遠方の縁者がわざわざ訪ねてきたという。

縄文人への親近感

イギリスのストーンヘンジをはじめ世界の先史時代人や未開民族と同様に、縄文時代の人びとも太陽の運行、月の満ち欠けを観測しながら四季の移り変わりに備えていた。秋田県の大湯環状列石、青森市の三内丸山遺跡の巨大な6本柱列も二至二分を観測するための構築物である。縄文人は狩猟・採集を生業としていたから、いつ・どこに行けばどんな食用植物が採れるとか、鳥獣の習性を知って旬の味を求めて狩りに臨んだろうし、春の大潮には村びとが総出で潮干狩りに勤しんことだろう。降矢とそんな話題をやりとりしたり、縄文に関連する文献等を差し上げたりした。

「お陰で遺跡ということを教えられ、雑穀に関連して勉強いたしました。冬至が来ますね。私は青年時代より冬至の翌日を何故元旦に定めないかと議論です。それでなかったら節分の翌日が良い。現在の一月一日はまったく意義がないんです。農には冬至の翌日がものの起源がよいからです。又節分の翌日でもいいんで、それが起点で八十八夜があり、二百十日が数えられます。」

縄文人たちはこうした自然の法則を知り、冬至、節分、秋と春

の彼岸中日、夏至を原点、起点として生活したことです。農耕があり、猟があつたでせう。農耕より知らない私の一生ですが、考えてみると妙な人間かも知れません。(便⁴³)」

縄文人への親近感について、「自分は縄文人ですから、立春が元旦で、天文学や希少の崇拜者です。(便⁴¹⁵)」といい、さらに「私は太陽信仰の縄文人が好きで、大和民族(・・・古事記も日本書紀も藤原氏等の捏造したものの気がします)よりも縄文人の子孫であることを夢にして、天道様崇拜で、天道様に恥じないことを根本にして自分の宿命に挑戦してきました。(便⁴⁴²)」という。

晩年の病苦

ところで、降矢は80歳の平成2年(1990)1月半に、凍結した自宅前の坂道で転倒して左腕を脱臼骨折する。(206 残雪の坂道怖しするする)30年振りの医者通いを余儀なくされ、40日間のギブス生活を送る破目になる。

「天罰の拷問だったか、ギブス昨日とれました。寒中鍛錬終わりました。ご心配かけました。三十年の修理、ネジも鉋もゆるんだ感で体全体が衰えたようで、・・・今後ボツボツ鍛錬し鉋を使える日いつか、経過次第です。(便⁸¹)」それからめっきり体力が落ち、冬には腕が痛み筋肉痛に苛まれるようになる。

翌81歳の平成3年(1991)は台風の襲来が相ついで、上野原―西原間の道路が崩壊するなどの被害もあつた。「二回目の大厄だった年、自然も病み、私も病んだ。(便¹⁷⁸)」という。前年10月頃から疲れのためか、めまい、耳鳴り、視力も弱るなどの症状があり、年明け7日に倒れて町立病院に入院する。傍で妻が看護の寝たきりの点滴くらしが20日間つづき、あまりの苦しさに絶望と覚悟したという(便¹¹⁵・²²⁹ 点滴の水滴見いりまた今日も)。2月8日に退院したものの、春耕の時季なのに新暦しかなくて困っ

たという。それで急遽、旧暦が載っている「高幡不動尊暦」を手してお送りしたら喜んで、それから毎年暮のならいとなった。

それはともかく、町立病院入院中に左眼を失明？右眼の視力も弱かったから、今度は病後の肥立ちが少しよくなった3月半ば過ぎに立川共済病院に入院し、19日と26日に両眼を手術する。月末の31日に退院し、何日か置きに通院検診したが、遠方の西原から長男が仕事を休んで付き添う困難な通院を見かねた主治医の好意で、5月25日に再入院する。本人は5、6日にまとめて処療すれば退院するつもりだったがなかなか好転せず、7月半ば過ぎまでの長期入院になった（240療友の去り又去り七月に）。

入院先を立川の病院にしたのは、長女が昭島に居て何かと頼りにできたからであった。たまたま木俣・金子・滝川も私も立川には近かったからよく病棟を見舞ったし、休日には主治医の許可を得て、木俣は学芸大学の研究室と実験農場から自宅にもお連れして、家族ぐるみで歓待している。私も多摩丘陵へ案内し、埋蔵文化財センターでは秋蕎麦の花盛りとシコクヒエの生育をみてもらった。正月過ぎから延べ100日に及ぶ病棟生活だったが、わずかも降矢の無聊を慰めることができたのは幸いだった。

長逝まで

平成11年（1999）正月に、降矢が目標としていた、7人兄弟で唯一生き残っていた6歳上の甲府の兄（勲三）が94歳で長逝した。「司法と農で、住む社会が違うから兄弟愛は薄い。それでも生きていることはお互いの支えでした。（降矢一族はその）叔父さんを誇りとして皆努力して、孫たちもそうで、・・・（便382・385）」と慨嘆している。

追い打ちをかけるように、長い交友だった町内の文化人の畏友が亡くなり、「特に昨年から知人、同輩、近親者も他界してしたの

で人生当然のことですが、生き残ることも流石に孤独にはなれていても、生きる張り合いが抜けます。（便389）」と嘆く。

「死ぬ人が多いので、死んだつもりと考えれば諦めがつきます。死とは自然に還ることで、後はどうなるか？こう思うといいですね。（便436）」と達観したが、・・・「孤独にはなれていますが、語ることも聞くことも生きていれば必要で、無言が続くと頭が変です。（便400）」と、語らないの日の孤独感を訴える便りが増えていった。しかし、気力の方は衰えることなく、書簡数と瑞々しい俳句の数は、92歳余の最期まで維持されたのであった。（図1）註。

死を迎える4カ月前に、「この齡では（来年）畑に出られるか。でも人間は生きていることは働くというか稼ぐことで、それが実行できぬのは死と同じです（便493）」と、古武士然としている。

降矢は幼いときから病弱であったというが、34歳の硫黄島での戦時体験、41歳の半年間の入院、さらに80歳の脱臼骨折から81歳の延べ100日間の入院と、少なくとも4度死線を超えながら、試練を天意として乗り越え（便226）、平成15年（2003）2月10日に92歳余で長逝した。学歴こそ小学校卒ではあったが志は常に高く、学習意欲にあふれ、明治・大正・昭和・平成の4代を、木俣の言う「教養ある農人」として、清貧に生き抜いた人生であった。

私が敬愛する八王子市の考古学者梶國男に『雪虫』を進呈したら、降矢の俳句に感動して便りをしたいからと住所の問合せがあった。降矢からは、「はじめて知らぬ人（梶）から讃辞をいただきました。安孫子さんの知人らしく人柄は判断できる。能筆で立派な人のように推定しました。（便375）」2人の間で雪虫談義も交わされたようだ（便382）。梶には多摩地域の考古学に貢献した人をつづった名著『土の巨人』がある。「土の巨人」とは素晴らしい用語で、まさに降矢を讃えるにも相応しい称号ではないか。

註・「木俣と安孫子の収受した降矢静夫の書簡と俳句の推移」のデータを図にしてみた。スタートが10年違うにも拘らず、二人の収受数が大きく違っている。この一因は、木俣が東京学芸大学環境教育実践施設の教授として教育活動で忙殺されたことと、国内外の野外研究で留守勝ちだったことが大きい。安孫子も東京の埋蔵文化財行政の傍ら縄文考古学の研究に携わってはいたが、西原までは車で90分ほどと近距離で、写真撮影など降矢の依頼に応じやすかったこともある。そういう事情が反映してのことのようである。

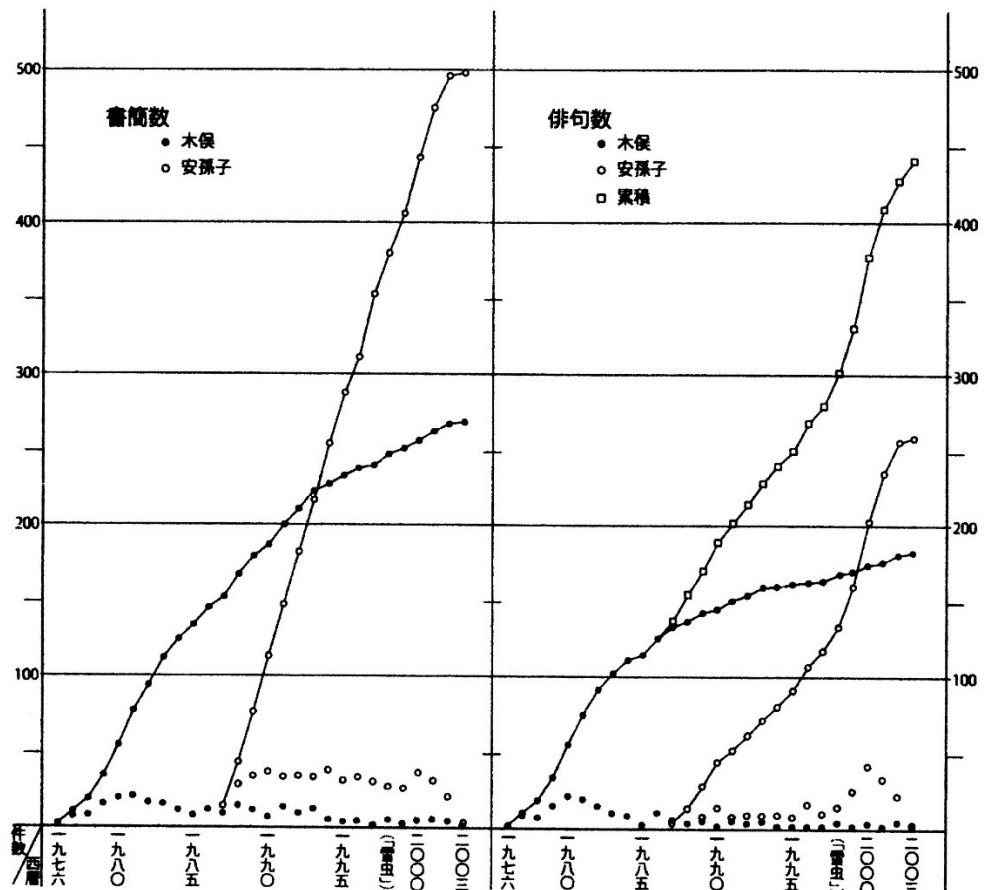


図1 木俣と安孫子が収受した降矢静夫氏の書簡と俳句の推移

降矢静夫 執筆等関係誌（手許の資料に限る）

1948	『やまめ句集』降矢百峰（敬雄）主宰 やまめ俳句会
？	『やまめ句集2』降矢百峰（敬雄）主宰 やまめ俳句会
1952	「狐」『郷土の総合雑誌—文化人』第1巻10号
1981	「山村から」『曠望』第5号
1983	「笹村草家人の作品を訪ねて」『曠望』第11号
1986	「降矢静夫さんに聞く」安藤正文（上野原市の郷土史家）
1996	「私の大正時代」『創立120周年記念誌 飛翔』上野原町立西原小学校
1997	「降矢静夫さんに聞く—雑穀とともに生きる」『地上—雑穀特集』家の光の姉妹誌

コロナ禍を起点とする身近な生活におけるデジタルトランスフォーメーションとデジタル化による新しいネットワーク形成への期待

西村 俊

北陸先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究科（融合科学系）准教授

Expectations for the future on the Digital transformations (DX) networks inspired by the COVID-19 infection in 2020

Shun Nishimura

Division of Transdisciplinary Sciences, Graduate School of Advanced Science and Technology, Japan
Advanced Institute of Science and Technology (JAIST)

■はじめに■

2019 年から 2020 年の年末年始にかけて中国・武漢市を中心に感染拡大が確認された新型コロナウイルス (COVID-19) は^[1]、その後世界的な蔓延へと拡大した。2021 年に入り有効なワクチンの開発・接種が始まってはいるものの未だに往来の自由は制限されている状況にあり、新型コロナウイルスの脅威と向き合った 2 年目の生活が始まっている。感染拡大（パンデミック）に伴い世界各地で人と人との接触を極力減らす感染対策を施した取り組みが行われており、日本でも飛沫感染の防止を目的とした飲食店等におけるアクリル板の設置や建物の出入口への非接触式の検温と消毒、フェイスシールドやマスクを着用した状態での接客／応対が今では当たり前の日常風景となっている

【図 1】。仕事面では、Zoom や Webex、Microsoft Teams、Remo などのオンラインツールを場面ごとに活かした会議や学会発表・イベント（ネット配信も含む）も増加している。緊急事態宣言をきっかけにテレワーク・時差出勤も推奨されるようになり、これまではあまり話題に上らな



図 1：本学学生課の混雑予防のために設置された呼び出し札システムと透明カーテン（上）、本学図書館入口の検温・消毒システム（下）

かった“自宅でのインターネット環境の差”が作業効率の違いに直結する日常へと変化してきている。

この 1 年余の社会変遷を振り返ると、徐々に新型コロナウイルス感染のリスク管理にメリハリを持たせた生活スタイルが確立されてきてはいるが^[2]、ほんの 1 年前の社会構造とは比較にならない程、日常生活でのデジタルトランスフォーメーション (DX) の歩みが進んでいる。コロナ禍によって余儀なくされた急激な DX への歩みの中でどのような変化があり何が課題となってきたのか、(地方での) 大学院生活におけるこの 1 年の身近な生活の記録と今後のデジタル化社会への期待 (特に農山村 DX の広がりへの期待) を記しておきたい。

■ (地方での) 大学院生活での変化 ■

大学教員の立場からまず直面したのが、2020 年春期からの非対面式授業への急ピッチな移行準備だった。本学では 2006 年春期より主に情報科学系の各講義科目を「講義アーカイブ配信システム (講義を同時収録し開講後にシステム上で公開することで、構成員が講義後でも好きな時に参照できるシステム)」に公開し、学生の学習過程をサポートする仕組みが始まっていた^[3]。しかし、他学系による利用はほとんど展開されておらず、私自身も配信や聴講も含めて使用したことはなかった。その後、2018 年度からは講義アーカイブ機能が Web 上で授業資料や課題のやり取りが可能な LMS: Learning Management System 学習管理システムへ統合され利便性が更に向上したようだが、私自身は JAIST-LMS システムの存在自体



図 2 : JAIST-LMS システム (上)、LMS 上に公開された授業 (中) と授業録画時の無人の講義室の様子 (下)

を認識しておらず利用して来なかった^[4]。

2020 年の 4 月に入り、1 週間の授業歴の後ろ倒しを経てもコロナ禍の見通せない状況が続いたことから本学では春期の開講科目に関して「非対面式の授業形態」を取る大学判断となり、①録画配信 (事前に教員が講義室据え付けのカメラで無人での授業を収録し、学生は LMS システム上でストリーミング配信される映像を見

ながら履修する)【図2】、ないしは②Webexを用いた同時配信(ライブ授業)のどちらかを担当教員が講義形態に応じて選択し、受講生へ通知／対処することとなった。

教員の立場からは、ワークショップや対面式の小テストが実施できなくなったことに伴う授業・評価計画(シラバス)の見直し・再構成に苦心したが、LMS上での小課題やレポート課題の提出プロセスを使ってみると物理的に集めるよりも収集・整理・解析(コピー&ペースト・盗用チェックなど)・保存が容易であり、利便性が感じられた。一方で、本人認証の難しさ(代筆など)や本人の学習過程を把握しづらいこと、時差がある学生(ライブ配信の授業や対面式試験に参加できないため課題提出期日にはある程度の時間的ゆとりをもたせる必要がある)の対応、電子配布資料の再配布抑制策などは、オンライン授業システムを運用する上での新しい課題となった。その後、春期の期末試験は対面式の筆記試験が認められたが、その場合においても国内在住者でも緊急事態宣言地域から出られない学生(社会人学生は会社の指示により越県できないなどの事情があった)への公平的な試験の実施についての配慮も必要となった^[5]。

学生からは、i) 1.5倍速で視聴ができる、ii) いつでもどこでも自分のペースで講義を聴講(学習・復習)できる、iii) 履修登録をしていないor重複するような授業科目でも学習ができるなど、学習効率向上に繋がったといったメリットも聞かれた。一方で、特に2020年度新入生では誰がどの授業を受けていて誰が新入生同士なのかをお互いに知る機会が少なく横のつながりの友だちができにくいとい

った課題や、オンラインスタイルの講義へ参加するペースが掴めずに(ないしは下宿先のアパートでのオンライン環境がまちまちであったことから情報ネットワークへのアクセスに支障があり)孤立してしまった学生が少なからず発生し、対処が必要でもあった。

このオンライン授業の対応は、現在に至るまでの1年間維持されることになり(一部の実習・授業が人数制限・大教室利用・マスク着用を条件に対面により実施されてはいるが)、来年度(2021年度)の開講講義では、ハイフレックスを基本とした講義形式(ex. 教員は対面授業とライブ配信を同時に行い、受講生が聴講スタイルを選択する。更にアーカイブ収録により、後日システム上で録画を視聴し振り返りも可能となる形式)が想定されている。多くの先生方と事務・技術系スタッフの方々の努力によって、今では本学の大学説明会や入試での面接試問、学系会議や教員懇談会(いわゆる教授会)、FD会議(教員研修会)も非対面(オンライン)での形式が確保できており、システム環境の整備と支援体制の強化は現在も進められている。

地方・都市部から離れた立地にあり、比較的小規模な組織である本学でも慌ただしく非対面形式での講義資料の準備や成績評価のための指針作りに放浪された1年だったため、キャンパスの封鎖なども行われた大都市圏・より大規模な(学部を有する)大学では、さらに厳しい状況下での大学生活や授業の実施に関するより安全な制度設計のために多くの方々が奔走されたものと想像される。

■学会発表・研究室活動での変化■

2020年3月末～6月に開催される国内学会の多くは中止となったが^[6]、その後、徐々にリモートツールを用いた学会開催形式の整備が進められ、秋頃開催の国内学会ではオンラインのみないしは現地・リモートのハイブリッド開催といった形式も実践されるようになっていった^[7]。当初は非対面では難しいと思われていた懇親会についても、Remoやブレイクルーム機能を使うことでバーチャルに複数人数が雑談・交流できるような仕組みが取り入れられるようになってきている。各国による渡航制限が続く中で、国際学会についても同様に春先の中止(や延期)からリモート開催の流れが急速に拡大した。会告の段階からリモートのみの国際会議が始まった時にはとても驚いたが、今では自然に受け入れられており私自身のオンライン学会への順応も進んでいることを実感している。

研究室活動もグループ分けを行って実験室に滞在する人数を制限したスケジュール管理を行ったり、学生居室の座席を可能な限り離れた配置に模様替えをしたり、研究室ミーティングをWebexで行ったり【図3】、研究室の事情・規模に応じて様々な密を回避するための対策が講じられた。(本学が地方の都市部から離れた立地に位置することもある)現在では日常に近い研究活動を継続することができているが、研究室での飲み会や年末年始・卒業シーズンに行われる大人数での飲食を伴う会合等は禁止されているため、学生の交流機会の確保は課題の一つとなっている。交流のツールとして、オンライン飲み会や野外での距離を取った散



図3：オンライン研究室ゼミの様子（実際にはカラー動画）

歩(散策)など趣向を凝らした交流イベントを実施した研究室もある。

各研究プロジェクトの小ミーティングや大きな領域会合も軒並みzoomへと移行し、所属機関から外へ移動することもほとんどなくなった。以前は多い時には週に2-3回も出張をすることがあったが、それに伴う移動の苦労(体力消耗)や旅費(経費支出)は大幅に低減された。大学全体では、海外からの招聘研究者や訪問研究員も来学できずにより、人的往来を介した研究交流の再開は未だに難しさがある。

現在汎用されているZoomやWebexはSkypeやLine電話とは異なり資料共有が容易であるため、日常生活の中でより手軽に「じゃあ、今からzoomで資料共有しますから議論しましょう!」というように共同研究者(や業者の方)と資料共有を踏まえた討論が気兼ねなく出来るようになった。これまでは対面での議論や商談が重んじられる傾向にありオンラインツールでの面談を申し込みにくかった(ないしは発想していなかった)が、図らずもコロナ禍によって急速に展開されたDXの社会的なニーズの高まりが状況や利便性に応じた会議の多様なスタイルの社会実装を切り拓いたように思う。コロナ禍で

のDXの実践は、人々のデジタル化社会に対する壁（苦手意識）を実践経験により低減し、利活用の普及に伴う収益構造の構築と更なる技術の改善への投資に繋がる好循環を生み出している。

オンラインツールの活用拡大の中で、直接人と人とがその場に集う事で自然と生まれるコミュニケーションや、その場に一堂に会することで生まれる発想や世界観の広がりといった機会の喪失も生じている。オンライン会議では、主題に焦点が当てられやすく余談や雑談などの時間を作りにくい傾向にあり、そのためだけに電話するようなことでもない話題をふと出来る“対面の良さ”を顧みる機会ともなっている（無駄や余白時間、立ち話の再考）。また、どの学会発表も日常空間からの参加（主に大学のネットワークから）であるため、どの内容をどこの学会発表で議論したのかが記憶に残りづらいように感じている。学生に「学会の雰囲気を感じて、発表の場での議論だけでなく訪れた地域についても知ることを含めて）も参加する意義のひとつである」というのが教員の常套句であるが、日常生活圏の中から気軽に参加できるオンライン発表ではなかなか学会討論の“場の雰囲気”を感じることが難しく（味気なさがある）、せっかくの学生の経験／機会が喪失されていることは残念である。このようなコロナ禍でのDX体験により再認識された“デジタル化できない仕事や機会への意識や欲求”は、対面・往来制限が緩和されてからの生活にどのような社会的な変化をもたらすのだろうか。アフターコロナでのこれからの社会的変遷も興味深い。

■テクノロジーが拓く農山村資源を基盤とした新しいネットワーク形成への期待■

就農人口の減少や高齢化を見据え“新しいシステムを導入した農業従事者の負担低減策（システム化）”も各地で始まっている。「農山村DX」という言葉も使われるようになり、水耕栽培やLED栽培といった新しい技術とIT管理を活かした新規事業者の参入など、『新しい時代の就農支援の形を創造すること』が一つのテーマとなりつつもある。付加価値（ex. 農薬や化学肥料を使わない）や顔が見えること（安心）を担保とした比較的小さな生産者によるオンラインツールを活かした販路開拓やファンの創出（オンラインで農家が教える野菜のおいしい食べ方教室など）によるネットワーク形成も広がりを見せている^[8]。

地域支援型農業（CSA: Community Supported Agriculture）と呼ばれる、（主に同じ地域に住む）特定の農家と消費者が手を取り合い事前に農家に賃金を支払い、収穫後に農家から利用者へ新鮮な野菜が定期的に届けられる前払い制度や^[9]、半農半Xとして農業以外の兼業所得を地域で確保できる仕組み作りも考案されている。手軽にCSAに参加できるサイト「ラグリ」や小規模生産者と消費者を直接つなげる「食べチョク」のような直販ECサイト（Electronic Commerce）も開設され、従来の農協経由や限られた地域（地元）での流通ネットワーク網でしか流通／消費されてこなかった多品種・小ロットの食材や花などが、多様な価値観・思考を持った“地域外の消費者”へと直接交流／供給しやすい仕組みも浸透してきている。「ラ

イブコマース」と呼ばれるライブ配信を組み合わせたECサイトも注目され始めている。これらの小さくもデジタルツールを活かした多角的なネットワークを介した新しい生産・流通システムは、オンラインの手軽さとコロナ禍での“巣ごもり需要”の拡大も後押しとなり認知度が高くなってきている。従来の『比較的大規模な農家による規格野菜を生産・流通するシステム』とは異なる流通および流通を支える仕組みは新たな食のセーフティーネット（食料の安全保障）としてどのような社会的位置づけを築いて行くのか、今後の社会での変遷を注目したい。

日本の農地面積の約4割を占める中山間地域における安定的な就農・農地利用を支える新たな仕組み作りは、日本の持続可能な食農ネットワークを維持する上でも緊急の課題である。しかし、農業・雇用・医療・教育分野を中心に「岩盤規制」と表されるような緩和や撤廃が難しい規制が多いとされており、制度や仕組みを変革するためのスピード感が出しにくい状況が続いている。兵庫県養父市（やぶし）では、「人口減少と高齢化の進行／農業の担い手不足と耕作放棄地の増加」を解決課題に挙げ、企業の農業参入／農地取得の活用を促す規制改革モデル事業に国家戦略特区制度を用いて取り組んでいる（H26年5月1日に国家戦略特別区域指定：中山間農業改革特区）。企業の農地取得／利用について農地法などの関連法規の壁があることから^[10]、そこを打ち破ることで農地の流動化を図り企業の長期的視点に立った“地域農業を基軸とした経営”を促す制度設計が事業構想の柱の一つとなっている。しかし、一部報道を含め

既得権益構造と新しいシステムによるイノベーションの狭間での情報戦も展開されている部分もあり^[11-13]、中山間地域での新しい就農支援・地域交流のモデル実証と全国（さらには世界）へ展開できるシステム構築への歩みの難しさを物語っている。

社会が変化して行く中で、新しい技術や枠組みを農山村のシステムへ取り入れる流れを築くためには、どのように人々の意識を変革し必要な技術の精錬・社会実装を達成して行けるだろうか。農山村DXの展開では、各地域の事情に対応したテラーメイド（オーダーメイド）性と採算性を担保できる汎用性とのバランス、デジタルにあまり慣れていない年配者も参加出来るシステムの構築が重要である^[14]。農山村に新しい仕組みを取り入れる上では、新しい価値観を持った若者との交流機会による賑わいの創出の仕組みも活力や外からの視点を地域に吹き込む要である。そのように捉えると、地域に隣接する高等教育機関（ex. 大学）での技術開発や学生の教育機会を介した人的交流が一つの柱となるのではないだろうか^[15-19]。

以前（記憶では2014年前後）、白山ろくの調査の時に、「サルに取り付けた発信機の信号を地域の地形上に自動で追跡・プロットできるシステムを安く導入できないだろうか？（開発してほしい）」と相談を受けたことがある。汎用的な方法としては、サルを捕獲して電波発信器を取り付けてその信号を追跡しながら地図上に行動範囲を三角測量により求めてプロットする方法（テレメントリー調査【図4】）がとられているが、サルの生息域の拡大・頭数の増加に伴い大きな負担となっ



図4：テレメントリー調査の様子（白山山立会：有本氏ご提供）

ていた。「GPS 機能を用いれば追跡もできるがプロットまでを自動化したい（ex. 周辺を車で走ってサル信号を集めるだけで、どこにサルが分布しているのかを地図上に示すことができるという利用イメージ）」というのがニーズであった。現在は、個人のマラソンプームもあってランニングしたコースを自動で地図上に履歴として残すアプリも普及しており、大衆（個人）のランニング用には実用化されてはいるがサル用はどうだろうか？

このような場合、民間企業だけでは商業規模が小さくシステム構築のコスト・労力に見合った事業戦略を描きにくいいため、大学が山村のニーズに合う形で技術連携し小規模な地域での技術実証を経て社会実装を試みるアプローチが現実的ではないだろうか。大学が研究・技術展開の懸け橋となることで社会的な認知とニーズを更に掘り起こし、投資の拡大 > 技術の改善・利便性の向上 > 社会実装の加速 > 収益性の向上 > 技術の改善といった好循環を生み出すきっかけ作りを担うことができれば、その後の民間企業

（や大学ベンチャー）への技術移転・大学の収益源／地域貢献実績の確保にも繋がる。先端研究・人材教育の役割だけでなく全国各地にある利点を生かし大学に隣接した地域への技術移転／実装へ向けた“知恵と技能の融合を指南する役”を担うことは、地域 DX への新たな歩みの促進にも繋がるになるのではないだろうか。

最近、音声 SNS アプリ Clubhouse が話題となっている。著名人同士の会話や井戸端会議を聴講できることが特徴のようである（利用経験がないので詳細は分からないが）。もし農山村における日常の会話をライブで聞く機会が増えれば、特に都市部に住む人々にとっては今までと違った世界観の面白味に触れるきっかけになるのではないだろうか（実際に地元の方たちの同意を得ながら Clunhouse 配信するまでの壁は高いとは思いますが、農業法人などでは作業中の会話・やり取りを配信することは可能性かもしれない）。山村調査では飲み会や田畑での作業中の会話、立ち話から農山村文化の礎や世界観を読み取る機会が多いことから、遠隔での生の声を聞き取る機会が増えることは研究者にとってはなかなか直接訪問して聞き取りできない地域間の違いについての広域調査・鳥瞰的理解にも繋がる。

「はたらく細胞」（作者：清水茜）は、ごく身近な作用でもあまり意識してこなかった私たちの体の中での働き（機能）について細胞を擬人化・アニメ化することでより分かり易く表現し、子どもから大人まで幅広い世代に対して体の仕組みへの興味を深めるきっかけとなっている。様々なスピンオフ作品も制作され目的や世代に応じた作品・書籍が展開されてい

る。日常的に馴染みがない農山村における生活風景に“より身近に触れることができるデジタルを活かした仕組み”を組み込むことができれば、新たなネットワーク形成の創出や往来人口の増加が期待できるのではないだろうか。

これまでの農山村における伝統知に触れる機会としては、主にその地域にある博物館や民俗資料館を訪れ、物品展示（農具や写真、古民家など）や映像資料を鑑賞する事、時にはイベントとして実演・実践（講習会など）に参加することが中心である^[20]。そのため、「映像アーカイブスの更なる充実による資料保存」が農山村 DX では進められる傾向にある。しかしこの場合には資料映像へ主体的にアクセスする人は限られてしまい（その地を訪れて関心が高い人）、これまでのように関心を持ってアンテナを張って（ないしはたまたま会告を目にして）体験型イベントに参加している／農山村を訪問している層を超えた枠組み形成には繋がりにくい。つまり、“非日常へ足を運ぶこと”から学びや気づき・興味関心の幅を広げるプロセスを基盤としているため、門戸が必然的に限られている状況にある。より新たなファンを増やし交流人口の増加による賑わい作り^[21-22]を図る上では、その人にとっての“ごく日常からアクセス可能”なデジタル資源（教材・ツール）が求められているのではないだろうか。

例えば、全国各地の民族資料館などで毎年開催されているイベント【図5】について、活動報告・記録としての写真が公開（ないしは非公開で保存）されている。しかし、動画を用いた記録やネット配信はあまり行われていない。肖像権の対応や



図5: 石川県立白山ろく民族資料館で行われている焼畑イベント（上）と枡の実割イベント（下）の様子

新たな人的ソースの確保は必要ではあるが、イベント活動を報告書として収蔵するだけでなく活かした資料としてデジタル配信（ライブないしはオンラインアーカイブ）できれば、様々な人がオンライン上で日常生活の中でアクセスする機会が増え、参加していなかった／知らなかった人々に対しても新しい刺激を与えるきっかけや新たなファン・ニーズの開拓（その土地への訪問、イベント参加への動機）に繋がるのではないかと^[23]。実際に伝統工芸の技（匠の技、職人の技）を知る機会として YouTube 上に作業動画がアップされ、一定数のファンの獲得に繋がっている。

人口減少化時代の到来を迎え農山漁村の過疎高齢化も今まで以上に社会的な大きな課題となってきたが、一時期と比べて世論の注目は集まっていないよう

に感じられる。IoT や DX の流れを取り入れ、バーチャル空間でのネットワーク形成や興味・関心を引き出す仕組みを作ることで、テクノロジーと新旧の文化／価値観が融合したシステムに支えられた次世代型の農山村の持続性の担保や伝統文化の未来への継承に繋がるネットワークが広がることを期待したい。

■おわりに■

2013 年 9 月にオックスフォード大学から発表された「雇用の未来」に関する論文^[24]では、自動化・機械化の技術の進歩により将来 90%以上の確率で無くなる仕事が紹介され話題となった。最近の世論の中には「AI によって、仕事がなくなるか??!!」といった議論も耳にするようになって^[25]。歴史的な変遷を振り返ってみても、科学技術の進歩に伴う社会実装と改良が進められる過程で必要とされる技術や人々の役割(職業)は大きく変化してきている。例えば、18 世紀半ばから 19 世紀に起こった産業革命以降の蒸気機関・動力を用いた産業の発展とハーバーボッシュ法による人工的な窒素固定化技術の確立は、いわゆる Society 1.0 (狩猟社会)／Society 2.0 (農耕社会)から Society 3.0 (工業社会)への社会基盤の移行を可能とし、人々の働き方や暮らしぶりも大きく様変わりした。またその変化の中で過度な開発や乱獲による自然破壊や公害といった新たな社会問題も生まれたが、解決に向けたテクノロジーの発想や今日の持続可能な開発目標／SDGs への社会認識の変化を生むきっかけともなり、より成熟した社会形成への歩みに向かっている。

ディズニーの長編映画第 1 作目である「白雪姫」(1937) から始まった長編カラーアニメーションは、「リトル・マーメイド」(1989) を最後にセル画の手法からコンピューター加工を経た制作へと切り替えられ、ピクサーによる世界初のコンピューターアニメーションである「トイ・ストーリー」(1995) を皮切りに、話題作の「リメンバー・ミー」(2017) や新作の「アナと雪の女王 2」(2019) の彩り豊かで繊細な表現を可能とする技法の精錬へと繋がってきた。Society 4.0 (情報社会)における技術鍛錬の積み重ねはアニメーションにおいては表現技法の多様性と精錬された技術をもたらし、人々の情操を養う機会の豊かさを支えている。インターネット技術を利用することでその利便性や脆弱性に触れる機会がなければ、「シュガー・ラッシュ：オンライン」(2018) のようなインターネット空間を巧みに具現化したストーリー構成も生まれてくることはなかった。AI 技術の成熟とともに Society 5.0 (仮想空間と現実空間の高度融合社会) への歩みが進められる中で、「ターミネーター」(1984～) や「マトリックス」(1999～) などが描写したデジタル依存社会への警鐘や未来の见えない脅威に思いを巡らす機会を持ちながら(感性を磨きながら)、新しい技術や表現技法を使い(時には失敗や苦い経験を重ね) 社会としてそのテクノロジーを活かせる仕組みと付き合い方を磨いていくことが、昔ながらのシステムや技法の発展にも繋がるはずである。

短文投稿サイト Twitter は時折の話題やトレンドを追跡しやすい SNS ツールであるが、最近では老舗企業の宣伝窓口ツ

ールとしても重宝されている。企業の公式 twitter を担当する“中の人”の手腕によって企業の認知度や売り上げが大きく変わることもあり、twitter で“バズる”ことが良くも悪くも一定数の世論を左右する^[26]。妖怪の老舗といえば水木しげるの「ゲゲゲの鬼太郎」が私の世代では馴染み深く、もう少し年配の方には「柳田邦夫の民俗誌」を思い描く人もいるだろう。一方で、現代の子ども達には「妖怪ウォッチ」の方が浸透している。妖怪ウォッチは、古典的な日本の妖怪（古典妖怪）だけでなくダジャレとの掛け合わせや言葉遊びから連想される妖怪が作り出されており、「この世で起きる不可解な出来事は、すべて妖怪のしわざ」をコンセプトに無限に妖怪創作が可能な仕掛けが施されている（呪縛霊のジバニャンにはその類似キャラとして、トゲニャン、ワルニャン、ブシニャン、ロボニャン、ロボニャンF型、ゴルニャン、レオニヤルド・ディカプニャン etc、多様なキャラクター設定が展開されている）。従来の風習やシステムと新しい技術やアイデアを掛け合わせることで、時代のニーズに合った新しい形（この場合は、老舗の販売網や妖怪の形）を見出すことが、伝統的な文化技法（老舗の味）や古典的な文化（妖怪）への興味の門戸を広げその継承を支えることにも繋がっている^[27]。

タブレット端末の普及やe-bookが始まった当時には、人間の眼球の進化が技術の進歩に追いつけないとの懸念も聞かれたが^[28]、今では日常の大半をスマートフォン・タブレット端末の画面を見ながら移動する／家での時間を過ごす人が多いのではないだろうか。身近な日常からネ

ット上の動画を視聴し非日常の情報に共感する「身近な生活でのデジタル空間・ネットワーク」を活かし、現実生活での人々の次の行動へどのように繋げるのか、工夫次第で大きな可能性を秘めた時代である。あるビールのブルワリーでは、デジタル工場見学ができる仕組みもHP上で公開されており^[29]、コロナ禍で訪問客が減少する中で新たなファン形成の一助となっている。Z世代（Generation Z）が働き世代となり、日本ではデジタル庁の発足（2021年9月）も予定されている。ブルースリーの「考えるな！感じろ。（Don't think! Feel.）」（燃えよドラゴン）ではないが、「まずやってみる！そして考えよう！（What to do first, and then think about）」の姿勢が次世代を担うシステムを成功へ導く合言葉になることを期待したい。

（2021年3月）

参考文献・追記等

- [1] 新型コロナウイルスの起源や発生時期は現在も議論が続けられているが、2020年の世界的な流行の兆しとしては中国・武漢市での感染爆発が口火を切った。
- [2] 変異種の感染状況が定まらず見通しが立ちにくい状況には変わりがなく、また医療現場での緊張状態や経済への深刻な打撃は続いているが、少なくとも昨春の状況のようにコロナ患者（疑い含む）の発覚によって、社会や組織が対応に右往左往する状況は限定的になってきているように感じられる。
- [3] 吉良元、長谷川忍、「大学院生の補完的学習環境としての講義アーカイブシステムの運用と分析」、教育システム情報学会誌（特集：持続可能な学習教育支援システム

の開発と運用) 32 (2015) pp. 98-110.

[4] 筆者は博士後期課程3年間および学位取得後丁度10年、通算13年間本学に在籍しており、本学の学習システムの変遷に関してはある程度継続的に情報を得る立場にはあった。但し、授業担当教員となったのはこの2~3年ではあるため、授業に関する情報収集への意識は高くはなかったのかもしれない。

[5] 一部の留学生は入国制限により渡日することができず、半年ないしは一年、在学期間を後ろ倒しする対処も必要だった。

[6] 春季~初夏に開催を中止した関連学会：応用物理学会 第67回春季学術講演会 (2020/3/12-15)、日本化学会 第100春季年会 (2020/3/22-25)、触媒学会 第125回触媒討論会 (2020/3/26-27)、石油学会 第69回研究発表会 (2020/5/25-26、※翌年に延期)、高分子学会 第69回年次大会 (2020/5/27-29) など

[7] 秋季に開催した関連学会：触媒学会 第126回触媒討論会 (2020/9-16-18: zoom)、応用物理学会 第81回秋季学術講演会 (2020/9/8-11: zoom)、石油学会 第50回石油・石油化学討論会 (2020/11/12-13: zoom/confitの現地・オンラインハイブリッド) など

[8] クローズアップ現代「コロナ後の豊かな暮らしとは? 見直される“小さな”農業」 (2020年10月28日)

[9] 国内のCSA第1号は、北海道夕張郡長沼町「メノビレッジ長沼」(1996~)での取り組みと言われている。

[10] 個人でも一定以上の農地を保有していない(農家ではない)者は農地の受け入れ登記が認められていない。例えば、小規模な農地を相続により登記移転した場合にもその農地を手放したくとも農家以外に譲渡できない。また、農地から宅地への地目変更を行う場合にも実態が農地以外の用途であること(ないしは変更することが明確であること)を農業委員会に申立てし許可を得る

必要があり難しくなっている。農地の保護のための仕組みではあるが、社会の変化に合わなくなっている側面もある。

[11] 第48回国家戦略特区諮問会議・規制改革推進会議 第2回議長・座長会合 (2020年12月21日) では、養父市の規制改革の拡大(企業の農地所有特例の全国展開)に向けた議論がまとまらず、第49回国家戦略特区諮問会議の配布資料(資料2)では、全国展開に先立つ調査実施の方針について特区制度の意義に沿わない旨の意見書が示されている。(※議事録および配布資料は、内閣府：国家戦略特区のページ (<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/tiki/kokusentoc/index.html>) で公開されている。)

[12] 企業の農地取得、23年夏まで延長へ国家戦略特区の特例措置、朝日新聞デジタル (2021年1月16日)

[13] 原 英史、「養父の農業特区は失敗」として、利権勢力に加担する朝日新聞の大誤報、アゴラ(言論プラットフォーム) (2021年1月21日)

[14] 例えば、狩猟者(狩猟登録者)数の減少は高齢化も原因の一つではあるが、煩雑な書類提出のプロセスが現役の働き世代にとっては参加がしにくい要因ともなっている。最近になってオンラインでの書式ダウンロードも可能になったが、以前は提出する書式を受け取りに行くために代休を申請して警察署へ赴く必要もあった。猟銃所持許可の場合には煩雑なプロセスをこなせることが一つの適正な人格の判断となっている部分もあると予想されるが、システムを構築することでスムーズな申請・審査手続きを行い、実技等の場面で必要な参与観察・審査を行うことも可能である。公的な機関によるシステム開発であり現状では年配の狩猟登録者の割合が多いため、デジタルにあまり慣れていない年配者も使用出来る狩猟・銃関連手続きシステムを築く必要がある。

[15] 東京学芸大学を中心とした現代 GP「持続可能な社会づくりのための環境学習活動～多摩川バイオリージョンにおけるエコミュージアムの展開～（多摩川エコモーション）」（2005 年 10 月から 2009 年 3 月までの 3 年半）では、多摩川流域の源流から河口までの人と人を繋ぐ取り組みが行われ、教育系大学における地域との協働による環境学習のあり方を示した。環境教育系と芸術系の学部が中心となった山村文化の展示方法の工夫など、学生の教育機会だけでなく地域住人へも新しい知・手法の共有を図る場を活動を通じて設けた。

[16] 関西大学は 2014 年 8 月に養父市：国家戦略特別区域指定（H26 年 5 月）との包括的連携協定を結び、官学連携による新しい農産品・特産品の開発など研究と教育をフィールド（養父市）における社会貢献に結び付ける実践が行われている。

[17] 関西大学ニュースレター「Reed」No. 39、2014 年 11 月

[18] 石川県羽咋市では「烏帽子（えぼし）親」という擬制親子制度の慣習を活かし、神子原地区を中心に 2005 年頃から首都圏の大学生へ滞在型農業体験を受け入れている。大学生を中心とした若い世代が交流できる仕組みを作ることで、地域の外からの視点を活かしている。

[19] 西村俊、「地域の再建を担う非地域住人による市民活動」、民族植物学ノオト 5（2012）pp. 10-13.

[20] 東京学芸大学「植物と人々の博物館プロジェクト」では、展示するだけでなく農具・民具を使いながら当時の伝統知の理解や人々の暮らしぶりの聞き取りにも役立っていたが、展示品を手にとって使うという発想は今でも斬新であると感じる。

[21] 西村俊、「里山資源の活用に向けた伝統的・科学的知恵体系の変化と展望」、民族植物学ノオト 10（2017）pp. 14-24.

[22] 西村俊、「パーソナルツーリズムをターゲットとした地域資源の再構成」、民族植

物学ノオト 13（2020）pp. 10-16.

[23] とはいえ、より多くの集客を求めているかはイベント主催者ごとに異なり、また一過性の注目を集めすぎても疲弊してイベントの存続が難しくなる状況を生む可能性もあるため、慎重さが必要でもある。

[24] C. B. Frey, and M. A. Osborne, “The Future of Employment: How susceptible are jobs to computerization?”, Oxford University (2013)

[25] 宇野毅明、池田亜希子著、「しっかり知りたいビックデータと AI」（2018）丸善ライブラリー

[26] 2021/2/20 放送 TBS テレビ「新・情報 7 days ニュースキャスター」：「利益だけではない SNS 効果」動画投稿で人材確保

[27] かつては家での娯楽も TV が主流であったがインターネットの配信番組（ABEMA、AmazonPrime Video、Netflix など）や個人が配信している動画（YouTube、TikTok など）の普及が拡大し、今では TV 局が見逃し配信を Web 上で共有できる仕組み（NHK オンデマンド、在京民放キー局の TVer など）が始まるようになっている。昔ならば VHS で取り逃したら見ることはできなかったドラマも、今ではコンテンツとして正式に Web で後追いができ、視聴者の利便性は向上している。芸能人や著名人が TV からネット番組に主軸を移す動きも広がっている。電波オークションによる TV 局の拡大には至っていないが、近い将来にネットから TV 放映へといった逆の道も切り拓かれるのではないだろうか。

[28] 幼少期からタブレット端末に触れる機会が増えている児童は近視が多くなっているという報道も目にするため、実際の人類への影響評価はまだ始まったばかりかもしれないが。

[29] 伊勢角屋麦酒、ONLINE 工場見学（<https://my.matterport.com/show/?m=f1B3ompWp41>）

山村農人の教養
～降矢静夫 20 世紀末の山里暮らし～

木俣美樹男

The Culture of an Honest Farmer, Shizuo Furuya at the Rural Life in the End of 20th Century

Mikio KIMATA, Plants and People Museum

人生恨むなけれ 人知るなきを
幽谷深山 華自ずから紅なり
(三浦梅園)

はじめに

降矢静夫に初めて会ったのは 1975 年 10 月 4 日であった。彼が 65 歳の頃で、当時の私とは 40 歳ほどの違いであった。この日以来、彼が 92 歳余 (2003 年) で逝去されるまで、27 年間にわたり、山村における農耕についてたくさんのことを教えていただいた。彼は最後の山村農人の一人として誇り高く、晴耕雨読の教養人としても、とても敬愛できる方だった。そこで、私は深く教えを受けるにしたがって、この山村農人の後継ぎになろうと心に決めた。

大学に学生・院生として、教職員、および研究員として人生の 50 年以上を過ごしてきた。大学で学びを深めようとしていながら、教養とは何かについて疑問を持ち続けてきた。大方の人々は学歴が高ければ、知識や情報の数量を多く有していると思い、すなわち教養があると理解しているのだろう。しかし、私は国内外の多くの大学・研究所を異なる立場から見てきて、さらに農村調査によって多くの方々に会い、教養とは何かについて再考することにした。とりあえず、教養とは人々や事物を想い遣ることと定義し、言い換えれば、豊かな知識に基づく直観のことだと認知した。学校教育制度による学歴は知識を増やし、教養を高め

ることに大いに役立つとは思うが、一方で、この学歴が劣等感・優越感に關与して虚無や傲慢に至り、むしろ思い遣りを欠き、教養の向上を阻害することも度重ねて見てきた。

はっきり言えば、学校教育制度の学歴が教養の邪魔であることがあり、こうした学歴がなくても、自ら学びを深めれば教養は高められることを実在の人物で知ったのだ。教養を裏打ちする学問は自分個人ですることだが、しかしながら、終生の師や良い先達を得なければ、学問は向上、深化しないとも考えるに至った。

本論で分析対象とする山村農人こそはそのもっともよい事例で、私は山村農人降矢静夫から多くを学んだ。彼は末子故に農家を継ぎ、学校教育制度の学歴を重ねることは無かった。実兄は法曹関係者であったようだから、彼も農家を継ぎ、病弱でありながら徴兵役に着くという時代的境遇になれば、いわゆる高学歴を得ることはできただろう。病弱であったために乙種で徴兵されて硫黄島などに行かされたほかは、彼はほとんど西原村から出なかった。この山村農人をインタビューに訪れた誰かがありきたりにも、彼の学校教育歴の無いことを卑下したことがあり、彼は悔しい思いをしたことがあったようだ。しかし、いわゆる学

校教育歴で真の学習履歴や教養が評価できるものではない。自らの修練で学問することこそが真の意味での学習履歴であり、高い教養が培われるというものだ。すなわち、彼の教養こそはとても高く、私は彼に師事し、自宅に30年近く通って、親しく独立自尊の教えを受けてきた。私の人生は世間に波風立てて過ごしてきたので、心が負傷することも多く、現在も変わることなく、農人から励ましを受けていると、私は有難く感じている。

農人降矢との対話を、若気の至りで、本としてまとめたいと言って、磁気テープによる記録を認めていただいたのに、忙しさにかまけて疎かにし、いいわけながら出版の機会にも恵まれなかった。これを見かねた考古学者の安孫子昭二が手紙の整理をかつて出してくださり、降矢と親交のあったほかの2名宛も含めて、手紙・葉書から、詩歌などを抜き出して、出来上がったのが降矢静夫句集『雪虫』（1998）だった。なお、句集『雪虫』は残部がないので、校正し改訂版を電子出版し、植物と人々の博物館ホームページに掲載してある。

その後さらに、安孫子昭二が多用の中でも聞き取りのテープ起こしを続けてくださった。横着な私は先輩にこのような大変な仕事を押し付けてしまい、ほんとうに申し訳なく思っているので、残りの録音テープは自分で文章化することにした。降矢に約した出版の機会にはいまだに恵まれないので、電子出版として最後の山村農人の暮らしを記録しておく。約300通の葉書・手紙、約20巻の磁気テープに基づき、本論において降矢の暮らしの人生哲学を考察した。

本論は心の構造と機能に関する三部作の第一論考である。山村で自然に寄り添って暮らしてきた農人降矢個人の心の在りようを、当人が自ら書き記した書簡、自ら語った録音記録から、稀有な直接経験の事例と

して、現代においても統合され得る心のありようを明示したい。

なお、第二論考(文福洞 2021)はムラ社会における心の構造と機能に関して、私たちの40年余りにわたる直接体験に基づき分析、論考する。第一論考(本論)および第二論考に理論的仮設として第三論考(黍稷 2020)ではより普遍的な理論として

「心の構造と機能の統合」を先だって構築し、これを第二および第三論考に適用することにした。また、論考の客観性や公正性を担保するために、主な分析の手法はテキスト分析を用い、原則として失礼ながら敬称は略した。

1. 手紙類データベースのテキスト分析

降矢静夫との交流は1975年から始まって、彼がひっそり他界された2003年初めまで30年近くにわたって続いた。この間にいただいた手紙・葉書は、一部は紛失した様だが、家族あても含めて約300通であった。現存する278通の文面を年代順にワードおよびエクセルに入力した。これらの文章をSPSSテキスト分析で解析してみた。この操作によって、彼の関心や思いがどこにあったのか、どのような自然観、人生観をもっていたのか、を探ってみた。なお、ワード版は個人情報保護の部分を削除して、下記サイトに公開した。

注：手紙類データベースのサイト；
www.milletimplic.net/forestvil/furuyaletters.pdf

1) 感性分析及び係り受け分析のカテゴリ

感性分析の結果を表1に示した。これらの抽出されたカテゴリにおいて、自然観に関する主なカテゴリは雨、雪、山、日、気である。農耕に関する主なカテゴリは雑穀、作、種、農であり、人生観に関する主なカテゴリは老、家、人、生である。これらのカテゴリはディスクリプタもレコード数も多い。

主なカテゴリに含まれる語彙の詳細については、後に表4、表5および表6に示して、さらに検討する。

係り受け分析の結果を表2に示した。ここでは、感性分析で抽出された主なカテゴリについてのみ検討する。雨のサブ・カテゴリの、レコード数が多い主なものは、雨+<>、雨期+、梅雨+、動詞+雨、雨+幸、および形容詞+雨、であった。同じく、山については、山+、山村+、動詞+山、動詞+山村、および山+形容詞であった。農については、農+<>、農+事、動詞+農であった。雑穀のサブ・カテゴリの、レコード数が多い主なものは、雑穀+<>、動詞+雑穀、

および雑穀+私であった。種(たね)については、種+<>、動詞+種、種+稗であった。

感性分析のタイプとコンセプトパターン、および係り受け分析のコンセプトを表3に示した。感性分析のタイプにおいて、良い内容の主な事項は、感謝78、喜び全般62、快い56、嬉しい54、満足47、楽しい43、期待29、幸運22、安心22、褒め・賞賛21、などであった。悪いの内容の主な事項は、不満82、不快54、体が悪い状態47、悲しみ全般43、困っている38、残念36、謝罪28、不運27、などであった。

表1. 感性分析のカテゴリ

カテゴリ	主な語彙(名詞)	感性分析	
		ディスクリプタ	レコード数
地	地方、地上、 土地	40	61
月	五月、四月、九月、一月、十月、七月、正月、三月、八月、二月、六月、半月	23	163
雨	雨量、 梅雨 、長雨、小雨、 雨期	51	111
雑穀	雑穀類、雑穀作り、 雑穀研究	41	100
雪	根雪、積雪、雪虫	36	74
老	老化、老齡	14	48
春	迎春、立春	34	80
山	山村 、山地	58	102
日	日向、一日、十日、二日、日曜、五日、来日、短日、六日、七日、先日、三日、半日、今日、翌日、過日、日陰、雨日、本日、日照、毎日、日中、昨日	158	211
秋	昨秋、 晩秋 、初秋蚕	28	83
年	来年、一年、年齢、三年、今年、越年、二年、毎年、年頭、拝年、本年、平年、昨年、例年	108	207
家	家居、家族、家庭、研究家	30	58
作	不作、作ったもの、 作物、試作、豊作 、畑作	44	110
本		20	34
間	時間、一週間	36	63
種	種子	43	73
もの		43	42
長	長寿、長女	24	28
半		15	21
人	一人、三人、 二人、老人、農人、友人 、縄文人、知人、 人間	81	129
生	生育、生涯、余生、老生、 生活 、自生、 早生、先生、晩生 、学生、	52	97
農	山村農、農友、農業、農家、農耕	54	88
期	期待、 時期 、収穫期	32	61
気	元氣、気象、気候、天気、気温	30	90

感性分析のコンセプトパターンにおいて、自然観に関する主なカテゴリに沿う語彙は、雨 85、光 83、雪 66、秋 59、夏 55、山 48 が多かった。農耕に関するカテゴリに沿う語彙は、作る 99、雑穀 85、畑 52、キビ 44、種 42、収穫 41、ソバ 37、シコクビエ 37、作物 37、粟 37、試作 35、食べる 35 が多かった。人生観に関するカテゴリに沿う語彙は、私 151、思う 85、祈る 74、礼 59、忙しい 58、老人 50、暇 48、健闘 48、時代 46、仕事 44、多忙 43、知る 43、子供 40、皆さん 39、元気 36、戴く 33 が多かった。

係り受け分析のコンセプトにおいてもお

およそ類似した傾向が示された。自然観に関する主なカテゴリに沿う語彙は、雨 85、光る 86、雪 69、秋 61、夏 56、春 56、山 48 が多かった。農耕に関するカテゴリに沿う語彙は、作る 108、雑穀 86、畑 54、キビ 44、種 42、収穫する 45、作物 38、ソバ 37、シコクビエ 37、粟 37、食べる 36、試作する 35、が多かった。人生観に関するカテゴリに沿う語彙は、私 152、思う 86、祈る 74、暇だ 74、忙しい 73、礼する 61、老人 50、健闘 48、時代 46、仕事 47、多忙だ 43、知る 50、子ども 40、皆さん 39、元気だ 47、が多かった。

表2. 係り受け分析のカテゴリ

カテゴリ	係り受け分析	
	ディスクリプタ	レコード数
雑穀	54	100
雑穀 + <>	28	88
動詞 + 雑穀	11	46
雑穀 + 私	5	30
人	187	138
人 + <>	58	101
老人 + <>	5	44
友人 + <>	3	14
農人 + <>	2	15
動詞 + 人	54	77
動詞 + 老人	4	20
動詞 + 友人	3	12
山	96	120
山 + <>	41	96
山村 + <>	6	26
動詞 + 山	24	63
動詞 + 山村	3	20
山 + 形容詞	5	10
農	73	81
農 + <>	27	58
農 + 事	17	30
動詞 + 農	17	43
雨	91	119
雨 + <>	31	98
雨期 +		10
梅雨 +	7	13
動詞 + 雨	25	78
雨 + 幸	17	35
形容詞 + 雨	9	20
種	66	71
種 + <>	25	40
動詞 + 種	20	41
種 + 稗	16	39

表3. テキスト分析による語彙のタイプ、コンセプト・パターンおよびコンセプト

FtoZ手紙 n=278				
タイプ(感性分析)		コンセプトパターン(感性分析)	コンセプト(係り受け分析)	
悪いー悪い	214	ある	ある	171
良いー良い	145	くる	私	152
悪いー不満	82	私	なる	149
その他ー要望	80	なる	する	139
良いー感謝	78	せう	くる	131
良いー喜び全般	62	存じる	せう	122
良いー快い	56	作る	存じる	111
良いー嬉しい	54	又	作る	108
悪いー不快	52	雑穀	又	96
悪いー体が悪い状態	47	雨	光る、思う、雑穀	86
良いー満足	47	思う	雨	85
その他ー疑問	44	光	申し上げる、西原	79
良いー楽しい	43	西原	本年	76
悪いー悲しみ全般	43	申し上げる	敬具、日	75
その他ー問い合わせ	41	本年	祈る、暇だ	74
悪いー困っている	38	祈る	忙しい	73
悪いー残念	36	敬具	雪	69
良いー期待	29	日	ない、いづれ	63
悪いー謝罪	28	雪	礼する、秋	61
悪いー不運	28	いづれ、ない	まだ	60
悪いー不安	27	まだ	出掛ける、由	58
その他ー激励	26	礼、秋	送る	57
良いー幸運	22	忙しい	夏、春	56
良いー安心	22	由、出掛ける	年	55
その他ー驚き	21	夏、年、是	畑	54
良いー褒め・賞賛	21	送る	える、是	53
その他ーお願い	20	様子、える、畑	行く、様子	52
悪いー苦しい	17	老人	寒い、でる	51
悪いー淋しい	16	暇、健闘、山	知る、老人	50
良いー好き	15	行く	遅れる、山、健闘	48
悪いー悲しい	13	昨年、時代	早い、昨年、仕事、元気だ	47
その他ー提案・忠告	12	キビ、仕事	時代	46
良いー楽しみ全般	12	今日、多忙、いふ、知る、 ¹	収穫する	45
良いー体が良い状態	11	種、で	キビ	44
良いー感動	9	予定、収穫、入る、出来る	いふ、今日、多忙だ	43
好いー好評・人気	9	子供、へる	入る、種、予定する	42
良いー美味しい	8	皆さん、	出来る	41
悪いー批判	7	今年、ひる、多い	へる、子ども	40
悪いー恐怖	6	ソバ、シコクビエ、作物、粟	ひる、皆さん	39
その他ー勧誘	6	元気	多い、申す、食べる、今 年、今、作物	38
良いー祝福	6	試作、降る、食べる	やっと、粟、ソバ、シコクビ エ	37
悪いー諦め	4	いい、六月、かかる	折る、ます、降る、試作す る	35
良いー対応が早い。悪いー誹 謗・中傷、怒り、恨み、嫌い、後 悔、哀れみ、不味い。	2	ます、戴く	かかる、六月、いい	34
良いー幸福、買いたい、吉報、 笑い。悪いーショック、悩み、売 れていない、対応への不満、対 応が遅い、落胆。	1	以下省略	以下省略	

表2および表3に示した主要なカテゴリを構成する語彙を、自然観（表4）、農耕（表5）および人生観（表6）を基礎づける事象としてまとめた。また、これらのカテゴリに関わる語彙の関係を図1から図5にグリッドレイアウトで視覚化した。

自然観に関わる語彙を表4にまとめた。カテゴリ山に関わる主な語彙は、山、山村、自然、などであり、具体的な山岳名も

ある。カテゴリ雨に関わる主な語彙は雨期、梅雨などであるが、雨に関する多様な表現がある。カテゴリ気については、光、日、雪、夏、春などとても多く、季節の移ろいに強い関心が示されていた。植物は桜、桑、菊の他、40余種が認識されていた。動物も鶯、猿、郭公、雀の他、30余種が認識されていた。昆虫も蚕、蟬のほか、10種以上が認識されていた。

表4. 自然観に関わる語彙

自然に関わる事象	語彙
山120	山48、山村20、自然14、海拔4、山菜4、峠4、鶴峠4、山畑4、奥多摩4、山居4、奥山4、富士道者4、山々4、山仕事4、山伝4、山地4、山奥4、山村農人4、山桜4、山茶4、山葵田4、山里4、峠道4、秩父の山4、アンデス4、パミール4、奥日光4、奥秩父4、奥群馬4、関東山地3、山峡3、川3、狩人2、秋山郷2、アルプス1、ヒマラヤ2、奥千丈ヶ原1、奥地1、登山家1、白山山麓1、雲取1、奥秩父6、富士の道者1、富士山麓1、山外23、自然界3、自生3、以下省略
雨85	雨期12、梅雨9、雷雨1、細雨5、雨日5、雨量5、梅雨明け4、長雨4、入梅3、小雨3、晴耕雨読3、大雷雨2、秋雨2、空梅雨2、雨衣2、霧雨2、ソバ長雨1、冷雨1、小雨小閑1、小雨後、時雨1、梅雨期1、梅雨末期1、梅雨空1、俄雨1、荒梅雨1、萩雨1、豪雨1、長梅雨1、雨中1、雨台風1、雨土、雨天1、雨春眠1、雨止1、雨続き1、雨蛙1、雨読の方1、雨間急ぎ1、風雨1、雨けふる1、高温空梅雨中、さみだれ1、以下省略
気90	光83、日73、雪66、秋59、夏55、春55、降る35、寒30、冬28、天候25、寒さ24、時期23、低温22、日向22、暑19、水19、高温19、霜18、暖冬17、風16、台風15、不順14、晩秋13、天気12、日中12、暑さ12、寒い12、寒い12、残暑11、気象11、暑い11、コタツ10、気候10、短日9、冬ごもり8、寒中8、小雪8、気8、猛暑8、異常気象8、凍る8、季節7、晩霜7、積雪7、紅葉7、乾燥6、冷害6、初冬6、日陰6、冷夏6、寒波6、晴天5、根雪5、気配5、盛夏5、乾5、日照不足5、夕立4、日照4、梅雨明け4、気温4、満開4、立春4、霧4、大雪4、余寒4、入梅4、曇天4、残寒4、露4、強風4、日ざし4、日当たり4、春一番4、春雪4、晩春4、暁4、曇り4、真夏4、空梅雨4、立夏4、小春日2、旱魃1、以下省略
植物	桜17、桑6、菊6、つつじ6、山茶花4、杉4、紅梅4、楓3、竹3、さくら2、ハイ松2、がまざみ1、しめじ1、すすき1、松1、へちま1、まんさく1、エゾ山桜1、カタクリ1、カタクリ群生満開1、ハイ松1、ヒョウタン1、ボダイジュ1、マンネングサ1、ヤマボウシ1、ヨメナ1、子モチ草1、山百合1、山芋1、東京の桜1、東京のサクラ1、朝顔1、沈丁花1、白檀1、紅梅花1、紫陽花1、芝1、萩1、萩雨1、葵1、蒔1、藤の花1、栃餅1、山桜1、山百合他2、彼岸花1、桜他4、梅他2、朴1、檀1、山桑1、ヤシオ1、いたどり1、さつき1、櫨1、
動物	鶯9、猿5、郭公4、雀4、みそさざえ3、鶴鶴3、土竜3、時鳥3、犬3、猫3、熊2、燕2、狸2、白鳥2、野鼠2、馬2、鴨2、うぐいす1、つばくろ1、つばめ1、もぐら1、みそさざえ仕事1、みそさざえ早春1、法師蟬1、カジカ1、タヌキ1、狸狐1、白鼻心1、駒鳥1、鯉1、鳩1、鳶1、鶏鳴1、鶯声1、猪熊1、
昆虫	蚕31、蟬5、雪虫5、こおろぎ3、蜂2、蜻蛉2、ブヨ1、めまどい1、虻他2、蚊1、蚕他6、蜂1、蝶1、蟻1

農耕に関わる語彙は表5にまとめた。カテゴリ農に関する語彙は幅広く、仕事、収穫、試作、実、農人、発芽、など著しく多かった。中でもカテゴリ雑穀に関しては作

物としての雑穀への強い関心を示しており、個別雑穀について見ると、特にキビ、ソバ、シコクビエ、粟、稗、トウジンビエなどに興味を持っていたことが明らかであ

る。カテゴリ作物に関しては、水稻、トウモロコシ、馬鈴薯、柿などに関心が払われ

ていたほか、多様な作物品種の栽培に熱意を持っていたことが示されていた。

表5. 農耕に関わる語彙

農耕に関わる事象	語彙
農81	仕事44、収穫41、試作35、実28、農人20、発芽19、野菜19、南面17、出穂17、苗16、植える16、穂15、鉢15、採る15、蒔く15、咲く14、収量13、種子12、豊作12、凶作12、分譲11、農友10、働く10、不作9、百姓9、雑草9、咲き出す9、完熟8、播種8、生育8、田8、異常気象8、農耕8、鋤8、農協7、晩生7、焼畑7、苗床7、草7、乾燥6、初秋蚕6、日陰6、脱穀6、調べる6、一株6、七十五日6、出荷6、北面6、好成绩5、定植5、田植え5、機嫌、農家5、日照不足5、マルチ黒4、作柄4、労働力4、収穫期4、品種4、平年作4、採集4、斜面4、日照4、普通種4、水田4、畑作4、茶摘4、葉類4、落葉4、豊作型4、防除4、陸稲4、耕す4、草刈り4、乾柴3、乾柴刈3、刈取り3、大豊作3、植付3、田植え3、田舎3、移植3、移植栽培3、繭3、繭出荷3、苗代3、萌芽3、蚕上3、試作畑3、農業3、農繁期3、鉢植え3、雑木3、乾燥期2、害虫2、播種期2、離農1、晩生種2、以下省略
雑穀100	雑穀85、雑穀作り8、雑穀類6、雑穀研究大会4、雑穀研究3、雑穀食3、インドの雑穀2、雑穀界2、国際雑穀学会1、その他雑穀、雑穀権威者1、日本の雑穀1、特産物雑穀1、玄米雑穀、現雑穀、稲雑穀、雑穀シンポジウム1、雑穀中心1、雑穀他1、雑穀収穫終1、雑穀地帯1、雑穀本年1、雑穀栽培1、雑穀研究室1、雑穀研究界1、雑穀研究法、雑穀研究誌1、雑穀研究開催1、雑穀職1、雑穀農耕文化1、雑穀事情、稗飯2、雑穀作り8、雑穀研究会2、全国雑穀研究会2、以下省略
個別雑穀	キビ44、ソバ37、シコクビエ37、粟37、稗27、四国稗17、トウジンビエ16、ネパールのソバ、モロコシ7、穂もちろし7、キビ糲6、ネパールの蕎麦4、コンニャク4、穂モロコシ4、四国ビエ3、蜀黍3、もちろしトウジンビエ穂2、キビ粉、ソバ種、ネパールそば2、ネパールのそば2、宿根そば2、朝鮮ビエ2、粳黍2、黍粟2、黍糲2、黍飯2、そばシコクビエ1、もちろし1、エゾ稗1、キビウルチ1、キビ他5、コウボウビエ1、コウリヤン1、サドビエ1、シコクヒエ他6、チョウセンビエ1、トウジンビエ丈他6、ネパール(そば2、シコクビエ、トウモロコシ、四国稗、蕎麦)、ブータンのシコクビエ1、ホモロコシ1、学名シコクビエ1、方言ヒエノケイ1、春秋そば1、春秋ソバ1、稗がゆ1、粟畑1、粟黍1、糲キビ他2、黍他4、高知のシコクビエ研究家、
作物37	水稻27、トウモロコシ23、馬鈴薯16、柿12、梅12、里芋11、稲9、大根8、麦7、ジャガイモ6、さつまいも6、小豆5、小麦、白菜5、コンニャク4、南瓜4、山形の紅花4、京菜3、結球白菜3、赤米3、さつま苗2、さつま蒔2、わさび2、キャベツ2、クワイ2、乾柿2、南瓜胡瓜ナスマト2、漬菜2、紅花2、菜種つゆ2、野沢菜2、食用菊2、麦飯2、わさびや、い草1、からし菜1、ほし柿1、キュウリ種1、クワイ新葉1、コンニャク芋1、ジャガイモ作り1、ミカン1、人参1、初栗1、大小豆1、小麦穂1、新米1、早生食用菊1、桜んぼう1、清太薯1、玉葱1、玉蜀黍ハニーバンタム1、甘柿1、甘藷1、甘藷苗1、甲州トウモロコシ、白菜苗、白米、米麦1、紫蘇1、肥後栗、茶の木1、荳、荳ゴマ1、葱苗1、蕪1、麦類1、瓢1、花栗1、山椒1、

人生観に関わる語彙については表6にまとめた。カテゴリ人については、私、礼、老人、暇、健闘、時代など、多くの語彙が繰り返し使用されていた。カテゴリ家につい

ては、子供、食べる、生活、健やか、孫など、家族や来客の語彙が多かった。親しくしていた具体的人名は20余人が挙げられ、交友関係の広さが示されていた。

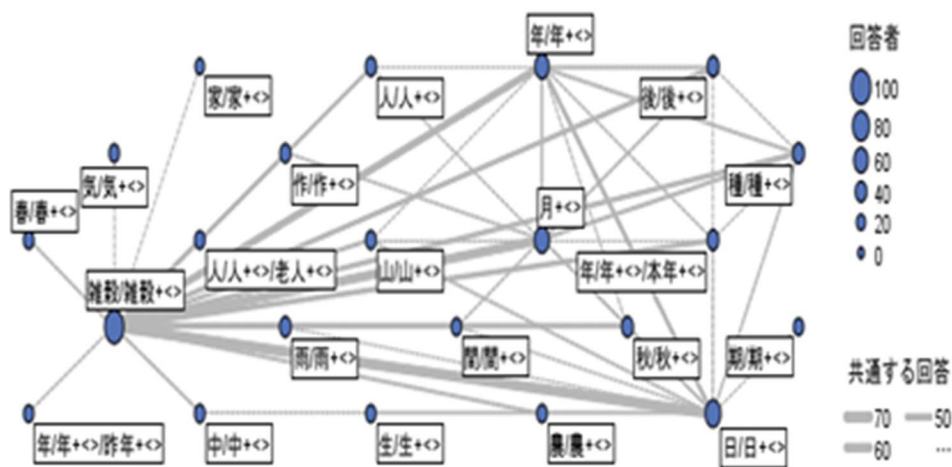
表 6. 人生観に関わる語彙

人生に関わる事象	語彙
人138	私151、存じる102、作る99、思う85、申し上げる78、祈る74、礼59、忙しい58、由57、出掛ける57、送る53、老人50、暇48、健闘48、行く47、時代46、多忙43、いふ43、知る43、予定41、入る41、出来る41、皆さん39、申す37、元気36、戴く33、御礼31、感じる29、推察26、願う26、皆々様25、都合24、無沙汰23、友人20、心20、自分20、老化19、運動19、判る19、尋ねる19、求める19、語る19、よろしく18、体調16、健康16、冬眠16、研究16、祈り16、生きる16、話15、お元気ですか13、有難く12、楽しむ12、不思議11、休息11、おどろきました11、人間9、生涯8、余生7、面談7、返信8、入来6、厚志6、参加6、有難う6、拝眉5、自分の事5、勉強4、孤独4、宿命4、希望4、感激4、生き残り4、生き甲斐4、紹介4、老齡4、若さ4、住む4、別れる4、生き残る4、許す4、疎遠4、以下省略
家27	子供40、食べる34、生活31、健やか30、子26、拙宅22、孫20、来宅11、盆11、帰宅10、留守10、家居9、在宅7、次男7、母7、嫁6、来訪6、ふるさと6、家庭5、家族5、来客5、老生5、誕生5、農家4、嬢4、次女4、独居4、親4、葬式4、一家3、他出3、夫婦3、奥さん3、客3、帰省3、父上3、老妻3、訪問3、倅2、倅夫婦2、娘2、子供の頃2、家の者2、扶養家族2、氏神2、祖先2、老夫婦2、育ての親2、親子2、末子2、二男1、良心1、主婦1、主婦家業1、亡妻1、出産1、吾子1、家業1、家督1、帰省中1、幼子1、弟1、愚妻1、祖母1、私夫婦1、良き家庭1、親類他4、賀客1、長女夫妻1、長男夫妻他3、隠居生活1
人名	安孫子18、木俣18、杣18、遥13、古守先生10、佐藤省三8、明峰7、研究家6、加曾利隆6、阪本先生6、佐藤5、安孫子昭二5、木俣教授5、金子5、シタラム先生4、知友4、小林央往4、知人4、陛下4、同級生4、知る人2、知人畏友2、篤志家2、笹村先生2、中川1、京都の友人1、先人1、友1、友人同志1、友人宅1、青山学院の名誉教授1、古家実2、安孫子先生他2、宮崎博1、小俣光雄1、小倉遊亀1、小林1、木俣先生1、田口洋美1、田村真知子1、番場友子1、石井鶴三1、笹村1、藤村新一1

図1に示した、感性分析によって抽出されたカテゴリ雑穀に関わるグリッドレイアウトでは、月・年・日とのつながりが認められ、季節が重要な関係を持っていることを示していた。図2に感性分析で抽出されたカテゴリ農をグリッドレイアウトで視覚化すると、やはり月・年・日・期など主に季節との関わりが明瞭で、また人や雑穀との関わりも示されていた。図3には、感性分析で抽出されたカテゴリ種（たね）に関し

て視覚化したが、矢張り季節とのつながり、次いで雑穀との関わりを示していた。

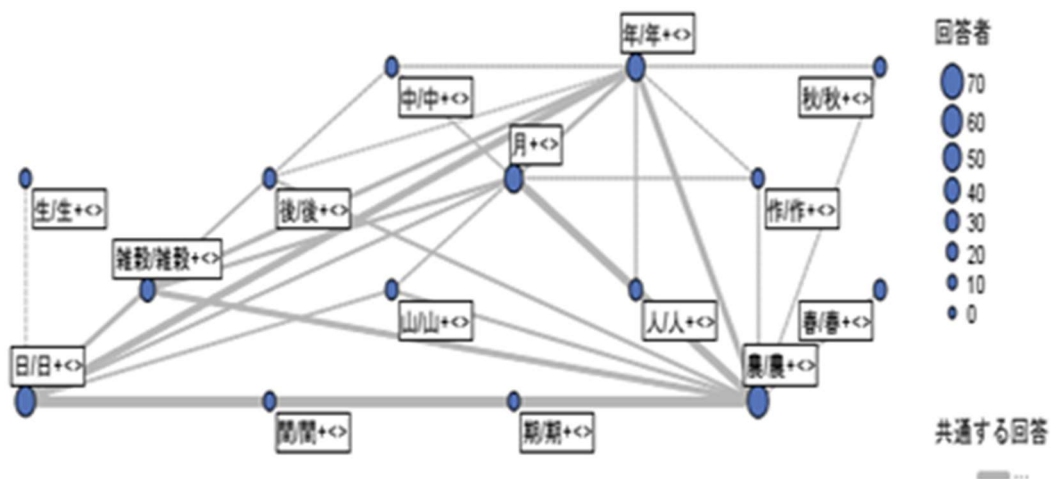
図4には、感性分析で抽出されたカテゴリ山に関して視覚化した。山についても季節との関わりおよび雑穀とのつながりが示されていた。図1との比較のため、係り受け分析でも抽出されたカテゴリ雑穀の視覚化（図5）を行ったが、感性分析と類似の傾向を示した。



感性分析：雑穀、グリッドレイアウト、21-67

3

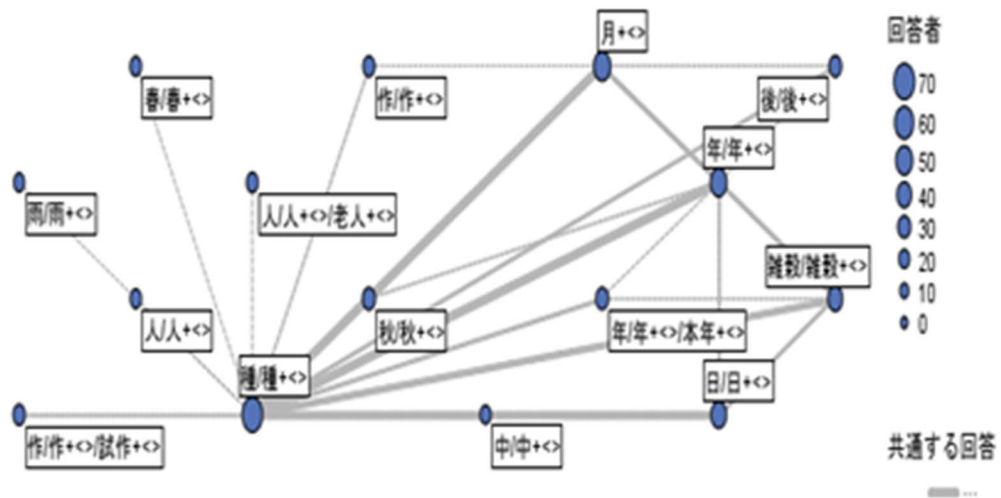
図1. 感性分析の視覚化、カテゴリ雑穀



感性分析：農、グリッドレイアウト17-44

5

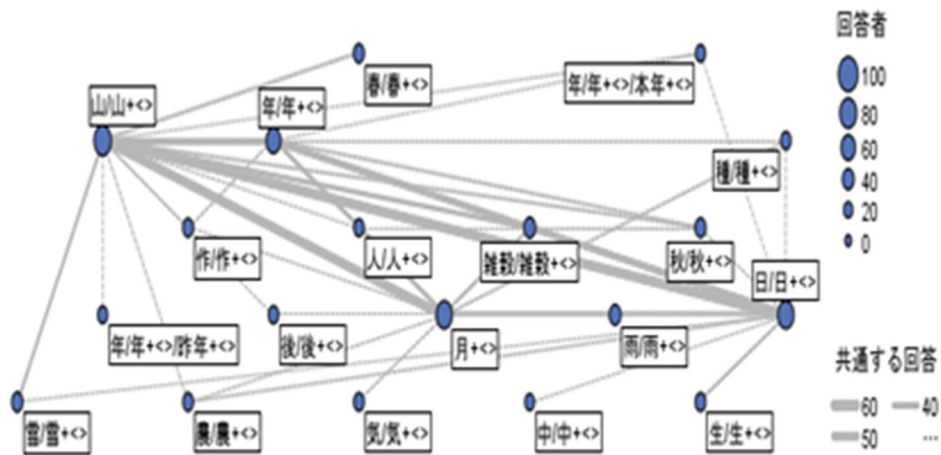
図2. 感性分析の視覚化、カテゴリ農



感性分析：種、グリッドレイアウト 20-48

8

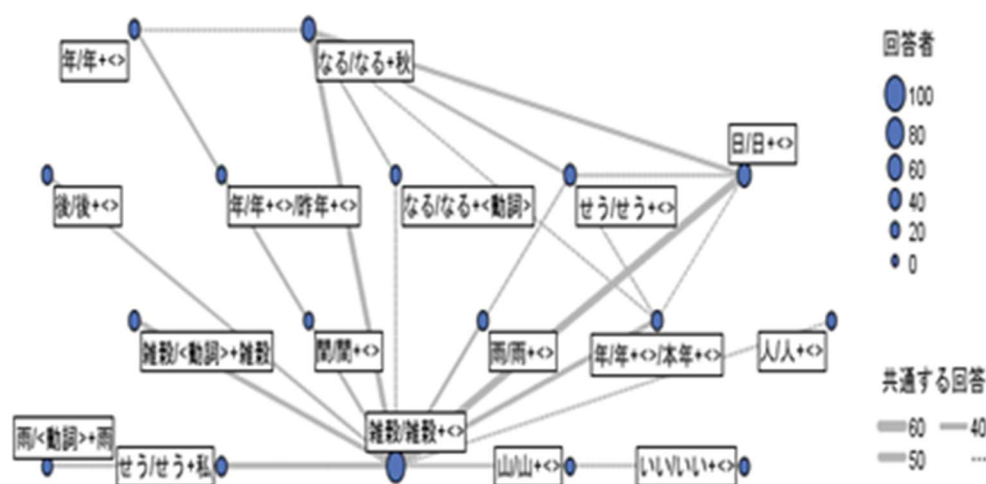
図 3. 感性分析の視覚化、カテゴリ種（たね）



感性分析：山、グリッドレイアウト 20-56

12

図 4. 感性分析の視覚化、カテゴリ山



係り受け分析: 雑穀、グリッドレイアウト 23-51

14

図 5. 係り受け分析の視覚化、カテゴリ雑穀

2. 対談の録音記録

降矢静夫の暮らしから山村農の思想・哲学を学び、書物にする目的で計画的に対談を行い、磁気テープに録音した(表7、表8)。趣旨は降矢個人の見方、考え方を中心に、生のままの語りから、日本人の自然観・文化観の基底には山住の生活があるとの視点から、西原という関東山地の一山村の具体的な生活誌を、雑穀を中心に置いて、記録することである。対談は表7に示した書物の章立てに沿って行った。木俣<季人>の問いかけに降矢<農人>が応じている対談内容の中から、降矢の自然観、農耕、人生観にかかわる語りの一部分を次に抜粋する(付録)。良く録音されていたテープとほとんど聞き取れないテープもあり、これらのうち2本は録音の失敗か内容不明であった(表8)。この録音テープ(60分または90分)は1979年から1984年までの5年間に

10回の対談で20本(合計約25時間)であった。文章化には音声入力ドラゴンヴォイス J11 を工夫して使用してみたが、ほとんど適正な文章にならなかったため、録音テープを繰り返し聞きながら文章化した(文字数にして約20万字)。

個人情報に関わる部分を削除して、対談の全文を下記サイトに公開する。上記の書簡集もすでに公開しているが、一般的な聞き取り調査ではなく、インフォーマント自身が自ら書き記し、また、語っている記録には聞き取りする研究者の解釈の余地が入らないので、とても貴重である。
http://www.ppmusee.org/_userdata/furuyadialogue.pdf

大方は降矢<農人>と木俣<季人>の対談であったが、部分的にはこのゑ夫人も合いの手を入れてくださって、鼎談になっている箇所には<妻人>と記して区別する。

なお、10回目は小林央往とともに降矢を訪ね、小林が雑穀栽培について主に質問をしている。

しかしながら、私はこの頃から北海道やインド亜大陸など国内外でのフィールド調査や実験研究が忙しくなり、当時、この約束を果たすことはできなかった。これを見

かねた安孫子昭二が降矢静夫俳句集『雪虫』を企画して下さったので、降矢には当座これで寛恕をいただくことにした。その後、35年も過ぎて、現在やっと資料を整理し、約束に従いこの一文をまとめようとしている。

表7. 雑穀のむら一山村の自然と文化誌

序

第1章 むらの自然

1. 山(三頭山、楨寄山、権現山)
2. 峠(鶴峠、西原峠、笛吹峠、佐野峠、鞆口峠)
3. 川(鶴川、小菅川、阿寺沢川、尾名川)
4. 植物(作物、雑草、野草、林木)
5. 動物(キツネ、タヌキ、鳥、魚)
6. 畑、焼畑

第2章 むらの生業

1. 農業
2. 林業
3. 炭焼き
4. 運送
5. 最近の産業
6. 今後の産業、発展の方向

第3章 むらの生活

1. 食生活
2. 衣・住居
3. 交通(通勤、通学)
4. 隣村との交流
5. 買い物、旅行

第4章 むらの年間行事

1. 年間行事
2. 農耕儀礼
3. 社寺
4. 石碑
5. 他界観

第5章 むらの文化

1. 伝説
2. 芸術
3. 教育
4. 世相の変遷
5. 村の文化的位置

第6章 まとめ

1. 山住の自然観・文化観
2. 過去から明日へ

あとがき

表8. 対談記録音声テープ

対応項	番号	年月日	備考
1)	n 1	1979.1.23	上書きされ記録不明
	n 2	1979.7.26	原則として農人と季人の対談
	n 3	1979.7.26	
2)	n 4	1979.10.16	
	n 5	1979.10.16	
3)	n 6	1980.2.23	
	n 7	1980.2.23	
4)	n 8	1980.3.22	
	n 9	1980.3.22	
5)	n 10	1981.2.20	
	n 11	1981.2.20	
6)	n 12		紛失
	n 13	1981.3.10	
	n 14	1981.3.10	
	n 15	1981.3.10	
7)	n 16	1981.8.6	
	n 17	1981.8.6	
8)	n 18	1982.3.19	
	n 19	1982.3.19	農人、季人、妻人 鼎談
9)	n 20	1984.10.31	農人、季人、小林央往 鼎談
合計記録 約 2 5 時間			

3. 山村農人降矢静夫の世界

書簡集のテキスト分析で抽出された主要なカテゴリに関わる降矢<農人>の語りの部分を対談内容から抜粋し、次に要約して示した。これらの発言を書簡集の記述と合わせて、心の構造と機能の視点から（黍稷2020）解析し、農人降矢静夫の世界像を解釈してみたい。持続可能な発展目標 SDGs などと大仰に言うまでもなく、彼こそが現代の自給知足を実践し、私が願う素のままの美しい暮らしを体現していた。SDGsの免罪符を襟元に飾っているような、いわゆる知識人とは全く異なる世界観で人生を暮らした農人から、私たちは真の文明、生き物の文明に移行するための生活様式を学ぶことができる。

1) 自然

①西原の景観

農人が暮らしたのは山梨県北都留郡の旧西原村で、現在は上野原市西原となっている。旧西原村は、北は三頭山から槇寄山を経て、西原峠から笛吹峠あたりまでの尾根筋の南面に位置する。南は佐野峠から権現山に至る尾根筋の北面になる。この真ん中を鶴川が上野原に向かって流れている。飯尾から初戸まで12ほどの自然集落がある。農人は標高の高い下城に暮らしてきたが、ここは役場支所、農協、郵便局もあるので、旧西原村の中心地であったようだ。この旧西原村はおおよそ6 kmと9 kmの範囲（面積37.12 km²）の谷筋の底にある小さな盆地様の地形を呈している（木俣ら1978）。農人宅からは槇寄山が背後に、鶴川が南に流れ、その向こうは権現山に至る尾根筋ということになる。ここが彼の生活の場、環境世界であった。対談の中から、自然へのまなざしを取り出してみよう。農人は要約すると次のように言っている。

西原は現在、一番奥の地域になっているから、昔の百姓の形態が残っているのだろう。桧原村

の半分は西原に属していた。桐原への道は狭く馬が通れなかったようで、上野原とは往来が少なかった。むしろ檜原、五日市や大菩薩峠を越えて塩山と往来していた。西原の草分けは尾根伝いに入ってきた秩父系の人だったと思う。佐野峠を越えて七保や大月に出る大菩薩峠への道が一番古いと思う。

②自然観

農人は身近な自然に関心が強く、書簡にも俳句にも数多くの自然事象や動植物の名前が出てくる（表4）。生態的観察も鋭いながら、農耕に敵対する事物や害獣・害虫、雑草にすら暖かいまなざしが認められる。たとえば、次のように述べている。

西原に住んで、雑草でも、虫でも何でも、機会があれば名前を覚えるとか、習性を知るとか、心がけてきた。キツネはハニーバンタムをよく食べる。

ヤマメはたくさんいるが、イワナは深い谷の水量が多いところにいる。西原は水源まで1里、小菅や丹波山は3里はあるから、多摩川のほうに多くいる。

今のほうがマムシに噛まれる人が多いのは、警戒心が薄らいだからだろう。照ると虫が多い。

マツタケは一杯取れたがおいしくない。自然のシイタケのほうが香りがよく、おいしい。

モリアオガエルの保護、ミツバツツジはきれい。妙な時代になって、昔いた虫が少なくなり、変な害虫ばかりが多くなって。セミはクワ畑で幼虫になり、抜け殻が沢山あったのだが、最近は除草剤を多く使うから、抜け殻があんまりない。

自給自足するためには古い人たちのしきたりを100年、200年かけて、自省工夫してきた。普段から山菜を採って、おなかを痛めるから大量は食べない。もともと食べたのはフキ、ワラビ、ギボウシで、クサソテツ、コゴミ、アケビの芽は食べなかった。クズから葛根湯を作る。

アユは昔どんどん取れ、神奈川の相模湖周辺から鶴川を上がって売りに来た。今はダムができ遡上しなくなったので、上野原周辺でアユをたくさん獲る人が食べるくらいで、うるかは高

いから食べられない。

百姓育ちで、花はどうちゅうこともなかったが、やっぱり楽しみだ。しかし、あまりきれいな花は造花のような気がして、好きではない。道端の草花のほうがよっぽど好きだ。

高尾の大見晴らしの一番高いところが西原の人家がある標高で霜害が多い。初戸だけが450mで、晩霜の被害がない。山梨に住んでいて富士山が見えないということは、山陰ということで、百姓にとってはごく不都合だ。西原ではわしらがやらなければ百姓はお終いになる。長作の守重洋作はまあやっている。若い人は百姓はやらず、丈夫な老人がやっている。

山には67歳になって登るようになり、三頭山には元日に5~6回登った。数馬に行くときは西原峠から、笛吹に行くときは藤尾を経て大日峠から、さらに笛吹から人里、帰りは数馬からバスで人里、笛吹、藤尾で、西原に至る。大月には佐野峠を越えた。小菅の長作からは鶴峠を越えてきた。

2) 生業

農耕は、産業としての農業生産ではなく、国権力に課税される苦役ではなく、生きるための業、家族のための仕事としてあつてよい。本来、農耕は苦痛な仕事ではない。農奴のように強制される謂れはもうないので、楽しみに行えばよい。現代において、もちろん農業生産は人間の日々の暮らしにとって、実に最重要な産業である。しかし一方で、人間が生きものとしてさらに自然から乖離しないようにするためには農耕を含む生業はとても重要な営為である。日本の農林業の窮状を憂えるあまりにではあるが、徴兵ならぬ徴農という強要論を主張する人もいるが、私はこれを拒否する。

農耕は自ら家族の食を得る生業であり、根源的な生きるための営み、仕事である。従って、自立した暮らしで誇り高いことであり、自由で、楽しいことである。多くの日本人に捨てられた農耕は、今日ではもう生

き方であり、思想による生活でさえある。誤解や先入観の束縛を解いてほしい。農耕、生業は誇りであり、楽しみなのだ。農耕だけでなく、狩猟、採集、飼育、園耕も楽しんだらよい。生き物の文明を真の文明として移行するように、強要されない自由な好みにおいて、任意な勸農を進めたい。私は生業という自然権をこのように考えている。農人の意見はどうだろうか。次に抜粋してみよう。

①農耕

農人は、いろいろな種子を何でもかんでもよく作ってみた。西原はモチアワの栽培が多く、収量は少ないが味は良い。桐原はメシアワが沢山取れたところだった。アワは標高が低い日当たりが良いところのほうが取れる。シコクビエは標高の高いところのほうが案外取れる。イネやトウモロコシでもモチのほうが収量は少ない。ホモロコシはモチ性だが、ホウキモロコシ（コーリャン）はウルチ性で、後者は誰も食べない。寒さに強いライムギも作ったが、草丈が高く、製粉は粘りが強くおいしくなかった。

ヒエは苗を作って移植していたので、ヒエの雑草は生えなかった。ヒエには3種類ある。食料ヒエ（ではない）飼料ヒエはまずい。南京ヒエは背が低く、台風には強いが、種子がこぼれ、おいしくない。アワにはエノコログサみたいな葉草が多く生える。西原ではインノウと呼んでいる。アワを食べるのは群れスズメだ。田にはコナギが多く生えるようになった。アワ殻は家畜がよく食べる。アワは移植しない。

農人は焼畑経験がない。明治の中頃から大正時代に盛んであったようで、敗戦後しばらくは行われていた。焼畑は熟練がいる。下草を焼いて、1年目にソバ、2年目に小豆、大豆、サトイモは沢寄りで栽培した。

同じ作物でも、ミミズがいない、有機物が少ない、乾いた畑ではだめだ。桐原は西原と比べて、畑が広く、暖かく、日当たりが良い。したがって作物の栄養価が高く、雑穀栽培が多く、こうしたちょっとした差が長寿の原因になる。

家畜にはキビ殻は消化が悪いので与えなかった。キビの連作は7年たてば大丈夫。肥料を与えすぎると、いもち病になり下から枯れ、稔実しなくなる。移植栽培も可能で、生育期間も短い。キビは夏に播くと、75日で完全に取れる。春に播くと100日かかる。

オカボは穂が出る時期までは高温で雨が多い方がよい。西原では日が翳るところの畑なので、オカボの栽培は古くはない。水稻も作りにくい土地だ。夏の荒い雨で耕土が流れて、浅くなってしまう。このため、麦を主体に百姓をする。

イネとシコクビエは定植時期に大差がない。とてもよく似た作物だ。シコクビエは直播すると草丈が高く、穂が不ぞろいになるので、移植栽培が良い。直播栽培では、水稻でもシコクビエでも、何でも草丈が大きく、分けつが多く、遅く出た穂は実が入らない。

ライムギは昔作った。一番寒い畑でも越冬する。成熟が7月20日頃になる。殻が大きくなって厄介だから、畑の悪いところで作る。食料をうんと確保するのは百姓の腕だ。今までムギが取れなかったところで、ライムギを試験してみた。まずいにしろムギが取ればはるかに楽だ。

茶は見た目の良い日陰の大きい葉よりも、むしろ小さい葉のほうが風味がある。肥料やるより、地力で伸びた程度のお茶のほうが上品なお茶ができる。古木のほうがいい。お茶は好きだ。

9月半ばになると本当に日陰になってしまう。田は水の谷と言って日陰になる。西原では山ばかりで、耕地が狭く、食料ができることなく、5反百姓、5〜6反は中農の面積であった。豊作貧乏など苦労しただけで、収穫もしないで腐らせるなどはかわいそうだ。

西原に雑穀が多く栽培されているのは、老人が百姓をやめて新しい仕事をするのができないからだ。跡を継ぐ人はおらず、若い世代はスギやヒノキを植えて山にしてしまった。

世界中、日本中、すぐにわかる時代になると、いいものが見つかれば2・3年うちに真似をして生産過剰になってしまう。

②植林

林業は道ができたので、今のほうが盛ん。スギは馬の背にのせて、五日市へ運んだ。最近ではチェーンソーで下刈りをする。広大な面積の分収林がある。人件費も苗代も高い。

炭焼きは大正時代から盛んで、西原では200戸ほどが行っていた。神奈川からも入山して炭を焼いた。土地があっても、山ではとても収入が下りてこない、農家経営のようにはいかない。何百町歩あっても、木が育たないところもある。個人の山は人件費が高いので、ほとんど伐採がない。

③養蚕

養蚕も副業としてかなり盛んであった。昔は土地の繭は八分がたを糸にして売っていた。しかし、儲からないので、別の家庭内職がはやり、養蚕はお終いになった。西原の糸は染めて節句の人形の髪の毛にした。糸が平らできれいなもののできないので、高級織物にならないからだ。しかし最近はそのような節が出るものを手織り製品とすれば、あるいはかなりの価格になるかもしれない。

④雑穀の種子交換

農人の要望により、季人は国内外で収集した種子を提供した。農人は試作し、評価したうえで、請われれば多くの方々に種子を分譲してきた。生物文化多様性の保全を現場、農耕地で実践してきたと言える。望ましい、本質的な民族植物学の実行者であった。

南信濃の人がシコクビエの種子を探しに来た(1978年)。1月は昨年桐原の長寿村を編集の記者達が健康医学誌の方が来宅、私の話を聞にきました。3月号に玄米雑穀を見直すの特集号のための如くでした。自分でも雑穀を試作したい由、3種類ほど分譲した(1990.3.2)。丹波山や小菅村の人にもシコクビエの種子を分けた。先年、小菅・丹波山・奥多摩へはシコクビエの種を特志家には所望された。本年も私の縁者が依頼されたとの事で、シコクビエ、ヒエを西原の生家へ依頼が有り分譲した。相手の氏名は知

らないし、結果も不明だ。昨年は農協職員達の依頼で猿橋農協へ細々シコクビエの説明を付して分譲した。作ったか不明で職員に一度尋ねたが誠実なしで不明。自分で私の処へ来る人は結果報告が有り、人によれば秋収穫した穂を持参する。こんなことは毎年ある(2002.9.9)。

僅ですが雑穀の種を保持に今も微力を尽くして是非誰でもよく保持を願いたい。今回もヒエとシコクビエの保持のため栽培を見て戴き嬉しく思う。本年は小菅村の特志家所望して分譲、但し以前、丹波山、小菅、奥多摩に分譲したが現在種切れたかは不明である。本年は西原の特産品並に野菜の速売の組合員より予約があった。このグループは退職した元気な人の集まりの組合で、5年の経過である由で、今やヒエの精白が人気の様子だ(2002.10.11)。

ゼンブは弘法大師の伝説がありながら絶えてしまった。西原でもあったと思うが、探したが見つからなかった。高村光太郎先生が岩手で栽培していた人間用のヒエを石井先生からもらった。

昔のジャガイモは疫病か何かでなくなった。今は自家採種ではなく、北海道か八ヶ岳の種薯を買っている。木曽からもらったトウモロコシはモチ性であったが、直ぐにウルチ性と混ざってしまう。もとは甲州トウモロコシの系統ですが、混ざってしまって、トウモロコシほど変化が速いものはないです。でも、何回か良い種子を分けてやった。

3) 生活(食生活)

農人夫妻はすでに高齢であり、身体的には衰えてきているが、自立した生活を営んでいる。インスタント食品やレトルト食品などは用いずに、自家栽培の穀物や野菜を自給し、大方自足する食生活をしている。伝統食を大事にしながら、個人の嗜好に従い、また、野生植物や伝統食材を用いた料理を試食している。

ヒエは皮が二重で加工調整に手間がかかるから、少ししか作っていなかった。

弱いから大事にするので健康の元、ふらふらしている体だけど、百姓に無理すると、わしなんか奇跡だ。わしみたいな収入で生活している人はいない。最高生活、金を出してわしの生活はできない。そういう考え方にならないと、夢を持ってもどうにもならない。兼業農家でほかの収入が主だ。5反の畑から得た収入で賄っていかなくてはならない。

西原では自給自足だったから、食べ物は丁寧な食べ、凶作に備えて蓄えていた。明治期になって、食料が少ないときは神奈川あたりからアワを買って食べていた。それで西原では、買って食べるものを相模の穀という。戦前、神奈川の水の不便な所ではアワやオカボを大量に栽培していた。

食べ物はその人の好き好きだ。桐原では雑穀を多めに食べていたことが、長寿の原因だと思う。西原と比べて、隣村の桐原は畑の傾斜が緩く、日当たりも良いので、労働が楽である。今は米(イネ)を食べて、長寿村は返上している。若い人は白米、肉・魚、インスタント食品を多目にとるようになった。親戚のおばあさん(桐原94歳)は野菜物ばかり食べていた。丹波山村のいとし(97歳)は四足獣を短命になると言って食べなかった。

栽培量が少なくても、味が好ければ、現在でも食べているはずで、食べにくい、味が悪いものから栽培をやめていく。日本人は粘るものが好きだ。モチアワは食べるが、メシアワは嫌いだ。自家栽培のアワはよく食べたが、買うことはなかった。西原では水田は少なかったから、アワをうんと買って食べた。キビの香りが嫌だと言う人も、アワのほうが良いと言う人もいる。人間ていうやつはいろいろだ。古い人はオオムギをよく食べた。おバクをそれほどおいしくなくても、食べたい。子供の頃からオオムギに白米を少し混ぜて食べてきたので、それほどおいしいとは思わないが、飽きない。それが人間の習性だ。年を取ると濃厚なものはだめで、野菜がいいんだか、大量には食べないが、加工食品は好きません。

日本のコムギは最高だ。ほうとうは季節の野菜を入れて、味噌で作り、ねっとりしていて満腹になる。お米三食は良くないので、夜はほうとうを食べる。昔の物ばかり食べてね。今のはあんまり食べたくない。若い人はみな軟らかいものばかり、濃厚な食事は好まない。雑穀が健康に良くても、イネが余る時代に作る人はいなくなる。食糧事情が悪い時代が来ればまた復活するかもしれない。雑穀は加工が面倒で、これも栽培が減る要因だ。大量生産している土地は良いだろうが、小規模な農業は立ち行かなくなるので、日本としてはえらいことになるだろう。

4) 信仰

農人はどちらかと言えば、アニミストなのだろうか。次のように話している。

西原は山だから、高い山に神がいる、仏がいると感じていると思う。お盆でも正月でも高い山からなんでも来るように迎えていた。山の神は各家で祀っていた。団子や筒酒を供えた。大正月には門松、小正月にはヌルデで門男、アボ、ヘボ、鎌や鋤を作る。座敷にはヤマボウシに繭玉を模した団子をさして、ダンゴバラを飾る。奥山は今では道が荒れ、草木が生い茂って、遠くまで行かないと、アボ、ヒボを作るヌルデはない。門男は自分の家で味噌を作るときに、燃やしてしまう。木が爆ぜるので、魔よけに使うと考えている。

わしは無信心だ。仏教は古事記の神話みたいな面、架空がうんとある。宗教家は、仏教が盛んになっても実態が伴わない。悟りは年をとってのあきらめだ。神様のことに對して、西原はもともと伊勢系ではなく、諏訪や出雲の神を信じていた。あんまり伊勢系のお参りばかりしていたら、先祖の神様が腹を立てるのではないかと。今、素直な気持ちで、出雲や諏訪神社のほうに崇拜しなければならない。神仏習合の際に、朝廷の神様に祭神を切り替えてしまった。恐らく、日本の信仰は、特殊な人は別として、そんなものだから、新興宗教が非常に増えたのではない

か。創価学会、立正佼成会でもこてこてに議論したので、わしのところには誰も来なくなった。母ちゃんは、あれ信者だ。

<妻人>おじいちゃんがなくなるときにね、佼成会でね来て呉れた。佼成会に入らないと、おじいちゃんが死んでしまうというんですね。そうしたら入ってね。あの22日、佼成会の生まれた日かね。縁日でね、それに行かなきゃって行っただす。4時のバスで帰ったら、もうおじいちゃん死んじゃってね、もう本当にね、お他所の人が沢山来ていてね。私はどうしていいかわからなかったね。その時は、一番終いッ子がまだね、一歳ちょっとだった。

旅行は天理教が一番安い。旅行に行っても景色は見ない。花見に行っても、花は見ないで、酒を飲んだ話ばかりでおかしい。わしの肩書は農人だ。宮城に行ってみたら、御用商人や工事の車ばかりで、建物も洋館めいたものが多い。東御苑がいい。世の中どこを見てもあんまり変わらなくなっちゃった。明治神宮のうっそうと茂った樹林にはびっくりした。神社庁の主催で年に3~4回、150人くらいの見学の催事がある。歌舞伎は見たことがないので行って見て、満足した。

5) 文芸

農人を訪問する文人は少なからずいた。彼の作品は俳句に凝集されている。500句に及ぶ句集『雪虫』(1998) およびこの増補改訂版『降矢静夫俳句集、躑躅やしお』(安孫子編 2021) を参照していただきたい。また、知友への書簡は数が多く、季人あて(約300通)については本論で分析したが、安孫子昭二あて書簡(約500通)はいずれ公開される予定である。晴耕雨読こそ農人の趣味であり、俳句と書簡が主な表現手段であった。農人は次のように話している。

今は句をあまり作らない。わしも退屈しない性格で、幸福だ。俳句は体が忙しくてもできる。暇があっても神経に触ることがあるとだめだ。俳句にしる文にしる、結局は自分に見せるもの

で、そのつもりでやればできる。演説だって、人に聞かせるということではなく、自分自身に言い聞かせるのが演説だ。

色紙をもらったが、俳句では字の配置バランスが取れないので、漢詩を試みた。漢詩の専門家の説明を受け、無鉄砲に一応作ってみた。

酒を飲まないから晩酌の時間が空白だ。わしの晩酌は頭の運動で、好きな本を読んだり、何か書いたりすることだ。若い頃、暗いところで読書をし過ぎて近眼になってしまった。今みたいに本はたやすく手に入らなかった。秋になると、神田の古本屋に本を買いに行こうと思ったが1回も行かなかった。今は割合本は買えるので、八王子駅のそばの熊沢書店まで、年1回本を探しに行った。

西原は北都留の山陰だから、鶴陰と呼ぶことにした。西原のサイはいくつかの当て字があるので、サイの意味は賽の神を祀ったところかと思ったが、根拠はない。桐原にはユズがあったからか、柚と書かないのか、古い時代には漢字は読みに重点があって、後に意味を考えるとわからなくなる。

6) 人生

①人生観

農人の西原での日々の山里暮らしについて次のように来し方行く末を率直に語っている。

わしらは村単位ですからね。どこを中心にやっているのかさっぱりわからない。めちゃくちゃで收拾がつかない。基本線がないとやっている人が自分で困ることになる。自分自身の責任のある自由だったら、行き過ぎにはならないけれど、ただいっただけ言って考えなければ、收拾がつかなくなる。わしらあまりしゃべらないで、笑っているだけで、皆が良ければよかろうと言うくらいだ。しょうがない、それ以上言えないから。大変な世の中だから、変な交際費がかかるが、一族が長く住んでいるので、助け合って田舎は暮らしていける。百姓しながら西原に住んで、留守居だから、あとの者に継ぐくらいは

務めだ。

人間は楽に暮らせるところにだんだん集まってくる。人が集まれば生活状態がなんとか食える。西原は暮らしが悪いから人がいなくなる。たまに来るといいとこだと言う人がいても、やっぱり暮らすには大変だ。この頃、贅沢になった、それだけ文化があらゆるところで上がったというか、日本中どこも特色がだんだん同じになってきたということだ。

儲からないことばかりやって、貧乏して、だからわしは根性を出して、自分は人の厄介にならないという気持ちで、笑われようがどうしようが、鎌を担いで生きてきた。勤め人になって、人に言われて働くのもつまらない。わしは腹が立つと遠慮会釈なく、誰にもかみつく。人の機嫌を損じても、自分に損はないからね。

生活が周囲に比べて開けて行かない厳しい陸の孤島で、現金収入に変えられる仕事が急に増えてくれば、雑穀ももっと早く姿を消した。それが遅れただけだ。今日、西原で百姓して生きている、ばかばかしいことと皆感じている時代に、この2~3年間に急になってしまった。百姓やっても、疲れだけが取り柄で、一銭にもならない日が何日も続く。わしらは自分で食べるものを自分で作って、なるべく金を使わないで、食べていく、ほかに方法がないからそうしている。

②戦争体験

農人は西原から外出することは少なく、せいぜい近隣都県に盆栽の視察や観光にまれに出かけたに過ぎない。彼にとって、人生における大旅行は第2次世界大戦時に、海軍航空隊整備兵として徴兵され時のみであった。1943年10月に横須賀で海軍航空隊入隊、父島から硫黄島に移り、1944年10月に栄養失調で内地送還、横須賀および湯河原の病院で療養後、大分の航空隊に配属、敗戦で除隊し、原子爆弾被弾後の広島、京都、さらに東京を経て西原に帰るまでの大遠征であった。

硫黄島は西原より狭い面積(23.73 km²)の

火山島で、現在は東京都小笠原村に属している。東京区部から南海上 1,200 kmにある。第2次世界大戦時には、日本とアメリカの激戦地となり、日本軍戦死 20,129 人、アメリカ軍戦死 6,821 人、戦傷 21,865 人であった。最高点は摺鉢山 (169m)、土壌は火山灰で保水性はなく、飲料水などは塩分の多い井戸水か雨水に依拠していた。戦前は 1,000 人ほどが居住し、硫黄採掘やサトウキビ、コカ、レモングラスなどの栽培、漁業などをしていたという (Wikipedia.org/wiki/硫黄島、硫黄島の戦い)。次のように農人は戦時でも百姓の視点で事象を観察してきた。

農人は百姓だから、島民に聞くと、サツマイモが主で、サトウキビ、コカイン、パイナップルを栽培していた。穀物ではイネ (米) は内地から移送し、キビとアワは栽培していたが主食ではなく、楽しみに食べる程度であったという。農人は滑走路づくりに従事していたが、胃腸が弱かったので、栄養失調になって 1944 年 10 月に内地送還になった。横須賀の海軍病院から湯河原の病院に 1945 年 2 月までいた。同年 2 月 19 日に硫黄島はアメリカ海兵隊の強襲を受けて、3 月 17 日には硫黄島の日本軍は玉砕した。何もかも、大本営発表と逆であった。農人は病弱ゆえに硫黄島での戦死を免れた。さらに、大分の航空隊では飛行機もなかったの、農耕班を編成して田植えをしていたという。敵機が来ても硫黄島で経験しているのでへっちゃらだった。しかし、広島島の爆弾はびくびくだったが、それからわずかにして終戦になった。

海軍の兵士は狭い艦船に乗るので、一人一芸ではなく、いろいろな技術を習得せねばならず、10~15 人力の精兵になるには数年の訓練が必要である。農人のような病弱な丙種徴兵の促成では役には立たない。むしろ、うちに残しておいて百姓させておいた方が、一人前に働き食料増産の役に立った。敗戦後の状況は凄まじく殺気立っていて、平時のような同情心は少なく、戦病の人さえも病院を出されたら、だれも同情せず、かわいそうだった。

7) 教育と学習

受験教育による学校教育歴と自己学習による自由学問歴とは全く異なった内容にある。高校生の時に、NHK テレビ名古屋で討論会 {中学生日記の試行番組} に出たことがある。その時の話題は、ソニー創業者の井深大の学歴無用論だったと思う。この頃から学歴とは何だろうかと考えてきた。東京学芸大学に 40 年間勤務して、同僚教授や学生たちの振る舞いを見てきて、もちろん立派な研究者や学生も多数いたが、それでも学歴は教養を担保しているのだろうか疑問に思うようになった。そこで、教養とは何だろうかと考え始めた。私は、教養とは思い遣りであると理解するに至った。さらに、世俗で苦勞するうちに、学校教育歴と教養とは必ずしもそれほど高い相関はないのではないか。教養とは第7感良心である (スタウト 2005) と知ったからには、なおさらそう思えるようになった (黍稷 2020)。

私は小学生の頃から学校の先生に反発してきた。高校生の時にも受験教育が嫌いで、優等生ではなく、受験エリートにはなりもしなかった。したがって、学校教育歴よりも自由学問歴の方を重んじてきた。学校を選ぶのではなく、自ら尊師を選び、私的に師事して学んできた。生きた師匠もあれば、歴史的な著作の中で私淑した尊師もある。学問の自由とは、自ら好みの学問の師を選ぶところから発すると思う。

①侍の修養

農人には教育に関して一家言がある。興味深い事例は隣家の降矢敬雄参議院議員のおばあさんのことである。

侍の娘で、19 歳ころに九州から東京に嫁に来た。御殿奉公に行って行儀見習いをして、裁縫、漢学、和歌、またある程度の武芸百般ができる。侍はこの教育を厳しくやった。こうした修養によって侍は侍になる。土百姓と卑下されるが、修養すれば結果は侍と同じになる。人間は苦勞しないとだめで、今はみんな平等だから、自分

で自分のことを教育しないとだめだ。今の子供は際立って理屈は達者だが、みんな楽をして金をうんととるという気風で、根気がない。

親となり、子になるには先祖からの責任がある。それを自覚して変なことはしてはいけない。若いうちは、事変から、戦争、戦後とね、日本で一番厳しい時代だったから、子供なんかただ食べさせるだけで、大事にしてやれない。小さいうちは怖いから親の言うことを聞くが、大きくなると親なんかに負けない気になる。親に似ないつもりで生きて行こうと思うが、親に似てくるものだ。親は正しい行動をしていないと、子供はよく見ている。

子を育てるのは大変だ。親がちゃんとした生活をしていないと、いくら子供ばかりを叱っても、人間が出来上がるものではない。親の素行を見て真似る。自分が黙って勉強していれば、そういう家の子供はどこかで見ていて親の真似をし、引きずられ、家風のようにごく自然に勉強することがそんなに負担がない。失敗してもあきらめない。人間としての根性、自尊心を持つことが大事だ。伝統や先祖を大事に誇りに思うことだ。日本人は誇りを持っていない人のほうが多い。アメリカ化しすぎた。いろんな分野でなんでも（アメリカの）真似が多い。

②学歴

受験教育への対案として考えるのは、学校教育履歴ではなく、個人学習履歴の重要性である。最近、総合的な学習の評価方法に用いるポートフォリオは、学習活動において作成された作文、レポート、作品、テスト、活動の成果物をファイルに入れて保存することである。受験教育で試験の成績を評価するよりも、日々の学習成果である作品でこそ、達成度は認識でき、さらなる発達につながる。農人は次のように言っている。

学校教育は基本で、本当の勉強は就職し、所帯を持ってからすることだ。最近では教育ブームでどこでも教育熱心だけど、何か欠けている。教育はうんと受けているが結果的には大した

ことはない。時代が進んでいるのか、なんだか分からないが、煎じ詰めると楽しんでうんと金をとるとのことだ。人生せっかく生まれたからには何かやってみなければ惜しい。目標にした価値のために取り組んでやり抜く。自力で災難を乗り越え、更生する力があつたが、今の制度ではよほど心がけの良い人は別として、あまりに他力本願で、救ってもらおう、輪をかけて取ってやろう、人間の欲望に限りはない。実際は金にならないことをやっている方が楽しいはずだ。

今年（1980）、小学校の生徒が6人になった。農人の頃は70人いた。六藤分校は閉鎖することになった。田舎に来たって、百姓なんかあんまりやらなくて、子供も休みにする仕事は何もない。わしも年寄りだから、子供が遊んでいたから全くおかしいと思う。昔の教育では、子供に働け、働けと言う教育だったです。丈夫であつたら、バカでも何でもまじめに働けば食べていける、生きていける。しかし、今ではそんな理屈は通らない。働きすぎると生産過剰で、戦争を勃発させるようになってしまう。人間はあまり利口でないので、一度歩き始めたら、止められないですから。震災でも来るとえらいことになる、悪いとわかっている、それを大丈夫として、手が付けられなくなる。

私は小学校だけしか行かないので、孫の中学の地図をかりてアフリカやインド、中央アジアの国々の名を覚えたくて80才を越して勉強です。おかしいでせうね。大学どころか、中学は出なかったなあ。おれ、小学校だけでは、今になって矢張り旧制中学程度の学が侮られます。小学卒業後只農一筋に生きてきましたが、山村の農の手造り農人の時代逆行してきた宿命は侘しい（1999.7.8）。

8) 社会

私たちも日本大学の人たちが民家を借りていると聞き及んだので、西原調査のために民家が借りられないか探してみたが、1980年頃には借家などとても見つからなか

った。このころまでに、特段親しかった明峯哲夫が国立や日野では飽き足らず、藤野から上野原へと畑地を探していた。彼は有畜農業を実践してきて、さらに都市を耕すという理念を提唱していた。私の紹介だったと思うが、明峰は農業実践の場を探して、農人を頻繁に訪ねるようになっていた。時の理論家であった彼がその後どうしたのか音沙汰がなくなり、知らなかったが、インターネット検索をしてみたところ、2014年に病気で亡くなっていた。遺稿著作集の年譜によれば、1981年5月に都市内での耕作をより重層的に充実させるため、近郊の山間地に親農場を構想し、土地探しを続けたが、実現せず、と記されている(明峯2016)。農人は要約すると次のように考えていた。

山村での自給自足は今では難しい。自給肥料ではできないので、金肥を使うようになって病害虫が多くなった。農業そのものは投げ出した時代に来た。農外収入がなければ、百姓だけ真剣にやることはできない。ひっそりと田舎で暮らすのは一つの憧れのようなもので、田舎で半年や一年住んでも嫌になり、土地で好きに何をやるというてもうまくいかな。それはねえ、生活が緩やかになってね、半分遊びを兼ねた百姓でこれをやるなら、長年勤めて年金をそろそろもらうようになって、生活の保障を得て、大切だからといって、西原で百姓やるのなら成り立つだろう。どうやったって引き合う物じゃない、今は時代がそんなに甘くない。農人は具体的に述べている。5反だけでは暮らせない。

普通に生活すること自体が貴く、人間として政治家だけが貴いわけではない。西原は老人ばかりになる。老人はやることがないので、退屈して話は愚痴ばかりになる。過去を楽しまないで、将来を楽しんで、そのほうが元気があっていいんです。

4. まとめ

私の短い人生でも、犬に三度噛まれ、自動車にはねられ、ラグビーで失神し、不注

意で自転車で転倒し顔面を、書架で指を負傷、働き過ぎで腰痛、何かと満身創痍である。しかし、これらの身体的傷はなんとかおおよそ癒えた。実際は、職業上の人間関係で少なからずの裏切りに合い、むしろ満心創痍、心的外傷後ストレスを、時には思い出すので、囚われているに違いない。私は山村が好きで、山村のために、私的な名利と無縁に働いてきた。したがって、繰り返しムラ社会に撥撫されてきたことを公表したくはなかった。だが、余生も残り少なくなり、この世に恨みを残さないために、事実を記録、解析しておくことにした。不快な思いを解析するだけでは、心の平衡が保てず、鬱陶しいので、個別の三部作として、第一論考で希望のある誠実な農人を紹介、次に第二論考でムラ撥撫の事例を比較、さらに第三論考で公正な理論的論証を加えることにした。

この国では、基礎研究の仕事においてさえも、すべてが商業主義に取り込まれ、剽窃や換骨奪胎が少なからず横行している。最初に苦勞して創作したことが尊敬されないで、要領よく二番煎じに真似たものが商品となる。あるいは、舶来翻訳ものが持て囃され、独自に創作されたものは関心を持たれない。残念なことに、これは明治維新の文明開化以来、日本の学界やマスコミ界の変わらない歴史的慣習である。この結果、学問の独創的成果が評価、蓄積されてこなかった。何にしても、この国では毎日椅子にしがみついていないと、席を失い、消し去られてしまう。学問内容の高さや深さで尊敬を受けるのではなく、椅子の大きさで名利が保持されるので、このために老人は若者に席を譲らない。自分より能力が低いものを仲間を選ぶのは、保身ゆえであり、これでは良いチームができず、後継者も育たない。日本の大学の学問水準は衰退するばかりだ。

これらのことはいわゆる市井人、門外漢

の農人も指摘しているところで、農人の直観力と教養の高さを窺い知ることができる。心の構造と機能に関しては木俣（2019）や黍稷（2020）で論考したので次に要約する。そこで、この仮設に依拠して、書簡のテキスト分析と対談の内容から農人の心の構造と機能の解析を試みた。

心の構造における一般的知能は、ピアジェの見解に従えば、学習及び意志決定についての汎用の規則によって構成されている。基本的特徴はどの行動領域であり、経験されたことに照らし合わせて行動を修正するために用いられる。学習と問題解決のための包括的な規則群。博物的知能（直観的生物学）は自然界の理解、動物、植物についての思考。居住地域についての地理学。社会的知能（直観的心理学）は他の個々人とやりとりする心を読む。個人間の社会関係を調整する。社会的な相互作用、社会的柔軟性の能力。技術的知能（直観的物理学）は道具を作り、操る。環境から資源を取り出し利用する。言語知能は感情や情報を伝達する（ミズン 1996）。

ミズンの論考に加えて、現代都市民における心の構造を考察してきた（木俣 2019）。さらに、超克を進めるために、心の構造における一般知能の認知流動性が心の機能を高め、心の統合をもたらす可能性について考察の端緒を得ようと試みた。そこで、心の構造はその機能と一体的に作能することを考えてみたい。

心の構造の諸知能はミズンの見解によれば狩猟採集民において統合されていたが、次第に、集住する都市国が成立し、その権力支配が強まるにしたがって、諸知能の領域は再び分断されるように向かった。具体的には、小集団における自治的な社会的知能は国社会の制度に依存するようになった。その後、諸産業が発達し、18世紀半ばには産業革命が起こり、以来とりわけ現代では高度な科学技術による生産商品がブラック

ボックス化し、日常生活における技術的知能さえもほとんど無力無用になり、自然と乖離した都市的生活は五感の鍛錬を阻害し博物的知能を縮減し、言語知能は情報処理機器に代替し、これまた直接的な意思疎通を衰微へと導いている。広く普及した公共学校教育制度での画一教科分断は全体的な認知流動する一般知能を发育させない。さらに、現代人の心の構造の主要部は代替言語知能としての情報機器で、これは効率的なアルゴリズムではあるが、非効率的な良心はそこには組み込まれ得ない。

心の機能を支える五感（視・聴覚、味・嗅覚、触覚）は美を感じ、第六感（直感・直観）は真を観ぬき、第七感（良心・教養）は善を行う。すべては天性（生物の遺伝子ジーン、gene）のみならず、師友を求め選び、自律した学習（文化の自己複製子ミーム meme）によって、粗野・野蛮から洗練・文明の品性を鍛え磨くのだ。素のままの美しい暮らしは自然と文化の粋であって、自然が粗野、文明が洗練と固定的偏見してはおらず、むしろ現代文明が粗野で野蛮な状態にあるのではないのかを問いたほしい（スタウト 2005、木俣 2019、黍稷 2020）。

農人は自然に接して暮らしているので、博物的知能は当然ながら高い（表 4）。社会的知能は狭い生活環境世界に暮らしているながら、交友が広く（表 6、図 4）、他地域、海外の世界にも関心があるので、高く維持されている。地域社会では適切な距離をもって交際を保っている。技術的知能、特に農耕については研究的に実践している（表 5、図 1～3、図 5）。言語知能は俳句で鍛えている。一般知能の認知流動性や直観も鋭く鍛えられている。これらのことはテキスト分析から明確になった（表 1～3）。

すなわち統合的な心の構造が健全に築かれていると、僭越ながら言える。年老いて体も衰えて、目を患い、それでも晴耕雨読の暮らしで、自然の中で、五感（視・聴覚、

味・嗅覚、触覚)は美を感じ、俳句を作り、書簡をしたためる中で、第六感(直感・直観)は真を観ぬき、自ら読書し、学び、さらに多くの訪問者、交友者から学び、思索し、第七感(良心・教養)を豊かにしている。素のままの美しい暮らしを実践する農人である。ミズンが現代の狩猟採集民に認めた統合された心の構造に匹敵するほどの心の構造に加えて、豊かな機能が農人に認められると、師に対して僭越ながら考えるに至った。

注：テキスト分析の用語説明 (IBM. SPSS/Text Analytics for Surveys, ver. 4.0.1, Japanese) ;

テキスト分析とは、テキストを対象とする分析手法で、テキストから有用な情報を抽出して、本質的な情報を少ない個数のカテゴリで表現する定性分析である。日本語で実行できるのは感性分析および係り受け分析である。

感性分析は感性とみなされる表現(主に述部)を抽出し、その感性の示す主題が出力される。係り受け分析は係る語と受ける語の関係性が出力される。

(1) カテゴリ(コード); テキスト分析の最終結果。

(2) ディスクリプタ; 文書の要約や文書中の重要な語句などを指す。キーワードとも呼ぶ。

(3) レコード数; データベース内のテーブルを構成する単位のひとつで、一行分のデータを指す。

(4) コンセプト(キーワード、語彙); テキスト内の意味語。

(5) タイプ; コンセプトをグルーピングするための文法的、あるいは意味識別子で、コンセプトが少なくとも1個含まれている。品詞タイプと感性タイプがある。なお、感性タイプには肯定的<良い>、否定的<

悪い>、およびその他<その他>がある。さらにそれぞれ、細かいタイプに分かれ、合計82種類がある。

(6) パターン; コンセプトとタイプを組み合わせたもの。コンセプトパターン(識別子)はコンセプト+<タイプ>、タイプパターンは<タイプ>+<タイプ>になる。

(7) カテゴリの視覚化; 複数のカテゴリ間で共有されている回答の個数に関する情報を表示する。グラフの各ノードは1つのカテゴリを示す。

謝辞

本論の対談相手の降矢静夫さんに親しくお付き合いいただき感謝します。本来なら共著の書物にして30年前に世に出すべきでしたので、かなわなかったことをお詫びします。御奥様降矢このゑさんにはお茶や昼食をご配慮いただき、御礼申し上げます。研究者人生を始めた頃で、たくさん励ましてくださり、とてもありがたかったです。安孫子昭二さんには後になって『雪虫』を編集して下さり、降矢さんもととても喜ばれて、とりあえず、私は気が楽になりました。今日まで、彼には何かと励ましていただきとても感謝しています。畏友小林往央さんは西原にも2、3度訪問して下さり、鼎談(1984)の記録によって久しぶりに声が聞けてうれしかったです。この10年後に、彼はアフリカ、マリの調査でマラリアにかかり、帰国後急逝(1994)しました。降矢さんは2003年に他界され、今、私は2021年のCOVID19大流行の只中に何とか生きています。皆さんとの親交の記録をここに残して置きます。

関連文献

木俣美樹男・熊谷留美・佐々木典子・武井富士子・中込卓男 1978、雑穀のむら 特に雑穀の栽培と調理について、季刊人類学第9

巻第4号：69-102。

木俣美樹男・横山節雄 1982、雑穀のむら 特
に雑穀の栽培・調理の残存分布およびその
要因について、季刊人類学 第13巻第2号：
182-205。

降矢さんを囲む会編 1998、雪虫、降矢静
夫 俳句集甲武境の村・西原に生きて。

木俣美樹男 2019、日本雑穀のむら、第3章
関東地方の雑穀文化複合、第4章関東山地
中部地域の雑穀文化複合

[www.milletimplic.net/milletsworld/mill
etsn/jnpmilvil.html](http://www.milletimplic.net/milletsworld/mill
etsn/jnpmilvil.html)

黍稷農季人 2020、素原の超個人主義、
www.milletimplic.net/essey/

文福洞先斗 2021、ムラ社会における心の構
造と機能の事例分析、民族植物学ノオト14：
76-115。

黍稷農季人 2021、孤独と孤立～ムラ社会の
撥撫に抗う心の構造と機能、

www.ppmusee.org/goods.html/pdf

引用文献

安孫子昭二編 2021、降矢静夫俳句集『躑躅
やしお』、民族植物学ノオト 14：9-39。

<http://>

明峯哲夫 2016、生命を紡ぐ農の技術、コモ
ンズ、東京。

ミズン(S. Mithen) 1996、松浦俊輔・牧野美佐
緒訳 1998、心の先史時代、青土社、東京。

The Prehistory of The Mind.

スタウト(M. Stout) 2005、木村博江訳 2012、
良心をもたない人たち、草思社、東京。

参考文献

日本アイ・ビー・エム株式会社、操作コー
ス、Text Analytics for Surveys 3.0

日本のムラ社会における撥撫発生の事例分析

文福洞先斗

Case Studies on the Occurrence of Ostracism in Japanese *Mura* Society
Pont Bunbukudo

返事はついたのですか 遠い日の異国へ
父よ あなたに似合ったでしょう 春の大連
(松任谷由実、大連慕情の一節)

ファイト！ 闘う君の唄を 闘わない奴等が笑うだろう
ファイト！ 冷たい水の中を ふるえながらのぼってゆけ
ファイト！ (中島みゆき、ファイト！の一節)

はじめに

40 年以上前から、降矢静夫農人は古守豊甫医師がどんなに頑張って長寿村（穀菜食）を勧めても、山村農が滅びることを自覚していた。それでも彼は、その後 30 年ほど、他界されるまで雑穀栽培をして自給自足に近い暮らしをした。中川智農人は、父君中川勇農人が降矢農人の畏友同級生であったこともあり、彼らの遺志を受け継いだのだろう。したがって、私も彼らの志を受けて、どんなに可能性が低いとしても、あきらめずに、生きている限りは自分の言ったこと、したこと、とりわけ雑穀を継承することに責任を取る。

「いつまでムラ社会をやってるつもり」と題して、文月（2016）は要約すると次のように述べている。

ムラ社会の特徴は、①世界を身内とヨソ者に二分割する。②身内には同質化を強要し、自分たちの常識から外れないようにさせる。③身内を妄信的に信頼できるものとみなし、これを裏切らないことを美德とする。一方で、ヨソ者には強い警戒心、敵対心を持ち、冷淡になる。④個人の幸せやあらゆるルール（法律）よりも、ムラの掟が最優先する。現代日本のイジメ、児

童虐待、排外主義、ブラック企業も、ムラ社会に起因した問題である。ムラ社会にしないために大事な考えは、立場に関係なく是を是とし、非を非とすることだ。是々非々を貫くと、薄情、冷たい人間と呼ばれる。ムラ社会では、身内での一体感や忠誠を示すために、ヨソ者を軽視し、攻撃をする。ムラ社会の人たちは身内から外されることを恐れ、身内の顔色をうかがう。誰にでもひどいことはせず、ムラ社会の掟より、優先する基本的人権（自然権）は誰にでもあるとフランスの人権宣言は記している。今こそ目指すのは、ムラ社会からの脱出だ。

私は個人主義、自律の立場から、この文月の意見に共感する（黍稷 2020）。社会人になって以来、民族植物学研究を職業として雑穀調査で、日本を含む世界各地の農山村を 50 年近く旅し、幾百の田畑、何百人かの農民を訪ねて、生業や農林業、調理や暮らしぶりについて、直接面接聴取し、野良の作業を観察させてもらった。さらに、雑穀などの起源や伝播の研究を進めるために貴重な在来品種の種子も分けてもらってきた。山村農の人々から個別に厚意を寄せられこそすれ、嫌な思いをさせられたことはほとんどなかった。

民族植物学調査は生身の個人の人生に関わるので、これらの直接経験には多様な喜怒哀楽があったが、私は多くの素晴らしい人生の先達に厚い好意を抱いた。したがって、この調査観察からの分析には楽しみとともに、それなりの苦痛が伴う。特定の地域に思い入れをして、多くの人々の人生に幾らかなりとも参与したからである。さらに、東京学芸大学に職を得た者として、子供たちが自然の中で遊び、学べるように環境学習実践とその理論を研究するとともに、山村の伝統的な知識体系・生業技能を継承するために山村振興の行政策提案にも関わってきた。この過程で村落社会の本性を参与観察して理解を深めてきた。

私はモーセの十戒の 8 番目、隣人に関して偽証してはならない(日本聖書協会 1995)、およびブッダの八正道の正語に従う。私は科学者としても自ら得た事実に基づいて考察してきたので、偽証も隠蔽も、ましてや捏造などとは無縁である。しかし、私が誠実で、いかに正直でも、残念なことに、人はいつまでもかな(悲、哀、愛)しいのだ。このために考察から個人の情緒を除去しきれないので、きっと誤認や誤解もあり、その分は割り引かなければならないだろう。したがって、読者にはご自分で斟酌、判断をしていただきたく、お願いしたい。私が書いたことにより他者(たとえ加害者であっても)に不利益があつてはならないので、私および他の研究者による公刊文献に記載されている者以外の登場人物はすべて地域ごとに仮名 ABC とすることにした。したがって、地域ごとに ABC は異なる人物であるので、直接関係者にしか ABC は特定できず、個人情報の保護義務は履行できると考えた。参考として、法的根拠を次に記述する。

＜参考法的根拠＞

- ① 改正民法 2020 年 4 月 1 日施行 消滅時効(債権等の消滅時効)第 166 条、(人の生命ま

たは身体の侵害による損害賠償請求権の消滅時効)第 167 条： 条件によるが最長 20 年間である。

② 通信の秘密：日本国憲法第 21 条第 2 項：検閲は、これをしてはならない。通信の秘密は、これを侵してはならない。＜解説＞ 積極的知得行為の禁止：検閲行為をさす。漏洩行為の禁止：職務上知りえた情報の漏洩。通信当事者以外の第三者の行為のことか。

これらの法によれば、下記事例のうち事例 1 および事例 2 はすでに消滅時効になっているので、加害者側は被害者側から訴訟されることはないから、具体的に過去の状況を記してもよいかと考える。しかし、事例 3 および事例 4 は 20 年以内で現在も進行中であるので、通信の秘密や個人情報の保護のため、記述には特段の配慮をするものである。したがって、実名は記さず、記号 ABC で、根拠となる e メールの一覧は根拠事実の資料として考察に用いるが、非公開としてここには掲載しない。

③ 村八分(Wikipedia 参照要約引用)： 村落(村社会)の中で、掟や秩序を破った者に対して課される制裁行為であり、一定の地域に居住する住民が結束して交際を断つこと(共同絶交)である。転じて、地域社会から特定の住民を排斥したり、集団の中で特定のメンバーを排斥(イジメ)したりする行為を指して用いられる。

しかし、村落の中での掟や秩序は、合法的、客観的で公明正大なものとは程遠く、その地域の有力者の私的・主観的な利益に沿うためのものや、江戸時代までしか一般的に通用しないような封建的・旧態依然とした内容のものも多いなど、公平な秩序維持活動とは言えず、明治以降は人権を侵害し法に反するものと認識され、1909 年の大審院判決で、村八分の通告などは強迫あるいは名誉棄損とされた。

こういった村八分行為は、第二次世界大戦後になっても存続し、近年においてもしばしば問題となっている。民事的には、村八分を受けることにより、社会生活に困難を生ずるための権利侵害である違法な不法行為を構成し、差し止め請求や慰謝料を含めた損害賠償請求の対象となる。刑事的責任、一定地域の住民が結束し交際を断つこと自体は刑事罰に触れるものではない（罪刑法定主義）。しかし、その旨を通告する行為は、非絶交者の人格を蔑視し、その社会的価値である名誉を棄損するものであって、名誉に対する脅迫罪を構成するものとされている。判例では、共同絶交宣言について人格権侵害として、慰謝料を認めている（津地裁 1999）。

村八分にあった人が言っていることにはいろいろな事象があるが、共通して加害者は醜い。多くの事例で加害者はまず犯罪者であるが、嫌がらせに耐え切れず被害者が報復のために犯罪者になってしまうこともある。被害者は無視され、陰口を言われ、自治会に参加できず、鬱になったり、危害が加えられた場合さえもあった。ただ働きや、借地で作物が実ったら、借家を良く改修したら、突然返却要求されたなど、田舎に多い事象である。清泉（2018）が事例として掲げている通りで、インターネット検索をすれば、たくさんの事例が出てくる。

社会人として生きて体験した人間関係の苦痛が極端に達していたときには、二人の歌姫の曲が涙をにじませ、その苦痛を幾分か和らげてくれた。朝、勤務先に向かう自動車の中で、気分を明るく転換したいときには松任谷由美ユーミンを聞き、夜、自宅に帰る時に、落ち込んだ気分を和ませたいときには中島みゆきを聞いた。これまで私は、誰であっても、他者を傷つけないようにするために、受けた心の傷を他者に復せず、自己に向け、心を自閉するか自傷することにしてきたのだろう。しかし、それで

も私は原縄文人・採集農耕民、あるいは野生動物に近く、心身ともに壮健である。さらに有難いことに良い師友や家族にも恵まれていたので、真正直な国家公務員大学教授として、時には好んで孤独であっても孤立することはなく、心身までひどく傷つけることもなく、ましてや自殺に追い込まないで済んできたのだろう。

私は山村とそこに暮らしてきた山民を敬愛しているので、これまでもできる限り山村・田舎を批判してこなかったし、ましてや非難したくはなかった。田舎と都市を対比して、田舎が悪いと言っているのでは決していない。日本のムラ社会は田舎に限らず、都市にもムラは残っている。原子力ムラとも揶揄されているように、最先端と自称する原子物理学者や関連企業も強固なムラ社会を形成している。自由で、自律した個人主義を十分に鍛えていない日本人の幼児性が問題だ。

例えば、イギリスのサスペンス（バーナビー警部やヴェラなど）を見ていても、ムラ社会のイジメはあり、ヨーロッパの田舎や都会でも同じ問題がないわけではない。しかし、ヨーロッパの人々は大方の日本人と比較して、個人主義的で自律性が高いから、比較的ましということだ。今になって齢を重ね、もはや先行きが短いので、この際に、調査研究に基づいて自己分析と社会批判をしておかなくてはならないと考えた。個人とムラ社会は無関係ではないが、村に暮らしていても農村社会学でいうムラ社会には組せずに距離を置く自律した個人もいるので、社会的機能を持つ村社会とは明確に区別しておきたい。本論では村とムラを用語法として使い分けている。

R ウィリアムス（1973）の著作の文脈を整理し、表 1 に田舎 country (nation, land) と都会 city を対比してみた（木俣 2015）。まず、「良い感情」として掲げられたキーワードは、田舎（農村社会）は平和、無垢、淳

朴な自然的生活様式の場合であり、都会（工業社会）は学問、コミュニケーション、光明のある人間の創りあげた中心地である。これに対して、「敵意を含む連想」として掲げられたキーワードは、田舎は後進性、無知、偏狭で、都会は騒音、世俗、野心である。これらのキーワードを踏まえて、田舎と都会の良い点、悪い点が表 1 に「伝統的対比」として示されている。しかし、田舎と都会の現実的様態は歴史的にも多様で、現代的にも中間的な状況 gradation が一般的で、一面的な見方は不合理である。参考までに、ウィリアムスの考えの重要なキーワードを

2・3 掲げておく。イギリスの歴史的経験は日本にとっても大いに参考になる。イギリスにおける小自作農とは農村民主主義の現場に生きていた独立心の旺盛な、優れた人格の持ち主である。共有地は貧民の相続財産である。{注：エンクロージャー囲い込みがコモンズを奪った}。小規模自給農耕とは、自前の農産物、あるだけで満足感、自分の労働を自分で支配できる。賃金経済の圧倒的支配下に長期間置かれた結果、このような特殊な領域は決定的な重要性をもっている。

表 1. 田舎と都会の一般化された対比的な見方

凝縮する観念	田舎(農村社会)	都会(工業社会)
良い感情	平和 無垢 淳朴 自然的生活様式	学問 コミュニケーション 光明 人間の創りあげた中心地
敵意を含む連想	後進性 無知 偏狭	騒音 世俗 野心
伝統的対比	無垢 所有関係を黙殺 嫉妬と憎悪が内在 肉体的・精神的再生の場 孤絶した自然の多産な生命の場 根本的な生の過程の季節的なリズムの場 耕作地vs汚されていない田舎 過去 白痴、未開人	貪欲 腐敗した都会生活 苦渋と無秩序 機械的秩序 金、法律 富、贅沢；暴徒、大衆；流動化、孤立 未来
現実の歴史 現代世界	驚くほど多様 中間的な居住地(近郊住宅地、スラム街、工業団地など)	多種多様

ウィリアムス、R. (1973) からまとめた。

さて、私にとってのムラ社会の原体験を思い出すことから始めることによろ。私の祖父の出身は今の岐阜県羽島市八神であった。祖父は私が小学校 1 年生の時にはすでに他界していたが、少年の頃は毎年の夏休み、祖母の共で弟と一緒に連れられて、名

古屋駅から名鉄に乗って岐阜に行き、単線の竹鼻線に乗り換えて、八神に行った。本家は木曽川の堤防の中腹に建っていた。濃尾平野の典型的な輪中集落にあった。受験に失敗していわゆる浪人をしていた夏に、本家で 1 週間を過ごした。勉強に疲れて、

水田を散策していたら、夕方には私がどんな姿で歩いていたら、何者かまで集落に伝わっていてとても驚いた。名古屋の街ではこれほどまでに監視されることはなく、ましてや噂はされてもそれほど広がることはない。子供の頃には気にも留めなかったが、村社会の監視にはショックを受けたので、その後は木曽川を懐かしく思い出しこそすれ、ほとんど行くことがなくなり、葬儀の際に 2 度訪れただけだ。

1. ムラ社会の研究小史

村とは、人間がムレ合って生活する小領域で、古代から存在し続けている実態的な歴史用語である。村は社会の基層を形成する極めて重要な存在であった。現代日本社会においては経済の高度成長の影響として過疎・過密が進行し、都市化の波が日本社会を揺るがせている。それでも、村的社会関係の意識も根強く存続している。この根強く潜在的に残っている社会意識の一つである、村八分とは村で掟の違反者に対して慣習的に執行されてきた制裁の一種である。罰金を科す、辱める、絶交処分、村外追放を受ける。八分の表記は慣用的な俗説で、本来は排除や擯斥（ひんせき）の意味を持つ撥撫（はちぶ）であった（平山和彦 2005、郷土史大辞典下）。本論では原則、語彙として撥撫を用いることにする。

ムラ社会とは、集落に基づいて形成され、有力者を頂点とした序列構造をもち、昔からの秩序を保った排他的な社会を指す。閉鎖的な組織・社会を例える語彙で、談合組織、学界、政界、企業などにも用いる。閉鎖的な社会という否定的なニュアンスを持つ。また、イエ・ムラ理論は、イエ（家）を基礎単位として、日本の伝統的な村落社会（ムラ）の構造や論理を明らかにしようとする農村社会学の理論である。この理論の系譜を次に要約する。

①鈴木栄太郎の自然村論（1940）；自然村とは地縁的結合を基礎に形成された集团的、社会関係の累積体であり、社会的な交流や生活が自足的に営まれている農村共同体である。地方行政制度上の行政村ではなく、地理的には大字、あるいは区として位置づけられてきた単位である。ムラは行政制度とは無関係に存立するものである。②有賀喜左衛門の家族連合論；柳田國男の大家族論を基礎として、イエを労働の組織化を起源とする生活保障の単位と捉え、さらに、本家分家による同族的な家連合および地縁に基づき形成される村組的な家連合の二形態を明らかにした。ムラはイエを基礎単位とした家連合を包摂する。③福武直の同族結合、講組結合論、④竹内利美の家連合論と村落変動論の接合へと、イエ・ムラ論は理論的に深められてきた。他方で、④喜多野清一はウェーバー社会学の立場から、イエを家父長主義に基づく扶養共同体の日本的形態とみなした。敗戦後の民主化の流れの中で、農村社会学ではイエは権威主義的支配の基本形態であり、ムラは封建的な共同体であるとして批判され、イエ・ムラの払拭こそが日本の近代化、民主化の鍵であると考えられた。⑤機能集団論；70 年代以降、共同経営や生産組織などの農家の間で形成される機能集団は、イエ・ムラから離れた農民の個々人を単位として自立的、合理的に形成されるものではなく、個々のイエを基礎的単位として形成され、イエ・ムラの影響を強く受けていることを明らかにした。⑥都市のムラ；都市／農村の二分法を超える地域社会学の理論形成、⑦中根千枝（1967）の家原理論の礎石としてイエ・ムラ理論が置かれている（ウィキペディア 2020. 4. 4）。

イエとムラについては、中根（Nakane 1970、中根 2009）による論述の概要を次に示す。

欧米の人々と日本人の社会学的認識を対比して、個人主義と集団主義ということがよくいわれる。日本にほんとうの意味での個人主義が

確立されていないのは、日本の近代化がまだ本格的な段階にいたっていない証拠である、などといわれている。日本人にとっての個人認識としての社会学的単位は、欧米人のように個人ではなく、確かに集団であるが、無限定の集団ではない。とくに伝統的な農村における「家」はその典型的な例である。この「家」は仕事の単位であると同時に生活の単位である。重要なことは、仕事の遂行において、いつも共にいるということで、場の共有を媒介としている人々からなる小集団である。個人主義という文化をもち、人見知りをしやすい日本人にとって、この雰囲気存在は、必須のものと思われているのである。長い歴史をもった集団<村>においてさえ、「家」(小集団)の枠はかたく閉ざされているのである。個々人は「家」という集団の単位をとおして村落集団に参加している。ソトの人々に対しては、タテの構造をもつ集団と同じように強い排他性をもっていることに注目しなければならない。こうした特定の地域社会のある個人とどんなに親しくなっても、ソトの者はその地域社会の成員になることはほとんど不可能である。タテ社会の理論は、日本社会に内在する重要な一側面をとらえたもので、これだけでは、日本社会の構造的メカニズムを理解するのに、不十分であることはいうまでもない。そればかりか、タテ社会の理論自体にも、私にとって一つの弱点があったのである。それは、タテの構造をもった相互に独立した諸集団を結びつけ、全体社会の統合を可能にするメカニズムについて、理論的に満足すべき説明をすることができなかったことである。実は、この理論的空隙を、私は中央政府による行政的統合ということではなにかまとめたものであった。社会人類学的構造論で説明しきれないところを行政組織によってカヴァしたわけである。全体の社会学的理論構築に、行政組織を補足的に導入するのならばよいが、後者で前者の不十分さを補ってしまうのは、正攻法ではなく、付け焼き刃的で、そこが私のタテ理論の最も弱いところであると思っていた。日本社会の構造は

個々人に安定性を与え、よく機能してきたとみることができるが、今日のように新たな内外の諸条件の変化は、その構造の持つ弱点を顕在化することになったと言えよう。この際重要なことは、これらの弱点もよく認識して、個々人が自主性をもち、国際的にも充分伍していけるような、より広く、そして複雑な見方をもつことであると考え次第である。

中根理論の反省についてはその通りと考えるが、それならば、その弱点をさらに明確に掘り下げて、複雑系のムラ構造を再整理し、現実、実践対応できる統合理論の検討に向かわねばならない。また、鳥越(1993)はイエとムラについて次のように述べている。

現実の農村に一步入ってみると、家族生活と
いいかえられたものの実体はどうみても家の
生活といった方がぴったりくるし、地域生活の
主体をにぎる実体も村であることを痛いほど
知らされる。また、現在の農民の意識も、農民
と話しあってみれば、家と村をぬきにして意識
は存在しないことが明らかになる。さらに官制
の農民組織はもちろんのこと、農村地域の環境
問題などのボランティアの農民組織も、家と村
を眼中に入れて運動をしている(私たちは学界
で家の解体や村の解体を検討しているのに、こ
れはどういうことだろう)。たしかに、戦前の家
と村と、戦後の家と村では変化をとげた面が
多々あり、その意味では異なっているといえる。
けれども、やはり実体は家と村としか表現でき
ないものであるようだ。

自然環境に強く立脚した農山村の歴史的
社会構造は容易に変わるものではなく、変
える必要のない良い事象もある。しかし、
変えた方がよいことは再創造の過程を通し
て除去したほうがよい。

過疎高齢化にともなう限界集落という用語は、「65 歳以上の高齢者が集落の半数を

超え、独居老人世帯が増加したために、社会的共同生活の維持が困難な状態におかれている集落」のことであると定義されている（大野 2005）。過疎高齢化に関わって、『地方消滅』（増田編 2014）に関する議論が、最近になってとみににぎわっている。変曲点を迎えた現在の重要課題が実に、ここにあるからであろう。山下（2012、2014）は、この課題について、環境社会学の調査成果の考察から、上記の増田編による地方消滅論に対して、熱意をもって反論しているので、次に、特に注意を引いた語句・文脈を引用し、私の統合的考察につなげたい。

過疎地域自身が内発的に受け止め、解決しようという問題として提起されずに、地域はつねに政策の客体＝受け手として振る舞うよう習慣化されてきたのも事実である。過疎問題の問題性はつねに、そこに生活している人々の現実とは無関係な場所から提起されてきた。誰にとつての、誰が解決すべき問題かが見えにくいことにある。日本人全体の人生や家族の行く末に深く関わるものであるとともに、そこでの継承は今後の国土利用、食糧供給、環境保全にもつながっている。都市や首都圏といった、直接過疎と関係がないと思われる場所に暮らす人々にとつても、関わりなしにはすまないものとなる。急傾斜地のふるさとで、年寄り杖をついてでも頑張っている。家（イエ）意識も強い。空き家があっても貸さないくらいだ。

日本社会論につながる形で限界集落問題を解説し直していく中にこそ、希望ある展開は導き出されていくはずである。過疎問題解決のプログラムはこれまで、その起点は国や行政の側にあつて、当の集落や住民の側にはなかったと言つてよい。このことは研究者や専門家と呼ばれる人間の側でも同じであつたように思う。議論はつねに専門家の側から始まった。こうした補助金行政・メニュー行政に慣らされてきたため、答えを出してくれるのを期待するだけで終わってきた。家が旧態依然としたものだからと

いう前に、家をむやみに分割してしまうと、そこに暮らす成員の生活が脅かされる危険があるからである。家の分割を避け、むらをそのキャパシティ以上の大きさにしない、というのは、山村などには半世紀くらい前までは当たり前で働いていた規範であり、……。村落と都市、地方と中央に関わる日本社会の現状の可視化。これがおそらく、この問題の解決への重要な糸口になるだろう。

学校は地域のシンボルである。だが学校を残したくても子供がいなくては開校できない。過疎地の多くは自給自足的な要素も多く持つており、都市生活に比べて生活費はかからない。知恵の出し方、工夫次第で、限界集落の多くは、存続可能と思われる。地方にはまだ、人々が集い何かを生み出す主体性の文化がある。いま都市でこの日本社会を動かしている中心層でこそ、その主体性を取り戻す必要がある。集落点検が重要なのは、これを自分たち自身でやることで、集落内のより多くの人が、この問題を自分たちの問題として主体的に受け止め、動くきっかけができることだ。このような身近な集落間の連携は、できるようで、いままでなかなかできないことだった。むらの内と外がはっきりしていたからだ。都市住民と村落住民との間の意識差は越えがたい、大きな壁をなしている。村落と都市では、やはり生活様式が違うから、お互いに理解しあうのはかなり難しいようだ。これまでの日本社会の生活の基礎となってきたものを、否定する可能性すら秘めたものだ。食糧や燃料自給の持つ重要な意味がいま大きく見失われつつある。生活を支えるもののすべてを国に委ね、経済ですべて解決できるかのような錯覚に陥っている。日本の社会構造の根幹を担ってきた家やむらの消滅をも当然のことと思うようにさえなってきた。怖いのは、限界集落論の持つ罠である。

また、徳野（2007）は次のような認識で、家族をベースに地域を再考する「T 型集落点検」を提案している。

真面目に働いても暮らしていくための所得が得られず、個人の努力ではいかんともしがたい「ワーキング・プア」の問題が深刻化してきた現代日本。この格差社会で、より過酷な個人主義的競争原理を選ぶか、少し貧しくても気持ちを楽しんで自分の人生を家族や親族・ムラの人々との共同体的関係のなかに作りあげていくかで、ずいぶん違った人生を歩めるのではないかと思う。昔ながらの農村の家族は、いいことばかりではない。人間関係が非常に強く、内部にヒエラルキーがあった、自由があまり利かない、閉鎖的世界でもあった。ムラやイエからの締めつけが非常に強かった。だから、高度経済成長期に人々はお金だけではなく、自由と解放性を求めて都市へ出ていったのも事実だ。そういうマイナスの部分があるとしても、すべてを否定するのはどうか。家族の持っている機能を全面的に否定して、いわゆる近代化や個人主義化に走るだけがよかったのだろうか。いい大学に行って、いい会社へ入りなさいと言う。そして、行ったら二度と帰ってこない。いまだに学校は優秀な子どもたちを都会へ出そうとしている。親は都会に出ていくのが当たり前だと思っている。

山村で環境保全活動・学習活動を、40余年にわたって、大学として、非営利活動法人 NPO として、また、文部科学省の委託事業としても、多彩に実践展開してきた。多くの村人が喜んで共働してくださったが、これまで現地の学校関係者はほとんど関心を示すことがなかった。学校という組織はムラ以上の閉鎖社会なのだ。子どもたちを山村から都市に送り出す組織という現状はあまりに無自覚で、非情なものだ。学校は山村のムラ社会と同じく、今後は半開放系の組織に変わり、地域社会と親しくつながるべきである。

田中正造(1912)は、「真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし」といっている。田中正造と足

尾銅山鉍毒事件を研究してきた小松裕(2011、日本近代思想史専攻)は次のように指摘している。

もはや、たくさんのいのちを犠牲にして進歩を追求する愚は改めなくてはならない。人間だけではなく、あらゆるいのちを尊重できるような社会に変えていかなければならない。成長優先の社会から、再生と持続を重視するサブシステンス経済へと、今こそ私たちの暮らしそのものを変革しなければならないのである。一歴史学徒にすぎない自分の社会的責任の果たし方は、自分が研究してきた田中正造の思想をまとめて刊行し、これからの日本の文明のあり方や新しい国のかたちを考えるうえで参考にしてもらうことだ。本書を手がかりに田中正造の原文を読みたいのであれば、『田中正造文集』(全二冊)を勧める(由井正臣・小松裕編 2004、2005)。

2. ムラ社会とは何か

山里に栽培されてきた雑穀や在来野菜に熱い好意を抱き、山村に通い、生業の先達に伝統的知識体系に関する教えを受けてきた。山村を取り巻く自然、里の景観、篤農の人々たち、たくさんの出会い、長いお付き合い、楽しい会話による深い信頼があった。

私はムラ社会に関してこれまでも継続的に論考してきた(木俣 2017、2019)。もう40年以上にわたって、上述したように秩父多摩甲斐国立公園周辺の山村で自然と生活文化を学ぶ野外環境教育・学習活動を通じた冒険学校やエコミュージアムなどで、地域振興に関わってきた。大学人として、NPO 会員として、また、省庁の調査研究委員として、いろいろな立場で、活動し続けてきた。農山村の地域社会の中で、環境保全活動、冒険学習活動が事業としてうまく軌道に乗り、親しい村人から良好な評価と強い信頼が得られるようになると、しかしながら、なぜかムラ社会の见えない陰の力が働いて、恐らく地元有力者の過度な保身によ

って、地元有力者からたぶん嫌われて、三度追放の憂き目にあってきた。私たちの活動は山村への経済効果はもちろん、その自然や伝統文化保全の力になってきたはずなのに、なぜか追放され続けて、いまだに山村の地域社会からは十全には受け入れられてはいないと感じるのである。秩父多摩甲斐国立公園周辺の山村で、格闘してきた相手の本性は、このイエを基盤とする封建的なムラにおける人間関係、タテ社会の構造であったようだ。このような前近代性をいまだに認知するのは真に悔しい。

しかし、山村に度重ねて訪問するようになると、そのムラ社会は余所者を次第に排除するようになった。山村に移住せよとか、交流人口を増やせとか、こうした行政策は私も中年の頃は省庁の調査研究に参加して提案してきた。現在、村行政は建前として、こうした政策を受け売りで唱えてはいるが、本心では、都市民は金だけ落としていけばそれでよいから、それ以上は立ち入るなどということのようだ。山村の篤農たちと親しくなると、何ものかの無言の圧力で、理由も示されないままに、追放の憂き目にあわされてきた。思い出して客観的に論述することなど、胃と心が痛くなるので、忘れてしまいたいことどもだ。しかし、個人的体験として記録すら残さなければ、ムラ社会は良い方向には変わらないのだろう。だから、冷笑に囲まれても、余生最期の遺言として勇気を出し率直に論考しておく。

現場の意識と学問的認識は相当の距離をもって異なっているのであろうか。現在、村の障壁は幾分か透けて見えるようにはなってきたのはいるが、これがヨソ者にとってはやはり不可視な外壁なのであった。上記に描かれていることは、私にとっても現場経験での事実の一面である。理論が改善を求める理想を提案することはとても大事であるが、日本の社会構造はまだまだ閉鎖系であって、身内意識（ウチ）によってソトに

対して過剰に排他的、保身的である。社会の安定は伝統的であり、保守的である。このことを全否定する気はなく、良し悪しを再考する必要性を述べているのだ。個人や小集団が保身にすぎると、長期的な改善さえもできず、複雑さを増す現代世界で、地域社会の持続性を保障することは困難になってきているからである。

繰り返して強調するが、私は山村に対して親愛なる意義・価値を認識し、この山村側に立つ者として、今日まで、村に巣くうムラ社会の構造批判は封印してきた。しかし、都市民の厚意がどうしてムラ社会に十全に受け入れられ、双方が協働して暮らしを豊かに、人生を楽しくすることができていないのか。この課題について条理（情理）をもって明確にしたい。もちろん、都市民は山村から素のままの美しい暮らしのあり方を学び、山村の大切さを都市の側からも理解すべきである。これらの経験から、十全に信愛関係が成長しない理由を探り、何が課題で、どうしたらこの課題解決への道が開けるのか。体験事実から明らかにして、将来の可能性を探るために改めて批判的に考え直している。この正直な再検討から、課題解決への明るい展望を見出したい。現代と将来の文明を、個人が市民として、都市と農山村の地域社会の人々と暮らしと人生を一緒に学び、考え、より良く変えていくことが、新たな可能性を拓くのだと思う。深く言い換えれば、レジリエンス（復元力）を再構築し、地域社会を楽しみ暮らしの場にするのだ。

最近、現代社会が変曲点にあると考える人々が相当数おり、私もゆっくりと良い方向へと変わるべきだと直観している。私は1974年に東京学芸大学に就職して以来、雑穀の起源と伝播の研究の目的で、国内外の山村を40年以上にわたって調査してきた。国内の山村が過疎高齢化しているといわれ、旧国土庁、旧環境庁や林野庁などの、行政

策の策定のための基礎調査研究にも多数に加わり、また、実際にも環境教育活動によって山村振興を図ろうと実践を続けてきた。日本の都市民の自然志向が高まり、山村で自然環境や伝統的な生活文化を学習し、余暇を楽しむようになり、山村はにぎわい、地域経済も暮らしも持続可能になると、主張してきた。しかし、現在では、農山村の過疎高齢化、人口急減により限界集落のみならず、多くの行政村すら消滅するなど、声高に言う人々もいる。確かに、私たちの環境学習活動の実践が十分な効果を上げてきたかについては、多大な経費と時間を使い、多数の人々の協働もあったが、未だに心もとない状況である。この状況を改善できなかった根底にある原因を研究者としては探ろうとしてきたが、実践者としては調査研究の成果の核心については明言を避けてきた。それがまだ曖昧模糊としたものであったし、山村の側に立つ者として、山村の利にはならず、触れない方が良いとの感触が以心伝心としてあったので、核心部分の考察を避けて、忠心にしまい込んできたのである。このことを三省して、今こそ、率直に核心課題を明確に摘出したい。

農山村に居る人々の類型を 4 つに整理してみた(木俣 2015)。I 農山村居住民：I1 農山村で暮らすことに意義を見だし、誇りをもっている人、I2 農地や山林資産などがあり都市に出られない人、I3 都市に出る気力と能力がない人。II 農山村への帰郷民(U/J ターン)：親の高齢化による介護、都市での暮らしが困難、退職などで、帰郷した人。U と J では農山村への距離に差がある。III 新住民(I ターン、0 ターン)：III1 農山村で暮らすことに意義を求めて、都市から移住した人、III2 都市での暮らしが諸般の理由により、困難で消極移住した人、III3 前者であったが、再び都市に戻っていた人。IV 往来民：農山村の大切さに気付く、移住はしないが、志はもっていて、都市

から頻繁に通ってくる人。現在も、過去も農山村への出入りはとても流動的であったと考えられる。農山村は完全に閉鎖されていたのではないが、都市に比べて閉鎖性が高い地域社会であったということだ。これから 4 類型の人々の誰が、今後の農山村のレジリエンスに有効に関与するのか。農山村への積極性の強さからして、I1、III1、IV の類型の人々であろう。これらの人々が共働して、他の消極的類型の人々をいかに参加へと巻き込んでいくかである。すなわち、半開放系へとムラ社会を今以上に開放的にしていく必要がある。

しかし、農山村のイエ・ムラ構造は歴史的に複雑で深層に畳み込まれており、村に深入りするほどに、その核心部分について、やはり忠信から述べにくくなるのではないかと見受けられる。私も含めて、山下、徳野も農山村に好意をもつ者は、その良い所を認めながら、旧習の悪い所から目をそらしている節がある。徳野は II の定年帰郷・帰農に期待しているようだが、ひとたび村を出た人が、どれほどの熱意をもって戻ってくるのであろうか。新住民にも村を開放しなければ、人の住まない空家は、仏壇や神棚があっても、朽ちていく。現在の状況は、旧習の深層にも踏み込んで、問題点を批判的に明らかにし、根底から改善する方策を求めている。したがって、問題解決の核心から目をそらさず、未来に向けてゆっくりとでもよいから、素のままの美しい暮らしを、平和で幸せを実感する文明社会を再創造すること、すなわち、さらなる文化的進化を目指すべきではないのか。

3. 田舎暮らしについての分析の試行

直接体験を研究素材とすることは、自ら過去からの苦痛を再現せざるを得ないが、世間に抗った人生で受けた心的外傷後ストレス障害 PTSD を超克するためには必要なことかもしれない。{注：PTSD (Post

Traumatic Stress Disorder) とは、強烈な心的外傷体験をきっかけに、実際の体験から時間が経過した後になっても、病的症状が持続する状態のことである。} たとえば、心の構造としての大聖堂の修復を続けることである。すなわち、付属礼拝堂の扉 {注：バカの壁 (養老孟司 2004)} をなくし、流動性を促して諸知能の結合を進めて、現代の狩猟採集民の心の構造に少しでも近づけて、知能を統合するように修復するのだ。

この目的のために、まず、心の構造を分析する手法を第三者事例で試行し、有効性を確認した上で、次に当事者事例に適用することにした。

1) 分析方法

① 『誰も教えてくれない田舎暮らしの教科書』(清泉 2018) に関する書評 (アマゾン本 2020. 4)、およびコメント (作者不詳、インターネットから、2020. 3) を分析ソフトウェア IBM SPSS Text Analytics for Surveys (ver. 4. 0) によってテキスト分析し、田舎に関する意見を検討してみた。分析方法は感性分析と係り受け分析を試行する。

② 山村での雑穀栽培調査および環境学習活動において、1974 年から 2020 年までに、Z が直接体験し、調査してきた具体的な 3 事例に基づいて検討、さらに詳細な第 4 事例については、送受した e-メールのテキスト分析を行う。

③ ホモ・サピエンス・サピエンスの心の構造 (ミズン 1996) に、①②の結果を当てはめて、現代人の心の構造がどのように変容しているかを検討する。

2) 書評として記された体験の検証

上記の『田舎暮らしの教科書』に関する書評 (アマゾン本 2020. 4)、およびコメント (作者不詳、インターネットから、2020. 3) をテキスト分析して、田舎に関する意見を

検討した。この本の評価はほとんどが 5 であったが、極端な反感を抱く人もいたので、カスタマー・レビューは 4. 2 であった。

3) テキスト分析の結果と考察

① 書評の検討

書評 (n=30) のテキスト (感性) 分析の結果を表 1 に示した。抽出されたタイプは (レコード数 1 は省略)、<悪い>に関して、悪い 14、不満 11、恐怖 9、不快 4、批判 4、悲しい 4、<良い>に関して、良い 13、褒め・賞賛 6、満足 5、嬉しい 4、感謝 3、期待 3、快い 3、<その他>に関しては、要望 8、疑問 5、提案・忠告 5、驚き 3、であった。

コンセプトパターンについては、本 17、田舎・田舎暮らし 16・16、の 4 つが多いのは書評であるから、本とその題名の語彙が多いのは当然の結果であろう。次に多いのは、私 10、自分 9、人間関係 8 であり、自然景観の美しさなどについてはタイプにもコンセプトパターンにも抽出されていない。つまり、田舎暮らしは人間関係に重要な課題があるように見える。

具体的に何が良くて、何が悪いのか、書評本文から両極端をいくつか拾い出してみる。評価 5 の U ターン移住者 A はこの本に書かれていることはほとんど経験した。評価 5 の人 B は田舎生まれ田舎育ちだが、親の代に移住したので、古くから住んでいる人たち、精神的未開人にいろいろな差別を受けた。評価 5 の父介護 U ターン者 C は都会で成功したことが漏れると、イジメの対象になった。田舎の幼稚なイジメは生活が困難になる。日本を進歩させたいなら、この現象の改革は必要だ。他方、評価 2 の人は書かれていることは真実だろうが、著者を経験から学ばず、田舎になじめない人だと言っている。評価 1 の人は田舎を蔑んでいてよくなく、都会の劣悪環境も問題だとしている。

② インターネットでの書き込みのテキスト分析

コメント (n=166) のテキスト (感性) 分析の結果も表1に示した。抽出されたタイプは、＜悪い＞に関して、悪い 68、不満 26、恐怖 7、不快 6、批判 8、悲しい 11、嫌い 11、悲しみ全般 7、誹謗・中傷 5、軽蔑 4、体が悪い状態 4、不運 4、諦め 4、残念 3、怒り全般 2、対応が不親切 1、＜良い＞に関して、良い 52、褒め・賞賛 8、満足 8、好き 8、嬉しい 4、感謝 3、期待 3、快い 4、楽しい 4、喜び全般 4、吉報 2、＜その他＞に関しては、要望 17、疑問 14、提案・忠告 17、驚き 16、であった。

コンセプトパターンについては、田舎 101、都会 56、自分 34、人 27、人間関係 18、私 17、田舎暮らし 16、人間 16、が多いことは①書評のデータと同じである。また、住む 38、地域 22、移住 19、地方 15 などが多く抽出されており、これらも田舎暮らしに関わる主要語彙である。さらに、少ないとはいえ、ムラ社会 13、移住者 12、村社会 6、村八分 6、ヨソ者 6 などの語彙は気に留めておく語彙で、課題に関与していると考えられる。①と同様に、自然景観の美しさなどについてはタイプにもコンセプトパターンにも抽出されない。やはり、田舎・田舎暮らしは人間関係に重要な課題があるように見える。

抽出された語彙の中で、良さそうな語彙は、自然環境、空気や水、景色がごく少数抽出されているのみで、悪そうな語彙はとて多く、噂、村社会、筒抜け、村八分、排除、慣習、過疎化、閉鎖的、逃げ出す、偏見、排他的、悪口、耳を疑う、お山の大将、風習、非合理的、恐ろしい、怖い、疲れるなどがあ

り、現実認識はとてもよくない。都会にも問題がたくさんあるが、まとめて言えば、田舎が都会より良いのは自然環境だけだと指摘している。

具体的に何が悪いのか良いのかを、本文から少し拾い出してみる。若い世代が田舎からこぞって出ていくのは戦前から続くムラ社会、タテ社会、因習が嫌だからだ。田舎とは限らずに、何かやらかせば村八分 (村撥撫)、学校のイジメと変わらないのは人間の本質だ。人間関係で精神科に通うまでになった。根本的にヨソ者はいつまでたってもヨソ者だ。日本人は基本的に保守的で陰湿、すべてが村中に筒抜けの生活、知的な人間は田舎には住めない、高学歴は都会に出る。大方の意見はこのようなものが多いが、都会人が田舎を知らずに誤解していて、田舎批判をしているのだという反対意見も少なからずある。自衛が必要な村社会では、得体の知れない人を警戒するのだ。自然環境が良いという意見はほとんどでこない。{注：ここでは語彙、村とムラが混在している}

感性分析 (表2) によれば、書評 (n=30) のタイプでは、＜悪い＞が 60 (44.8%)、＜良い＞が 50 (37.3%)、その他 24 (17.9%) となっている。同じく、コメント (n=166) のタイプでは、＜悪い＞が 171 (51.8%)、＜良い＞が 95 (28.8%)、その他 64 (19.4%) となっている。回答者は、本来、本の評価をしているのであるが、コンセプトパターンに見られるように、本に記述されている田舎の評価に関心が向いており、＜悪い＞の内容は大方が田舎についての評価となっている。

表 2. テキスト分析（感性）によるタイプとコンセプトパターンの抽出

書評 n=30			コメント n=166			
タイプ	コンセプトパターン		タイプ	コンセプトパターン		
悪いー悪い	14	本	17	悪いー悪い	68 田舎	101
良いー良い	13	田舎	16	良いー良い	52 都会	56
悪いー不満	11	田舎暮らし	16	悪いー不満	26 住む	38
悪いー恐怖	9	私	10	その他ー提案・忠告	17 自分	34
その他ー要望	8	移住	9	その他ー要望	17 人	27
良いー褒め・賞賛	6	自分	9	その他ー驚き	16 地域	22
その他ー疑問	5	人間関係	8	その他ー疑問	14 移住	19
その他ー提案・忠告	5	著者	7	悪いー悲しい	11 人間関係	18
良いー満足	5	集落	7	悪いー嫌い	11 私	17
悪いー不快	4	地域	7	良いー満足	10 田舎暮らし	16
悪いー批判	4	話	7	悪いー批判	8 人間	16
悪いー悲しい	4	内容	7	良いー好き	8 地方	15
良いー嬉しい	4	本書	7	良いー褒め・賞賛	8 生活	14
その他ー驚き	3	都会	6	悪いー恐怖	7 記事	14
良いー感謝	3	人間	5	悪いー悲しみ全般	7 話	14
良いー期待	3	地方	5	悪いー不快	6 ムラ社会	13
良いー快い	3	生活	5	悪いー誹謗・中傷	5 移住者	12
その他ー驚き	3	家	5	悪いー軽蔑	4 土地	12
良いー感謝	3	現実	5	良いー楽しい	4 村	12
良いー期待	3	金	5	良いー喜び全般	4 地元	11
良いー快い	3	地獄	4	悪いー体が悪い状態	4 子供	11
良いー金額への賞賛	2	消防団	4	悪いー不運	4 家	10
悪いー謝罪	2	住民	4	良いー快い	4 人口	9
良いー好評・人気	2	大事	4	悪いー諦め	4 仕事	8
悪いー軽蔑	2	無視	4	悪いー残念	3 他人	8
悪いー悩み	2	対応	4	良いー感謝	3 集落	8
悪いー怒り	2	テレビ	4	悪いー怒り全般	2 内容	7
悪いー困っている	2	Uターン	4	良いー吉報	2 場所	7
悪いー諦め	2	挨拶	4	悪いー対応が不親切	1 存在	7
悪いー落胆	2	情報	4		金	7
		移住者	4		昔	7
		理解	4		都心	7
		仕事	4		日本	7
		別荘地	4		コミュニティ	6
		地方都市	4		事情	6
		限界集落	4		噂	6

語彙<田舎>と<人>との関係が主要な課題であると考えられたので、カテゴリ<人>について感性分析した結果の 1 つを図 1 に示した。<田舎>と<人>は回答者が多くかつ共通回答が多いことがわかる。感性<悪い>に関わる語彙は<田舎、村、人

>、他方、感性<良い>にも<田舎、人>が見られる。田舎暮らしを悪いとする人もいれば、良いこともあるとする人もおり、そのとらえかたは人によって異なり、日本の田舎・都会に共通する<悪い>課題だとの意見もある。

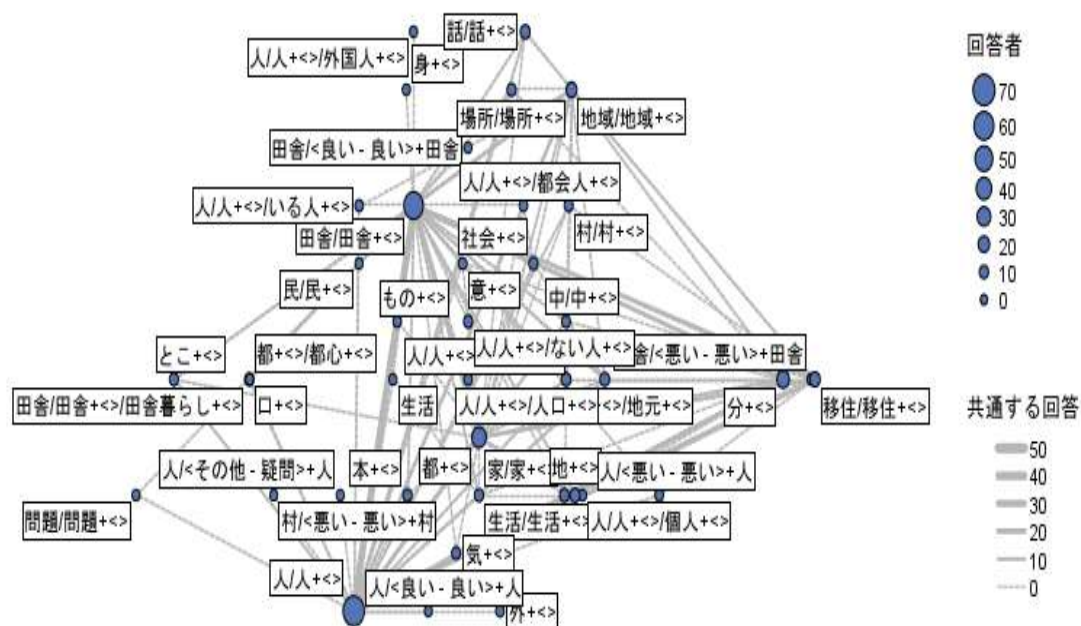


図 1. 感性分析の有向レイアウト；カテゴリ<人>（ディスクリプタ／レコード数；55／84、スライダ；3-45）

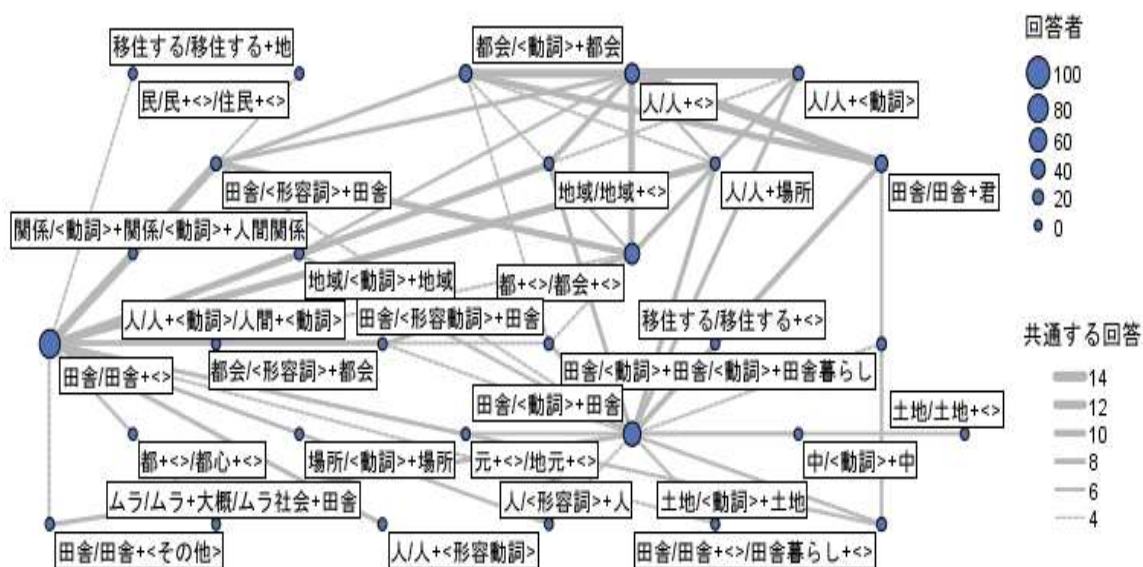


図 2. カテゴリ：田舎 係り受け分析 35/110、スライド 7-21
グリッドレイアウト

清泉（2018）は、執筆の目的を要約すると、次のように明確に述べている。

各地の山野河海を渡り歩くようになった切っ掛けはその土地の歴史を古老から聞き取り調査することであった。それぞれの土地で新しい楽しみを発見してきたが、勢いに任せた移住はその土地に根差すという視点を欠いていたと反省した。そこで、地方に定住しようと考え、永住しようとした瞬間に、田舎は都市民に対して頑なに心の扉を閉ざしていることに気づいた。訪問者や通過者から定住者になった途端、地元の者は素の相貌をはじめ都市民定住者に見せる。日本列島はどこまで行ってもムラ社会である。ムラ意識は今も厳然としてあらゆる場所にあり、もはやそれを糾問し、指弾しても始まらない。あるものを受け入れて、自分が生きやすい場所と環境を確保するスキルと発想を磨くことだ。ムラ意識とは、究極には無条件に習慣を踏襲し、全体に一切抗わない生き方であり、それは田舎にだけあるのではなく、都市民の心にも潜むものだ。あたらしい趣味を広げるには田舎暮らしは最適だ。自然と生活空間との調和は都市を離れることのデメリットなどすべてが吹き飛ぶほどの豊かな心象風景をもたらしてくれる。田舎暮らしの豊穡の時間を得るために、そのコツを書いたのだ。

清泉は田舎の社会実情をととてもよく観察している。経験した事実を述べているのであって、一方的な非難をしてはいない。都会でもムラ社会は見え難いが存続している。都市は人口が多いので、ムラ社会にあまり気づかないで暮らせるだけだ。一方で、小さな村ではムラ社会の害毒が顕著に見え易いということだ。これは私の見解・態度と合致しており、つまるところ、私たちは日本の郷土を護るために良い方策を提案しているのであり、何度も嫌な思いをして、心身を自傷しながらも、いまだに田舎に片思いさえしているのだ。田舎民が誤解するの

は都市民と共に双方にとって不幸なことだ。広い心で、思い直して、より良い暮らし、村に巣くうムラ社会を無くして、村社会を改善、再構築することを衷心から強く願っているのだ。

限界集落で、耕作放棄や所有者不明土地として山野を管理できないのなら、地域の共同管理地、入会地として広域コモンズにするのか良いと考える。山間地の収容能力が少ないことを考えて、自然環境、地方維持・振興のために直接支払い、生活環境整備をすべきである。一般論として山村民や田舎を悪く言っているのではなく、ともに日本の郷土を保全しようと方策を考えて、提案しているのだ。

仮説1：旅人として訪れる田舎の自然は美しく、村人も優しい。移住して村人になろうとすると、ムラ社会に組み入れられて、人間関係が厳しくなり、生活状態は急変する。

4. 直接体験事例1から事例3

ムラ社会に深くかかわろうとしない評論家的研究者は、田園回帰・自然志向を賛美するが、現実の厳しさ・醜悪さについては知らないふりをして、あるいは、現場を知らないので、事実についての発言を避けているのだろう。

私は東京で職を得て、関東山地を中心に山村調査を始めた。40余年、山村に通い続けて、何百人もの村人と田畑や茶の間で語り合ってきた。農耕者は誰もが親切に伝統的知識を喜んで分け与え、国のために大事な仕事だから頑張るように励ましてくれた。それでも、大方の村人は、私を旅の人しか見ていなかった。とりわけ村役場や有力者はあえて無視、黙殺してきた。このような対応に関しては、同様の地道な自然学校を農山村で開設している団体からも何事例も聞いたことがある。私たちが村で孤立し

ていたのではなく、村人こそがムラ社会の中で深く孤立していたのだろう。

雑穀栽培を保存するために、雑穀街道を FAO 世界農業遺産に申請しようと普及啓発活動を 5 年間ほど続けてきた。最近、山梨県上野原市農業委員会の方々から次の事を聞いた。村では村人が話し合うことも少なく、それぞれに孤立的存在である。農耕技術の改善協力、作物作付の状況共有などがなく、技術・技能の継承ができず、作物の生産過剰と不足が浮動する。残念なことに、私の直観はおおよそ合っていて、今日に至っては、村という地域共同体が助け合いを大事にしているということは誤解であったようだ。羽島での経験とは異なって、関東山地の山村では村人個人から旅の人のことはほとんど広がることがなかった。つまり言い換えれば、山村では村人が孤立して、地域共同体は著しく傷つき、崩壊に向かっているということだ。むしろ首都圏内に地理的位置を有していることが、特異な地域気風を形成してきたようだ。

都会の人々は学者であっても、村の人々の深い心の中の傷害、卑屈、自閉性、別に言い換えれば、独立自尊を同情や共感をもって知ることなく、少しも覗き見ることもない。私は、上述したように、45 年ほど国内外の村々を経めぐって、雑穀の栽培と調理の調査をしてきた。山村に住んではないので、村人ではないから旅の人と呼ばれる。しかし、調査日数からして実滞在年数は 7~8 年にはなるだろう。たとえ、村に住んでいても多くの事象を見ない人も多いから、何ごとも人の意思によるのだろう。私も村人になったら、ムラ社会の中で生きるようになったら、都市的自由を失ったに違いないので、村に頻繁に通うという在り方で良かったと、今にして思う。

旅人だからヨソ者で、一概に悪い人と言われているようではどうもなさそうだ。いく人かの古老たちからは、村人でもないの

に、村のことを思い、いろいろやってくれてありがとうと言われているのだ。それにもかかわらず、ムラ社会の有力者たちからは、恐らく煙たがられているのではないかと感じる。私は特定の村の為に、山村の誇りを主張しているのではなく、自然に寄り添う暮らしこそが誇り高く、人間の生活の基層原理だと考えているのだ。古老を敬愛しているのは、彼らが伝統的知識体系や技術・技能を保持しているからだ。ところが、今や村の為政者や I ターンの若者たちは古老の伝統的知識・生業技能に敬意をもっていないようだ。これらの事象については親しい古老からも度重ねて聞き及んできた（木俣 2021）。

これまでは公務と並行して、かなりの自費を用いて社会的共通資本を保全し継承する任意公共活動を行ってきた。社会的共通資本には多くの事象が含まれるが、特に私は、自然と山村の保全、生物文化多様性の継承、環境学習の素材である伝統的知識体系の技能実践、研究普及に大きく関わってきた（木俣 2011）。市民が、自ら支払った税金からの公金助成に拠らず、任意の私費や寄付により、非営利活動をするのはとても大事で、必要なことだ。日本列島の自然や農山村の景観はいまでも美しい。素のままに暮らす山民の心情も美しい。5,000 年前の縄文人が使っていた山畑での野良仕事は、冬でも暖かい日差しに、谷から吹き上げる風が快い。鍬一つで耕し、育て、収穫した有機無農薬の穀物、イモ、マメ、野菜を家族・友人に分ち、料理してともに美味しく食べる。これだけでも私には生きる喜びがある（木俣 2020）。

都会に出ると、電車中や街路上でも、あまりの不親切に出会って、不愉快になって帰って来ることが多い。小路では道を譲りあわない。大道の雑踏の中でも風を切って歩き、直進してくる。自転車は逆走してはばからず、同じく自動車ですら赤信号で止

まることもない。電車の中では誰もが無言で、席を奪い、ドア付近に大荷物を置き、乗降の動線を妨げている。車内の移動や乗降の際に、無言で体当たりしておきながら、謝りもしない。不快な金属音を漏らしながら、音楽を聴く。ほとんどの人々が、ラインやゲームをしているのか、携帯電話（スマートフォン）の画面にくぎ付けである。このような異様な行為と光景に、良い年齢になっても、嫉妬のない、無関心の人々が多くいるのかと残念に思う。不嫉妬は若者の専売特許ではなく、人生経験を経たであろう老人にも無教養の人々があまりにも多い。これらは環境も心身も砂漠化した都会の悪い一面だ。都市には面白いこともたくさんあり、都市が創造した表層文化も数多くあり、もちろん全否定しているのではない。しかし、都会において市民の知性と品性が劣悪化し、心身のストレスが強まるのは悲しいことである。都市においても、ムラ社会の相互監視に替わる無数の監視カメラ、相変わらずの世間体、近代社会の個人主義を基盤とできない全体主義的な雰囲気を感じさせ、空気を読ませ、均一的な集団に押し込む悪意がある。端的な事例はリクルート・スーツである。なぜ、学生たちは男女ともに黒ずくめにして没個性にするのか。自己のセンスをファッションで表現しないのか。自他が入力したエントリー・シートの経歴データで評価されていてよいのか。いくつも不思議に思うことがある。

江戸時代の檀家制度、五人組や隣組のような歴史的な末端行政制度に組み込まれて、日本人は相互不信、恐怖や脅しに弱くなったのだと考えてみた。自己の名利を求め、社会的共通資本への篤志寄付も売名との誹りに臆して行わず、個人も団体組織も連携せず、ムラ社会の場の空気を恐れ、黙して語らず、脅されればすぐに敗退する。場の空気には逆らえば、ウォルフレンの言うことを山本七平が表現し直したように、抗空

気罪という大人のイジメにあうのだ。しかし、山村に深くかかわろうとしない評論家的研究者は田園回帰・自然志向を賛美するが、美しさばかりではない現実の厳しさ・醜悪さについては知らないふりをして、あるいは、現場を知らないので、事実についての発言が少ないとさえ思える。

次に、直接体験した 4 事例を年代順に検討する。事例 1 から事例 3 は自然文化誌研究会や東京学芸大学のプロジェクトという団体が主な対象 target であった。事例 4 は他の事例の対応構造の共通性に加えて、対内構造も強い要因になっているので、とても複雑な図式になっているようだ。つまり、第 1 要因の団体に第 2 要因の個人が強く関わっているので、検討のための根拠資料が十分にある。このため、事例 1～3 の進行経過から仮説 2 を立て、さらに事例 4 では具体的な根拠資料に基づいての分析を行い、仮説 3 を立てる。その上で、山村農人の書簡のテキスト分析（木俣 2021）とも比較して仮説を検証する。

個人情報保護はすべての人々に対して尊重されるべきであるので、登場人物は記号であらわす。公職以外の個人については詳細な属性は記述しない。属性を加えれば、さらに詳細な分析ができるが、次のように制限する。これによって個人情報保護ができると考える。記号 A はムラ社会を形成する有力者たちで第 1 当事者であり、事例共通に使用する複数の存在である。B 以降の記号は事例ごとに別個の登場人物であるが、共通に使用する。Z はムラ撥撫を受けた第 2 当事者たちで、主に自然文化誌研究会や交流者たちで事例共通にする複数の存在である。

1) 事例 1 から事例 3 の検討

事例 1：奥多摩地域

雑穀調査研究で山村を訪問するようになったのは 1974 年に東京学芸大学に就職し、

阪本寧男に連れられ、東北調査に出かけて以来のことである。老師の助言により、自然文化誌研究会（略称学大探検部）を創立して、相模川水系の鶴川流域および多摩川水系の上流域調査を開始した。その後、国内外に調査研究活動を広げて今日に至っている。当初から山村に定点観察できる調査研究の拠点となる借家を求めてみたが、1970年代後半にはなかなか貸し手はいなかった。

雑穀の調査研究は山村の人々に結びつき、自然、農林業、生活文化からの学び、さらに山村振興への協働へと向かった。本格的に東京学芸大学自然文化誌研究会が山村に拠点を置く可能性に近づいたのは、奥多摩町の道所分校（廃校）に山村生活学習センターを構想した時である（一部、トヨタ財団1979年の助成を受けた）。しかし、水根・中山集落の人々の好意ある協働は得られ、当時住んでいた国立市の公民館と交流活動も奥多摩町で行った。しかし、有力者 A の賛同を得られずに、企業のテニスコートに貸すということで、実現に至らなかった。悲しいことに、この分校舎は消滅して久しい。しかし、この時の構想の一部は奥多摩町の「むかし道」として実現したと思っている。

次に、東京学芸大学探検部員の親戚が五日市町の旧家であったので、このつてにより町長の協力も得て、東京学芸大学公開講座「子どものための冒険学校」（第1期～第3期、1988～1990）を、五日市青少年旅行村で開始した。この地に小さな山小屋を建てる許可を得て、初めて拠点施設を造ることができた。この建築のために、苦労した探検部員は留年した。村人と学大探検部の協働と多彩なゲストを迎えての、最高に素晴らしい冒険学校は3年間続いた。この時の経験が「ELF 環境学習過程」の理論的基礎を与えたのである（木俣 2019）。さらにいえば、当事者以外は誰も知らない事実だが、この時の学大探検部メンバーの協力で、同時並

行で進めていた日本環境教育学会の創立作業ができたのである。学大探検部主催の、「環境学習セミナー」が同学会の最奥の源流である。しかしながら、ここでも再び、地元有力者 A により、突如、山小屋の撤去が言い渡された。もちろん A 当人から、建設の了承を得ていたし、この頃には林野庁などの覚えも目出度く、林業・森林環境教育の先進事例として、関係筋からは高い評価を受けて、視察も多かったにもかかわらず、不測の命令であったのである。留年してまで造った学生たちの志に報いるために、不情理だと強く抗議したが、A は撤回しなかった。このために山小屋は自らの手で撤去した。2度目の追放の憂き目であった。

桧原村の有力者 A とは財団法人森とむらの会で親しくし、東京学芸大学のボランティア講座も引き受けてくださっていた。そこで、自然文化誌研究会の会員が出資して桧原村に山林を買い、冒険学校を続けたいと相談もしてみたが、この可能性は進まなかった。

それでも、めげることなく、性懲りもせずに、山間地で地場産業を経営していくためには、自然に添った小規模多様な産業を興すか、都市近郊地では自給的な生業を継承しながら、都市で働く方法もとれる。私は長年調査研究をしてくる中で、都市住民が山村民から伝統的知恵、生活技能を学ぶ「環境学習」活動を観光産業として山村振興することを提唱してきた。トランジションした新たな文明のありようを望見するに、次世代を受験勉強に追い立てるより、人生を豊かに自分の手で組み立てられる知恵や技能習得の方が大切だと考えてきたからである。

事例 2： 秩父地域

次に考えた手法は、国の機関の協力によって国立公園の中に、念願であった拠点を得ることであった。高木文雄（森とむらの

会長)の助力で、林野庁に願い出て、奥秩父の造林宿舎を東京学芸大学(現・環境教育研究センター)の秩父分室として使用許可を得た。学大探検部の卒業生・現役生が協力して、朽ちかけていた造林宿舎・大河俣小屋を修復して、冒険学校の拠点とした。これに加えて、中津川集落の集会所を借用して、エコミュージアム大滝のビジターセンターとして改修整備した(一部、富士フィルムグリーンファンド、サンワみどり基金の助成を得た)。冒険学校(第4期から第13期、1991~2000)は、参加者の子どもたち・スタッフ他100人余りが集まって、甲武信小屋、十文字小屋、大河俣小屋周辺、中津川キャンプ場で立体的に展開、継続してきた。この他に、環境教育セミナー、大学公開講座「子供のための冒険学校」および「野外における環境教育」、文部科学省の環境教育担当教員講習会など、多くのプロジェクトを大滝村で実施して、経済効果も含めて、地域の評価も高くなった。ところが、中津川の集会所の土地所有者AとBの確執で、ここから追放され、三度目の憂き目にあった。当初、村人Cから「絶対に出ていくな」といわれ、2升の酒を飲み誓わされたのだが、そう言ったC本人が追放に手を貸したと後日になってから聞いた。私はこの約定を固く守って、今日まで一度も、自ら山村から逃走したことはない。3,000町歩余りを所有する大地主Aで、中津川キャンプ場オーナーとは親しかったので、歴史的に土地を奪われた村人が区長Bになって先祖の怨念の埋もれ火を灯したのかもしれない。あるいは親しかったDが共産党推薦で村会議員になったからかもしれない。いろいろ検討してみたが、学大探検部には落ち度を認められず、不情理、理不尽なムラ社会の内情は窺い知れなかった。それでも、この時のエコミュージアム大滝の活動は、合併した大秩父市の人々により、「秩父まるごと博物館」として、当時、グリーンスクール所

長であったEやFらによって、実質的には拡大再生して引き継がれているので、地域に役立った活動であったと思っている。その後、Fが雑穀に関心を持って、学校でも教育実践を行い生徒や地域の人たちと秩父雑穀自由学校なども活動していることはとても喜ばしいことだ。

事例3：甲州東部地域

2000年ころから、秩父から甲斐の小菅村に拠点を移した。卒業生が小菅村の源流研究所研究員になったのを契機に、NPO法人自然文化誌研究会は小菅村に活動拠点を置くことにしたのである。村役場の仲介で民家を借りて、自然文化誌研究会として冒険学校、エコミュージアム日本村活動を継続することになった。しかし、借用した民家からは、不特定多数の学生や会員が利用するというのを嫌われて二度追放された。現在は、キャンプ場を借用して、2棟のログキャビンを建築して(一部、森林基金からの活動助成)、常設の冒険学校キャンプの拠点を確保している。東京学芸大学と小菅村は社会連携協定(2005)を結んでおり、中央公民館に収集されている民具などの整備、維持管理を請け負っていた。この自主的な公民館活動を、エコミュージアム日本村、コア・ミュージアムを植物と人々の博物館と称してきた。また、雑穀栽培講習会や環境教育セミナーを「日本村塾」として実施したいと提案してきた。この塾には先生はおらず、入学試験も卒業資格もなく、無料で学びたい人が学び合う、原初の大学のようなもので、くに(村、地域)から国(中央)を考え、政策提案をするような学びの場を創ってみたい。日本村塾の塾生は著者を含めてまだ少ししかいないが、2015年春から開始していた。

小菅村の元村長、前村長は好意をもって、雑穀復活・普及や環境学習活動に協力してくださっていた。村役場は雑穀栽培に助成

金を支払い、小菅の湯は雑穀メニューを充実し、物産館は地元産雑穀を買い上げて観光客に販売した。とりわけ、前教育長は常に気配りをしてくださっていた。多くの長老たちも、植物と人々の博物館の館長や顧問になってくださり、また、学大学生実習や環境学習セミナー、雑穀研究会シンポジウムやエコミュージアム研究会大会など、多彩な企画に対して共催や後援をしてくださっていた。もちろん、現在でも、このような関係は基本的には維持されており、多くの村民からは今でも親しくしてもらっている。若い移住者たちとも親しくしてきたが、そのうち数人は残念ながら他出してしまった。

ところが、2017 年に中央公民館の耐震工事で、移転を求められた頃から、幾分風向きが変わってきているようだ。前村長に対抗して異例なことに選挙戦になり、現村長が当選した。他地域出身者が村役場職員に就職し、村おこし協力隊員も加えて、村の事情には通じていない人が増えた。ましてや私たちが 1976 年から 45 年来、小菅村と交流し、2000 年からは活動拠点を定着させて、東京学芸大学と社会連携協定に基づいて年間いくつもの活動をしていても、大方無関心であった。村長 A は伝統的神楽の保存にとっても熱心であるが、雑穀普及には関心が薄いようだ。私たちは中央公民館の改修を担当したコンサルタント B には協力して、道の駅展示や FAO 世界農業遺産（椎葉村）に関しても手伝ってきたが、改修中央公民館には民具展示の場所は設置されずに、東京学芸大学の学生・院生実習で整備してきた民具は、再びお蔵（倉庫）入りしてしまった。小菅村には郷土資料館はない。村の先祖が大切にしてきた暮らしの道具に対する敬意がまた衰微したようだ。現村長はたった 1 票差で再選された（2020）。それでも、村人 2 名が自然文化誌研究会の理事であり、彼らの好意に重ねて、研究会事務局長も小

菅村に住んでいるので、古民家所有者の了承を得て、母屋を郷土資料館にして、小菅村の民具を展示する案も提示されていた。しかし、この古民家は村役場の意向で、コンサルタント B らに委託して旅館にすることになった。このため、古民家の付属倉庫二階建ては柔道場や書道教室にも使用していたのでここを借用して、植物と人々の博物館を移動させた。

丹波山村の元村長は雑穀街道には関心はなかったが、雑穀栽培を継承している村人の岡部良雄農人の仲介で前村長には二度会い、雑穀街道普及会や FAO 世界農業遺産のことを親しく説明して、おおよそ賛同を得たところで、彼は急逝された。現村長には改めての説明は実現していない。丹波山村も小菅村と同じく、平成の大合併には加わらなかった。独立した自治体として存続したことは、過疎高齢化などで大変だと思うが、合併によって過疎のさらに過疎地・限界集落になるよりはよかったと思う。しかし、元村長は山梨県内の塩山市あるいは東京都の奥多摩町への合併を望んでいたと聞いた。このために、合併に賛成しなかった岡部農人や移住職員には冷淡になり、有能で熱意のあった職員は他出せざるを得なくなった。

上野原市は雑穀街道の中心となる地域で、長寿村で有名であった桐原がある。私の雑穀に関する民族植物学の調査研究はこの地から始まり、以来 40 余年、定点観測地として、通い続けてきた。今でも雑穀を栽培している住民は存在している。また、農業委員会はキヌア栽培で農業振興を企図している。西原の中川智農人の指導を受けて、雑穀栽培を継承している農業委員 M は農業委員会メンバーに呼びかけて、雑穀街道普及の説明の会合をもった。栄養士会でも講義をさせていただいた。

私は雑穀街道を FAO 世界農業遺産に申請する提案を、山梨県知事、神奈川県知事、

上野原市長、小菅村長、丹波山村長にして、行政で取り上げていただけるように、手紙を数回送り、小菅村長、丹波山村長および相模原市緑区長に説明に伺った。農林水産省や関東農政局の担当部局も訪問して協力を依頼し、山梨県担当部局は協力をする旨、連絡をいただいた。雑穀街道は新聞やインターネット記事にもなり、いくらかは社会的認知が進み始めている。

仮設 2：自然文化誌研究会の環境学習活動が 10 年ほどして、厚意ある村民の協力を得て、成果を上げて定着してくると、地元有力者から撥撫される。地元有力者とは、大方は、封建的土地所有者（山林、農地など）である。

5. 直接体験事例 4：相州北部地域

相模原市緑区の旧藤野町、さらにそれ以前の旧佐野川村は桐原に隣接して、類似した山間地環境であったので、私が調査を始めた 45 年ほど前には雑穀栽培者が少なからずいた。現在でも、ほんの少数とはいえ、伝統的な栽培者がおり、かつ雑穀ブームに乗ってか、新たな栽培者は少なからずいる。この藤野地域は、パーマカルチャー日本センター、シュタイナー学校があり、この 10 年ほどではトランジション・タウン日本の中心地になっている。第 2 次世界大戦末期頃には東京から作家や画家が疎開していたので、芸術には関心が高い地域であった。現在は、いわゆる I ターン移住民が人口の半数を超えているようだ。このため、日本の新しい地域社会や生活スタイル創造の可能性を期待させる街である。

1) ムラ社会からの撥撫の経過

40 年前の雑穀調査から、この数年、農業法人藤野倶楽部の好意で駅前に畑も借用し、ミレット藤野などによる雑穀栽培講習会、さらに自然文化誌研究会／植物と人々

の博物館／森とむらの図書室（藤野分室）の設置、雑穀街道展示など、多くの活動を展開してきた。これらによって、藤野から、上野原市／桐原・西原、小菅村、丹波山村、さらに秩父市や横瀬町に繋がる雑穀街道が構想できるのである。雑穀街道普及会を準備のための仮の団体として、賛同者を募り、FAO 世界農業遺産に申請する活動を進めてきた（付録資料 1）。その結果、相模原市緑区長も雑穀街道の市村現地を視察されて、賛同してくださり、FAO 世界農業遺産に申請準備をする窓口を決めて、4 年計画の案も提案してくださった（付録資料 2、提示案であるので非公開）。

ところが、こうした進展状況の中で、思いもよらなかった事象が起こった。過去の事例と大方類似して地元有力者が関与しているのではあるが、しかし、今回の事例は特異な内容を濃く含んでいた。文福洞（以下 Z）は、この事例に関して、雑穀街道を FAO 世界農業遺産に申請することの提唱者として、相当数の賛同者に対する説明責任もあり、加えるに社会的な責任も取らないといけない。したがって、この事例におけるムラ撥撫の主たる標的・被害者であり、このためにかなり自傷的にならざるを得ない部分もある。過去の事例に増してとても辛いことではあるが、Z としてこの事例を詳細に検証せねばならない。下記の論考は e メールで記述された文章を根拠事実としており、事実に基づき批判的に検討することは、単なる非難ではないし、ましてや虚偽・偽証ではない。送受した e メール文面を時系列に従って検討し、加害者および同調者の心の推移を解析する。付録資料 3 は事実を検証する根拠である。しかし、当事者間の私信ではあるとはいえ、信書の秘密・個人情報保護のために非公開として掲載しない。ただし、この事象が生じた発端の核心については第 1 当事者 A から明確に説明されていないので、誤解も含

むかかもしれないから、第 2 当事者 Z に関する私信に関しては、偽証ではない証拠として求められるのなら個別に開示してもよい。

雑穀街道普及会の発起人の一人で、中心的な役割を果たしていた地元有力者 A のおかげで、雑穀街道を FAO 世界農業遺産に申請することについては、藤野での賛同者が多くおり、また、相模原市緑区長も賛同してくださったので（2018 年 11 月 27 日）、とても感謝している。A とは 2014 年 11 月に雑穀街道を提唱する以前から 20 年来、山村振興の活動を一緒にしていたので、ほとんどすべての関連文書やその内容について共有していた。したがって、A は雑穀街道を FAO 世界農業遺産に申請することについて合意して、重要な役割をしていたのだと、Z は認識していた。ところが、A は度重なる議論に参加、合意し、その都度、確認のために整理して賛同者や一般に公開してきた文書記録資料を受け取りながら、ほとんど読んでいなかったのだろうか。つまり、A は自らが作り出した重要な社会的責任を十分に理解していないので、個人としての社会的重責を独断即決で放棄し、さらに、その行為に他の地元有力者をも巻き込むことさえもできたのだろうか。

今回の事象の第一の問題点は、活動の核になっていた重要な発起人の A がとても重要な役割を果たしてきたにもかかわらず、今後、突如、雑穀街道普及には関わらないことにし、社会的責任を放棄したことだ。2019 年 7 月 18 日に相模原市緑区長が行政として 4 年計画で、雑穀街道を FAO 世界農業遺産に申請すると雑穀街道普及会を支援する企画を決めた時点（2019 年 7 月 23 日）から、A が心変わりしたことを Z は感じていた。しかし、A からは直接、準備会会員に説明責任が果たされず、A が独断即決で行った行為については社会人としては問題があると言わざるを得ない。次のよう

に順を追って経緯を詳細に確認し、整理して仮説 3 を立てることにした。

A が丹波山から小菅、西原、上野原を順次訪ねて、雑穀がほとんど栽培されていないことを確認して（2019 年 9 月 16 日）、A は雑穀街道の可能性はないと判断したのだろう。実際に現状はその通りで、雑穀栽培は危急状態にある。藤野（A と D）のグループだけで楽しく活動するという、この判断は現実には即しており、小菅村から故郷藤野に U ターンしていた A にとっては合理的だ。しかし、どうしても雑穀栽培を広域連携で残したいという Z の意志とは異なる。

その結果、次第に、A は藤野を中心にムラ社会を作って活動しようとの考えになったのだろう。西原の B は藤野の BIO 市に参加しているので加えるとしても、丹波山村・小菅村は可能性がないので A の活動範囲に入れないことにし、藤野を中心に活動をすることにしたのだろう。以前から A は Z にも小菅村での活動を縮小して、藤野（A と D）のグループで活動するように何度も勧めていた。もちろん、Z は断った（2019 年 9 月 5 日）。なぜなら、小菅村源流研究所研究員の提案に自然文化誌研究会の理事たちが合意して、その活動拠点を小菅村に置くと決めていたからだ。その後次第に、A から藤野での活動の様子は Z に伝達されなくなった。

そこで、A は C、D ほか藤野で雑穀栽培に関わっている人たちと会合を持って（2020 年 1 月 20 日）、藤野（A と D）のグループだけで独自に活動することにして、雑穀街道普及には関与しないことにしたのだろう。Z はその会合に呼ばれず、C はその場にいたが、その場の雰囲気でもできず、なんとなく結果的に同調せざるを得なかったと推察する。このときに、雑穀街道普及会藤野と呼称すると C に聞いていたのが、実際には藤野あわきびひえの会と呼称することになった。その頃から、A

からは Z に直接メールは来なくなり、B または C 経由で伝達されることになっていた。C によるその会合に関する説明の範囲では、当然、雑穀栽培をしている有機農家 D が雑穀街道普及に合意したうえで、A や Z らと一緒に雑穀街道の普及活動に加わって、雑穀街道普及会藤野の会代表になったのだと聞き及び、そのように認識していた。そこで、Z は A の了解を得て、別の研究会のセミナーで、D に話題提供するようにお願いした（2019 年 12 月 20 日）。しかし、D の返信メールの文面は単に一緒に活動しないという丁寧ではあるが断りだけであった。Z は有機農業の調査研究をしてきたので、D には一方的に期待をしていた。どうしてこのような対応を D から受けたのかに心が凍り付くほどのショックを受けて、雑穀街道普及会藤野（実際には藤野あわきびひえの会になっていた）に疑念を抱いた。A は D らが相模原市助成金で資材が購入できると喜んでいただとも言っていた。

Z は事前に、無理せずに、手伝いの必要があるときにだけ呼んでほしいと伝え

（2020 年 2 月 16 日）、疑念を晴らそうと説明を求めたところ（2020 年 2 月 17 日）、A はそれに対して雑穀街道を FAO 世界農業遺産に申請する活動をやめる旨を意思表示した。雑穀栽培が藤野で継承されることを、Z は願うから、残念ではあるが、A の個人的見解に何ら反対も異存もない。ただし、1 点だけ再考して、雑穀街道普及の賛同者には名前だけでも加わるとしておいてほしいと求めたが、これも拒否された。その直後、A は独断即決して、藤野のまちづくりセンターを訪れて、緑区の担当部局が企画提案し、緑区長も合意した雑穀街道を FAO 世界農業遺産に申請する活動を中止すると告知した（2020 年 2 月 17 日）。その理由は、① Z による D の人柄への誤解、② 藤野あわきびひえの会は雑穀街

道の活動をするのは困難、③ 急いで雑穀街道協議会（行政を中心とする）の立ち上げの要望には応じられない、ということであった。自然文化誌研究会の会員もこの日に退会し、年会費の返金が行われていた（自然文化誌研究会総会資料 2021 年 2 月 7 日）。

A が仲介して、Z と共に緑区長にお会いして、相模原市緑区により 4 年計画で FAO 世界農業遺産に申請するという「雑穀街道実現に向けた本誌の支援について（案）」が具体的に企画されたのだから、A はその中心的な役割を果たし、誇りと責任を持つことになるはずだった。どうしても、A の行為には情理が弱いと思ったが、事の次第はこれで済まず、さらに A の作意が Z 以外の他者にも加えられることになった。

自然文化誌研究会事務局長 E は C がメール（2020 年 3 月 25 日）で表現した、A と Z との諍い、揉め事について、A からの度重なる直接の電話で聞いていた。A の意見は（2020 年 3 月 26 日）、Z が A の大切な友人である D の悪口を言ったので、一緒に活動しないということであったと言う。Z は A を強く信頼していたので、何年も一緒に進めてきた雑穀街道普及会で FAO 世界農業遺産に申請する企画以外の活動方向はあり得なかった。そこで、D から一緒に活動しないとのきっぱりした対応にとっても驚いたのだ。Z が A を信頼する限り、その時には D の意向が A を変えたのだと考えるしかなかった。したがって、D の主宰する藤野のグループが雑穀街道普及に参加しないのは、Z は D と親交はなく、その人柄を全く知らないの、A に D の頑なさから発したのかと質問した。これが D に対して悪口を言ったということにされたのだ。明らかに、Z が抱いた A への疑念は藤野における現実として進行していたのであった。

ところが、E の理解は次の通りであった。それぞれに立場や状況が違えども、共感して大切に進めることで大目標に向かって進んできた。A は藤野での共感者、人と人をつなぐには重要な役割を担ってくれたはず。したがって、Z が A の友人 D の悪口を言ったので第一に悪いのであって、それで A との関係が壊れたというニュアンスでの認識であった。つまり、A の独断行動が雑穀街道普及会賛同者に対してはもちろん、相模原市緑区長はじめ担当部局に不義理な状況になってしまったことの重大性を認識していないようであった。

上述してきた経緯のように、Z は C が言ったような諍いを A と起こしていなかったのだが、Z が発言すれば、ムラ社会ではさらに 2 人間の諍いと見るだろうから、Z は沈黙した。最終的な A からのメールでは（2020 年 3 月 29 日）、すべて A が独断でしたことで、藤野あわきびひえの会は雑穀街道普及の活動には不適合で、今後の活動から外れるとのことであった。2018 年にも A はミレット藤野の会も独断で中断し、この名称は今後使用することを認めないと言っていた。たとえ会の代表者でも会の解散を独断で決めてよいことではない。どちらにも何年も一緒に活動してきた会員や多くの賛同者がおり、その蓄積してきた活動の成果を、代表者でもない A が独断で中止させることは社会的常識ではあり得ない。小菅村以来、度重ねて繰り返されてきた突然の途中放棄（破壊）だ。今回も、Z は A から経緯の説明もなく一方的に打ち切られてしまった。A は身近な人たちだけと楽しくやりたいというムラ社会を新たに形成し、それまでの活動を壊すというこの不情理は Z に対する撥撫だと直感した。しかし、E からは Z の認識が間違っているとひどく批判され、喧嘩両成敗的な見解を述べられた。信頼している E がそのように固く思っているようなので、ここでは C、E や

Z たちが争うこともないので、Z は沈黙するしかなかった。これは典型的なムラ撥撫で、イジメの構図だ。こうして、小菅から U ターンしてきた A は藤野に自らのムラ社会を再形成したのだろう。

Z は上述したことを再度繰り返すが、Z は A に、A と D との間の活動合意について疑問を呈しただけで、D の悪口は言っていない。別の会のセミナーでの話題提供を E に断られたのは、Z の有機農家調査の経験上、有機農家は苦勞してきたので頑固な人が多いから、D もそういうタイプで、それで断られたのかなあと A に質問はした

（2020 年 2 月 15 日）。その後、これが悪口であると誤解釈されたのなら、Z は謝罪すると、A と E には伝えた。

この後、A は当人を始め、藤野の有力者 6 人および 1 法人を雑穀街道普及会の呼びかけ人や賛同者から削除するように E を通じて求めたので（2020 年 3 月 28 日）、それに従って、雑穀街道普及会ホームページの発起人・賛同者リストから削除、更新した。このことは第 2 の問題点である。A が個人的な退会にとどめずに、地元有力者たちを巻き込んだことは典型的なムラ撥撫の仕打ちでイジメ行為（共同絶交宣言）であり、そのターゲットは雑穀街道普及会（準備会）、実質的には Z に向かっていた。藤野の有力者、とりわけ F はとても理解のある人で、植物と人々の博物館／森とむらの図書室藤野分室や雑穀ローカル・シードバンクを預かってくださっている（この時点で）。Z が保存していた雑穀の一部を継承してシードバンクを維持している G は、ミレット藤野で雑穀栽培講習会を運営していた際に、A から非難され排除された人だった。G はその時には A がひとりで話をややこしくしている、ミレット藤野を解散するというのは何か特異な思い込みでもあるのかなどと疑問を呈していた。それでも G はさらに雑穀街道普及のために発展的活動を

したいと書いていた（2017 年 12 月 19 日）。この後に、ミレット藤野は A が一存で解散してしまった。今から考えれば、A が自分だけが雑穀畑作業をしており、G は畑作業を怠るから、一緒に活動できないという言を信じることにより、G にとってみれば Z と C は意図せずではあるがイジメの傍観者側に組していたのだと思う。H は今回の件で、A と Z の仲介役を申し出てくださった（2020 年 3 月 17 日）。しかしながら、結末は、Z には事由説明もされずに A によって、2014 年の提案以来、何年もかかってセミナーやシンポジウム、協議会によって築いてきた発起人・賛同者および地域自治体などとの信頼関係が壊されてしまった。ただ唯一、公正な対応をしてくれたのは、トランジション藤野の I で、呼びかけ人に残るとのことだった。

このように地元有力者たち、F、H および G も、A の独断専行に従い発起人や賛同者を退くことになったのにはひどく驚いた。A 個人が退会すればよいだけのことなのに、良識ある人々までが巻き込まれて、どのような判断をして付和雷同したのか、当人たちからは何も聞かされていない。H も仲介することなく、今まで排除されていた G までがどうしていわゆるムラ撥撫（共同絶交宣言）にまで加わったのか、まったく情理が通らない。したがって、これは典型的なムラ撥撫、イジメの構図になっている。すなわち、ある日突然、Z はイジメのターゲットになってしまったのだ。しかも、20 年来、それなりに信頼を寄せてきた A が加害者になり、この時点では C は傍観者、E は消極的に加害者側に組したことになる。

C も E も、Z が長い付き合いで、A の性格を知っているのに、適切な対応をしなかったから悪いのだという。しかし、藤野に関しては、A が地元有力者で、活動が進展してきたのだから、A を尊重するしか

い。Z はこれらに関していまだに手が震え、身体的変調をきたすほどの、思いもよらず重篤な心的外傷後ストレス障害 PDST を負ってしまった。このエッセイを書くことは、心の平安を取り戻そうとする治療である。

A と D たちのグループは地域での雑穀栽培をテーマに相模原市緑区の地域活性化事業交付金の申請をしたそう（2020 年 3 月 25 日）。まちづくりセンターの担当者によると、相模原市緑区交付金申請で雑穀街道世界農業遺産登録については取り扱いが無いことになったようだ。A と Z は諍いをしていることにされており、C はこの件には関与せずに、上岩の雑穀畑で雑穀街道普及会の活動が続けるという。佐野川には古くから雑穀栽培を続ける農家もあり、また相模湖のチーム五右衛門では津久井在来大豆・麦等の栽培をしながら醤油・味噌作りを楽しんでいる。

A とは 2019 年後半から、なんとなく疎遠な気はしていた。A に対して疑念をもったのは、いわば未必の故意のように、結果が予測できるのに、これを回避するために、A は忙しかったという理由で意図的に変心事実・経緯を語らず、しかし虚偽は述べてはいないとするのなら、恐らく自らの行為には悪意が含まれているとは感じていないのだろう。E は何年にもわたる経緯を知らず、状況に無視というより無関心であったのだろう。D は雑穀栽培や有機農法に熱心な善良な人なのだろうが、結果的には雑穀街道を普及するという、地域の雑穀栽培をする人々のつながりを悪意もなく、意図もせずに同調者として壊した。相模原市の助成に関しても、A の独断即決で、すでにキャンセルされたようなので、提案した雑穀街道を FAO 世界農業遺産に申請することは、行政の賛同なしには進められないので、実質的には諦めることにならざるを得ない。今回の事例は、今までにない要因が加わり、あまりに巧みな悪意が仕

組まれている。Z 個人を排除するとは言わずに、地域有力者数人が共同して雑穀街道普及会から退会することで、実は藤野から往来民 Z を排除し、さらに雑穀街道を FAO 世界農業遺産に申請するという活動を排除したのである。その上で、目的を違えて市助成を受けるという行為を行ったのであるが、FAO 世界農業遺産の申請企画をした担当部局はこの行為をどのように考えているのだろうか。

重要な当事者 A が主導者であり、何十年と親しくしていた C や E は村に居住し、ムラ社会の恐怖を実感しており、往来民 Z は彼らが次の被害者にならないように、今は批判せずに緘黙し、このエッセイも 1 年間は公表を保留することにした。E は Z が書いたメールマガジンの一節、会報に寄稿したエッセイの一部に対して不快を表明し、エッセイは会誌に掲載できないと却下した。Z は学問、思想信条の自由を求めるので、事実を書き記すことを検閲されることは拒絶する。会報には今後寄稿しないことにした。Z にとって C と E は良い友人であり、今後とも彼らへの信頼は揺るがないとはいえ、今回の事象については全く納得していない。A 個人を非難しても問題の解決はできないし、さらに雑穀街道を FAO 世界農業遺産に申請することも相模原市緑区行政からの信頼を失ったので困難になるであろう。

しかしながら、この第 4 事例の藤野については詳細な研究資料があるので、研究材料として詳細に分析し、ムラ社会の形成、ムラ撥撫（イジメ行為）の発生を明確にすることにした。長年、好意を持ち続けてきた山村と交流回帰することを勧めてきた研究者の責任として、余生最期にその謎を解き明かしておく。

仮説 3：ムラ社会の形成と撥撫の発生は地元有力者の個人から生じ、新旧居住者を巻き込み、常時往来者を排除するのだろうか。

2) ムラ社会の形成とムラ撥撫の発生に関わる当事者間の送受 eメールのテキスト分析

この事例 4 に見られるムラ社会の形成と撥撫の発生は A の個人的特性が強く関わっていると思われるので、このムラ社会の形成と撥撫の発生の要因や構図を、A と Z 間で送受信された eメールを根拠資料としてテキスト分析から検討する。

① 分析方法

これからは、どうして被害者 Z と加害者 A になったのかを問う。この直接体験的な事例から、Z の自傷行為ではなく、個人 A を今更非難するのでもなく、ムラ社会の形成とムラ撥撫の発生のメカニズムを明らかにしたいのだ。科学は事実データを根拠に置き、論理的に考察して、理論を導く。ここでは Z と A との間で送受信された eメールのテキスト分析を上述したと同じ方法で SPSS テキスト分析ソフトウェアを用いて行った。2014 年 12 月 24 日から 2020 年 3 月 29 日までに送受信された eメールの文章をエクセルに取り込んで、テキスト分析ソフトウェアの感性分析と係り受け分析に供した。eメールの概要は時系列順に付録資料 3 に作成したが、これは個人情報保護のために掲載はしない。Z からは 163 通、A からは 136 通が送信されているテキスト・データはそのまま転記(カット&ペースト)したので、ここに改竄や虚偽は加わっていない。ただし、分析の結果には個人情報にあたる属性は知り得ていることもあるが示さないことにする。個人の人間関係を伴う属性はムラ社会形成の分析にあたって、主要因であると予測され、明確な実証につながる。しかし、心中にしまわれた関係性まで詳細に分析することは個人情報に深入りすることになる。そこまで心理学的分析を深めることは目的としないので、本論では不十分を承知で、ここで分析を停止し、考察には加

えない。

② 分析結果

表3にeメールのテキスト分析による語彙のタイプおよびコンセプトパターンを示した。ZからAに送信されたeメール(n=163)の感性分析によれば、<良い>について、良い105、感謝94、嬉しい26、安心18、楽しい16、満足15、喜び全般13、期待11、褒め・賞賛10、快い7、好き5、幸運2、美味しい2、体が好い状態1、金額への称賛1、好評・人気1、吉報1、合計328(48.2%)であった。<悪い>については、悪い48、不満16、謝罪10、残念10、不快8、体が悪い状態8、返答なし7、批判4、悲しい4、困っている3、悲しみ全般3、苦しみ3、不運3、不安3、対応が遅い2、嫌い2、諦め2、淋しい1、売れていない1、怒り1、公開、合計140(20.5%)であった。<その他>について、要望78、お願い65、疑問26、問い合わせ18、提案・忠告17、勧誘5、激励4、合計213(31.3%)であった。また、コンセプトパターンで多く出現したのは、19(F)、18(意見、連絡、G、17(作る、書く、言う、手伝う)、16(メール、元氣、参加、範囲、うかがう)、15(整理、会う、続ける、進む)、14(自分、取る、持つ)、13(シンポジウム、明日)、12(雑穀、電車)などであった。

他方、AからZに送信されたeメール(n=136)の感性分析によれば、<良い>について、良い43、感謝28、安心10、快い7、褒め・賞賛6、嬉しい6、喜び全般4、楽しい3、期待3、感動3、祝福3、美味しい3、満足3(以下省略)など、ここまでの合計122(32.8%)であった。<悪い>については、悪い47、謝罪13、不快9、困っている8、体が悪い状態7、不満7、残念6、返答なし4、悲しみ全般3、不評・不人気3、嫌い3、不安3(以下省略)など、ここまでの合計113(30.4%)であった。<その他>について、

お願い45、要望31、提案・忠告22、問い合わせ19、疑問13、勧誘4、驚き3(以下省略)など、ここまでの合計137(36.8%)であった。また、コンセプトパターンで多く出現したのは、14(今日、参加、雑穀、いかがでしょうか)、13(待つ)、12(友人、話し合い、中川)、11(駅前、手伝う、聞く)、10(伝える、遅い)、9(知りあい、義兄、連絡、西原、借りる)、8(お手伝い、メンバー、一緒、作業、相談)、7(ミレット、ワークショップ、仕事、収穫、D、市、提案、活動、身体)などであった。

表3の結果から、ZとAのeメールの内容を比較すると、タイプ<良い>に関しては、Z(48.2%)はA(32.8%)よりも日々の暮らしを肯定的感性でとらえている。タイプ<悪い>に関してみても、Z(20.5%)はA(30.4%)よりも日々の暮らしに否定的な感情は少ない。タイプ<その他>の内容を比較すると、Z・Aの双方とも共通してお願い・要望・提案が多く、協働の姿勢がみられる。ZとAとの差異は大きくはないが、疑問(Z26/A13)と激励(Z4/A0)に特徴が見られる。また、コンセプトパターンでAに特徴的であるのは、感性分析の語彙に困っていることがZに比べて多く、また、コンセプトパターンでは直接の知人C、F、G、E他以外に交友関係の語彙、友人、知りあい、義兄、メンバーなどが多い。Zの場合には、直接の知人C、E、F、G他しか抽出されていない。Zのタイプの中に<良いー感謝>が94、コンセプトにありがとう関係語彙が合計89抽出されているが、他方、Aのタイプの中には<良いー感謝>が28、コンセプトにありがとう関係語彙はまったく抽出されていない。ここにはZとAとの人間関係が明示されている。AとZを比較して要約すると、AはZよりも、日々の暮らしに肯定的感性が低く、特徴は交友関係の語彙が多く、感謝<良い>に関わる語彙が著しく少ない点にみられる。すなわち、日々の暮らしの

中心には人間関係がありながら、それが否定的な感性に支配されていることを示している。ここに個人から始まるムラ社会形成の要因があり、時に触れて、ムラ撥撫を発生させるのだと考えられる。

表 2 の数値と比較すると、書評は当然ながら本の評価が目的であるので、書評 (n=30) のタイプでは、＜良い＞が 50(37.3%)、＜悪い＞が 60(44.8%)、その他 24(17.9%) で、＜良い＞と＜悪い＞が比較的近い数値になっていた。一方で、コメント (n=166) の

タイプでは、＜良い＞が 95 (28.8%)、＜悪い＞が 171 (51.8%)、その他 64 (19.4%) となっていた。回答者は、本来、本の評価をしているはずであったにもかかわらず、コンセプトパターンにも見られるように、記述内容の田舎の評価に関心が向いており、タイプ＜良い＞と＜悪い＞の数値は後者＜悪い＞が半数以上と多く、田舎への悪い評価を示していた。表 2 と表 3 のデータを比べれば、とりわけ Z が田舎に好意を抱いていることが明らかである

表 3. eメールのテキスト分析による語彙のタイプおよびコンセプト・パターン

ZtoAメール n=163			AtoZメール n=136			
タイプ		コンセプトパターン	タイプ		コンセプトパターン	
良いー良い	105	I人名	悪いー悪い	47	今日	14
良いー感謝	94	意見	その他ーお願い	45	参加	14
その他ー要望	78	連絡	良いー良い	43	雑穀	14
その他ーお願い	65	G人名	その他ー要望	31	いかがでしょうか	14
悪いー悪い	48	作る	良いー感謝	28	待つ	13
その他ー疑問	26	書く	その他ー提案・忠告	22	友人	12
良いー嬉しい	26	言う	その他ー問い合わせ	19	話し合い	12
その他ー問い合わせ	18	手伝う	悪いー謝罪	13	中川	12
良いー安心	18	メール	その他ー疑問	13	駅前	11
その他ー提案・忠告	17	元気	良いー安心	10	手伝う	11
良いー楽しい	16	参加	悪いー不快	9	聞く	11
悪いー不満	16	範囲	悪いー困っている	8	伝える	10
良いー満足	15	うかがう	悪いー体が悪い状態	7	遅い	10
良いー喜び全般	13	整理	良いー快い	7	知り合い	9
良いー期待	11	会う	悪いー不満	7	義兄	9
悪いー謝罪	10	続ける	悪いー残念	6	連絡	9
悪いー残念	10	進む	良いー褒め・賞賛	6	西原	9
良いー褒め・賞賛	10	自分	良いー嬉しい	6	借りる	9
悪いー不快、悪いー体が悪い状態、	8	取る	その他ー勧誘	4	お手伝い	8
良いー快い、悪いー返答なし	7	持つ	良いー喜び全般	4	メンバー	8
その他ー勧誘、良いー好き、	5	シンポジウム	悪いー返答なし	4	一緒	8
その他ー激励、悪いー批判、悪いー悲しい、	4	明日	良いー楽しい、悪いー悲しみ全般、良いー期待、その他ー驚き、良いー感動、悪いー不評・不人気	3	作業	8
悪いー困っている、悪いー悲しみ全般、悪いー苦しみ、悪いー不運、悪いー不安	3	雑穀	良いー祝福、良いー美味しい、悪いー嫌い、良いー満足、悪いー不安	3	相談	8
良いー幸運、悪いー対応が遅い、良いー美味しい、悪いー嫌い、悪いー諦め	2	電車	以下省略	3	ミレット、ワークショップ、仕事、収穫、D、市、提案、活動、身体	7
良いー体が好い状態、金額への称賛、好評・人気、吉報、悪いー淋しい、売れていない、怒り、後悔	1	わかる、中川、西原、FAO世界農業遺産、大事、提案、来年、賛同者			以下省略	

次に、Z から A に送信した eメールの感性分析で、主要なカテゴリ＜人＞の有向レイアウトを図 3 に示した。＜人＞には＜私＞が重要な語彙であり、さらに世界農業遺産、家族農業、雑穀、栽培、植物、申請、資

料などが共通する回答として多く示されている。同じく感性分析で、コンセプト＜私＞をグリッド・レイアウトで図 4 に示した。＜私＞と共通する回答は、主に FAO 世界農業遺産、その他は栽培、村、雑穀、申請、資

料などであった。さらに、係り受け分析で、主要なカテゴリ<村>を有向レイアウトで図 5 に示した。共通する回答の主な語彙は私や雑穀街道で、その他は FAO 世界農業遺産、畑、村などであった。同じく、カテゴリ

<雑穀街道>をグリッド・レイアウトで図 6 に示した。共通する回答の主な語彙は私で、その他は FAO 世界農業遺産、雑穀、村、畑などであった。

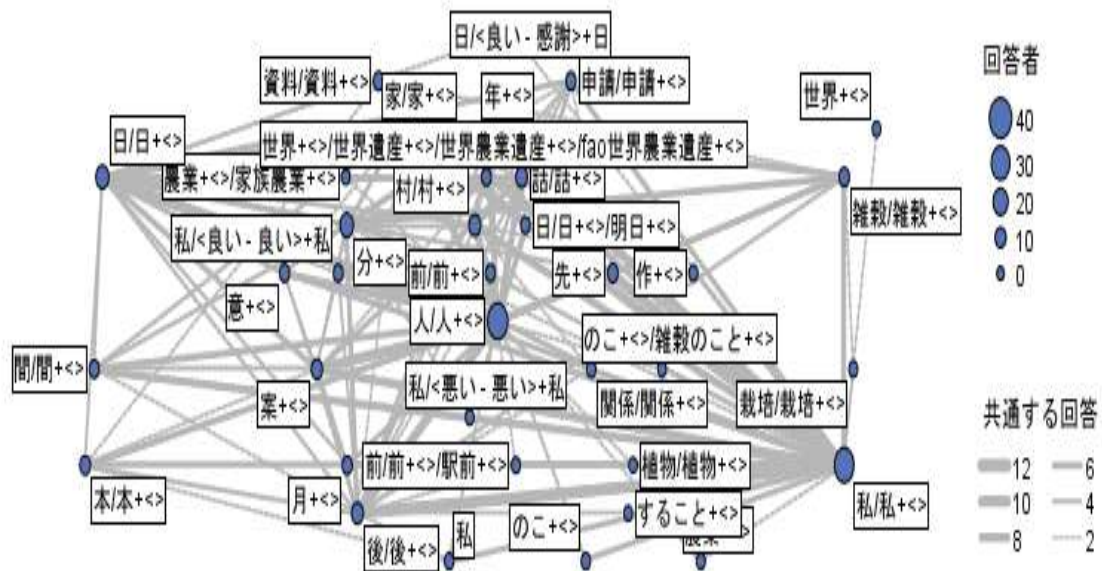


図 3. ZtoA 感性分析の有向レイアウト：カテゴリ<人>（ディスクリプタ／レコード数；30／39、スライダ；3－11）

図 3 および図 4 の結果から、Z の主な関心が雑穀に関連して FAO 世界農業遺産（加えて、申請や資料）、家族農業〔注：国連家族農業の 10 年〕、植物、栽培にあることが明白である。図 5 の結果から、村に関係させて、Z が雑穀街道や FAO 世界農業遺産、畑を明確に位置付けていることが示されている。図 6 の結果からも、Z が雑穀街道に主体的に関わり、FAO 世界農業遺産への申請登録を目指していることが明示されている。

一方、A から Z に送信された eメールの感性分析で、主要なカテゴリ<人>の有向レイアウトを図 7 に対照（図 3）して示し

た。<人>には<私>の他に、共通する回答として予定、畑、Z、雑穀などがあつた。同様にコンセプト<私>をグリッド・レイアウトで図 8 に対照（図 4）して示した。<私>と共通する回答は、Z、畑、予定などであつた。さらに追加して、カテゴリ<雑穀街道>をグリッド・レイアウトで図 9 に示した。<雑穀街道>と共通する回答は雑穀、畑などであつた。次いで上記と同様に係り受け分析で、主要なカテゴリ<村>を有向レイアウトで図 10 に対照（図 5）して示した。共通する回答の主な語彙は A、Z、駅などであつた。カテゴリに<雑穀街道>は見

世界+<>/世界遺産+<>/世界農業遺産+<>/fa0世界農業遺産+<>

私/<良い・良い>+私

私/私+<>

作+<>

前/前+<>

話/話+<>

年+<>

分+<>

私

のこ+<>

栽培/栽培+<>

月+<>

資料/資料+<>

関係/関係+<>

植物/植物+<>

申請/申請+<>

本/本+<>

日/<良い・感謝>+日

案+<>

村/村+<>後/後+<>

間/間+<>

家/家+<>

先+<>

雑誌/雑誌+<>

人/人+<>

意+<>

共通する回答

30 15
25 10
20 5

Figure 1 is a network diagram illustrating relationships between various Japanese phrases. The nodes are represented by circles of different sizes, corresponding to the number of answers (20, 15, 10, 5, 0). The edges represent common answers, with line thickness indicating the count (8, 7, 6, 5, 4). The phrases are arranged in a hierarchical manner, with more specific phrases at the top and more general ones at the bottom. The network shows a high degree of connectivity, with many phrases sharing common answers.

105

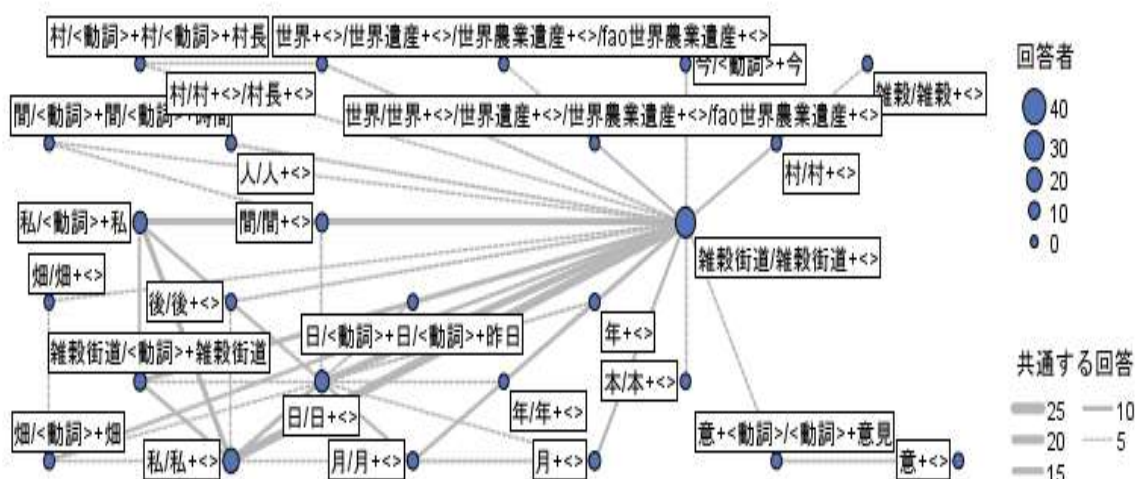


図 6. ZtoA 係り受け分析のグリッド・レイアウト；カテゴリ＜雑穀街道＞（ディスクリプタ／レコード数；12／34、スライド 6／21）

図 7 および図 8 の結果からは、A は A 自身が関心の中心にあり、予定、Z、雑穀は副次的な語彙である。図 9 の結果からは、A も雑穀街道を雑穀や畑と関連付けていることは読み取れるが、図 10 の結果からは、村に関して主な語彙は A、Z、駅 {注：藤野駅} であり、雑穀などの語彙は見られない。Z と異なり、A の場合には、カテゴリに雑穀街道は出現せず、このために Z と対照できないので、図 11 にコンセプト雑穀街道を当てはめてみたが、主な語彙は Z で、副次的に A、畑、雑穀、雑穀ワークショップが認められた。このデータからは A の主な関心が A 自身にあり、雑穀にはないことが特徴として見てとれる。

A から Z へのメール (135 通) に関する感性分析によって抽出されたカテゴリのレコード数は多い順に、先生 (Z) 51、私 (A) 46、予定 36、話 36、畑 28、参加 26、雑穀 25、家 23、メール 21、本 21、人 18、都合 18、作業 11、村 6 であった。これに対して Z から A へのメール (162 通) に関する感性分析

によって抽出された双方に共通のカテゴリのレコード数は、私 (Z) 74、本 39、人 39、話 38、雑穀 23、村 22、であり、カテゴリ先生 (Z)、予定、畑、参加、家、メール、都合、作業は前者とは共通していなかった。一方、後者 Z のみに抽出されたカテゴリは、世界 26、案 21、申請 16、栽培 15、植物 14、農業 12、関係 12、資料 21、環境 6 であった。

A と Z との関わりは雑穀の普及活動であったからカテゴリ雑穀のレコード数が共通して多い点はこのことを支持している。共通して抽出されているカテゴリにおいても、話以外の私、本、人、村についてはレコード数からして関心の度合いに差異があると言える。他方、共通して抽出しないカテゴリについては、A は予定、畑、参加、家、メール、都合、作業など内向な人間関係に特徴的に関心があったことを示している。なお、先生という敬称は Z の職種で、A との師弟関係を示してはおらず、除いた。他方、Z は農業、案、環境、世界、関係、申請、資料、栽培、植物に関心があり、外向な活動があ

ったことを示している。つまり、AとZは雑穀を共通課題にしていたはずながら、実際には見ている世界や求める事象が内向きと外向きと対照的に大きく相違していたことが明確になった。

AからZへのメールに関する係り受け分析によって抽出されたカテゴリのレコード数は多い順に、先生(Z) 51、私(A) 46、予定する 35、畑 26、雑穀 26、家 24、本 21、人 20、都合 20、メールする 19、友人 12、相談する 10、仕事 9、などであった。カテゴリ先生(Z)、予定、畑、参加、家、メール、都合、作業は後者Zとは共通していなかった。これに対してZからAへのメール(162

通)に関する係り受け分析によって抽出された双方に共通のカテゴリのレコード数は多い順に、私(Z) 75、人 44、本 42、畑 38、雑穀 26、村 24、家 22、参加する 19、相談する 19、話 14、であった。後者Zのみに抽出されたカテゴリは、雑穀街道 34、世界 27、資料 21、シンポジウム 17、植物 14、心 13、農業 12、案 7、関係 6、申請 5、栽培 5、環境 5であった。この分析でZのみに抽出されたカテゴリからみると、ZはAと共に雑穀普及を課題に活動してきたはずであるが、実際には、Aは雑穀普及には関心がなかったことを重ねて示している。

表 4. 感性分析および係り受け分析で抽出されたカテゴリの比較

カテゴリ	AtoZ(n=135)				ZtoA(n=162)			
	感性分析		係り受け分析		感性分析		係り受け分析	
	ディスクリプタ	レコード数	ディスクリプタ	レコード数	ディスクリプタ	レコード数	ディスクリプタ	レコード数
先生	8	51	12	51				
私	14	46	22	46	14	74	23	75
予定(する)	8	36	6	35				
話	9	36	9	3	18	38	18	14
畑	8	28	18	28			9	38
参加(する)	5	26	5	14			10	19
雑穀	11	25	24	26	15	23	34	26
家	9	23	18	24			24	22
メール(する)	6	21	6	19				
本	9	21	13	21	24	39	47	42
人	12	18	21	20	30	39	84	44
都合	5	18	9	20				
作業	8	11	8	2				
村	6	6	7	5	12	22	28	24
友人			5	12				
仕事			10	9				
相談する			5	10			8	19
農業					8	12	11	12
案					6	21	6	7
環境					6	6	6	5
世界					10	26	21	27
関係					8	12	8	6
申請					9	16	9	5
資料					11	21	26	21
栽培					10	15	10	5
植物					8	14	16	14
雑穀街道							12	34
シンポジウム							10	17
心							12	13

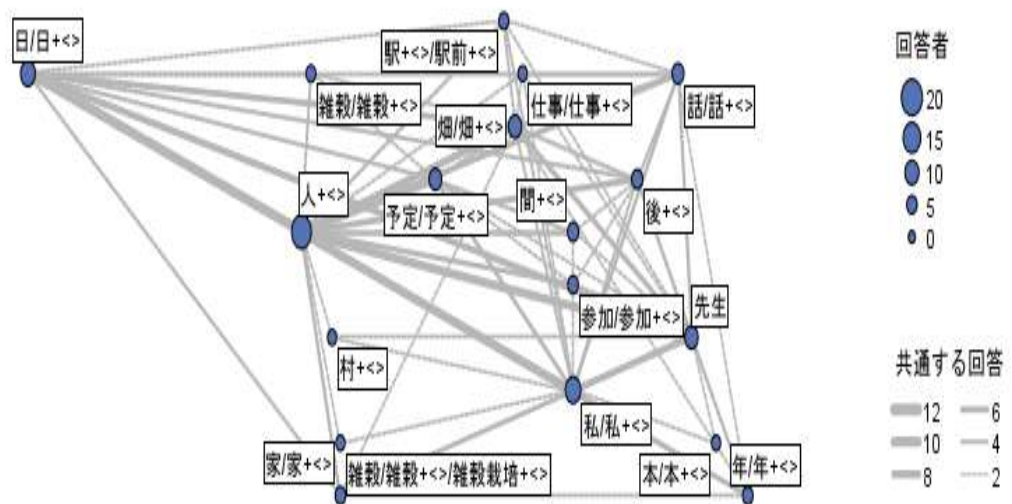


図 7. AtoZ 感性分析の有向レイアウト：カテゴリ<人>（ディスクリプタ／レコード数：12／18、スライダ：3－11）

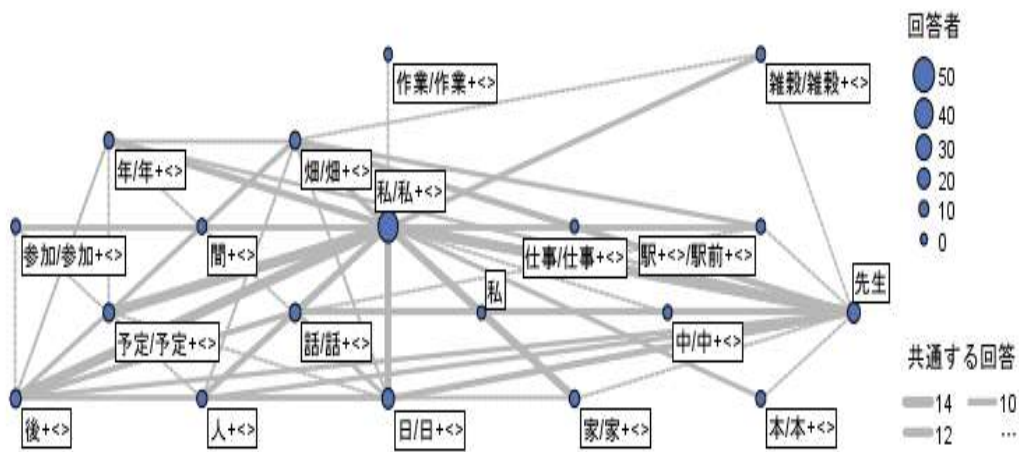


図 8. AtoZ 感性分析のグリッド・レイアウト：コンセプト<私>（レコード数；45、スライダ；5－14）

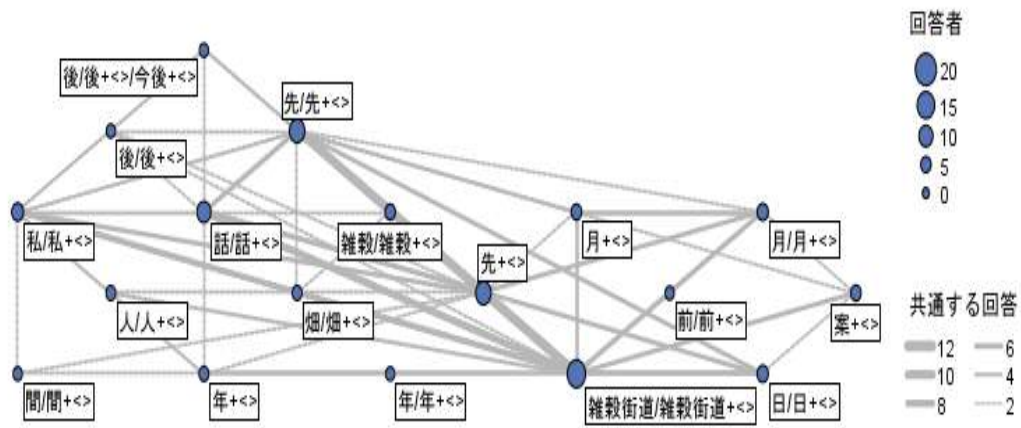


図 9. AtoZ 感性分析 グリッド・レイアウト、カテゴリ<雑穀街道>
(ディスクリプタ／レコード数；12／15、スライド 3／12)

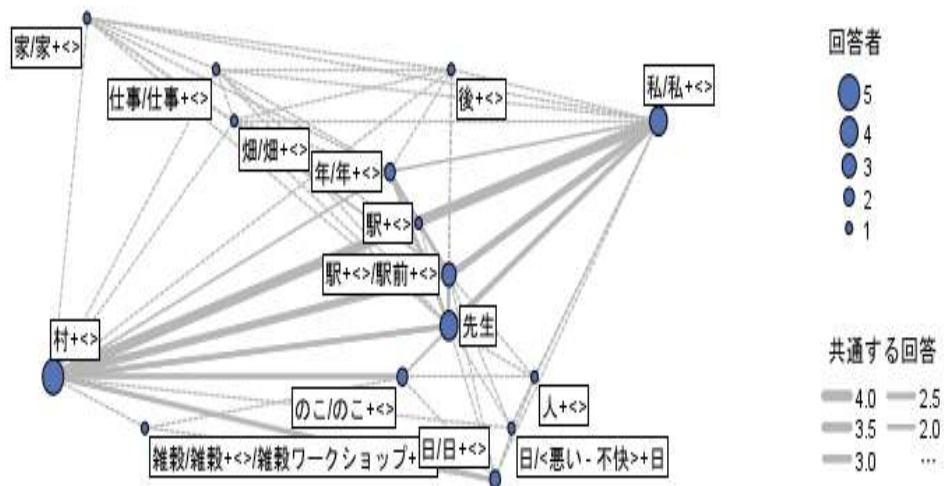


図 10. AtoZ 係り受け分析の有向レイアウト；カテゴリ<村> (ディスクリプタ／レコード数；6／5、スライド 1／4)

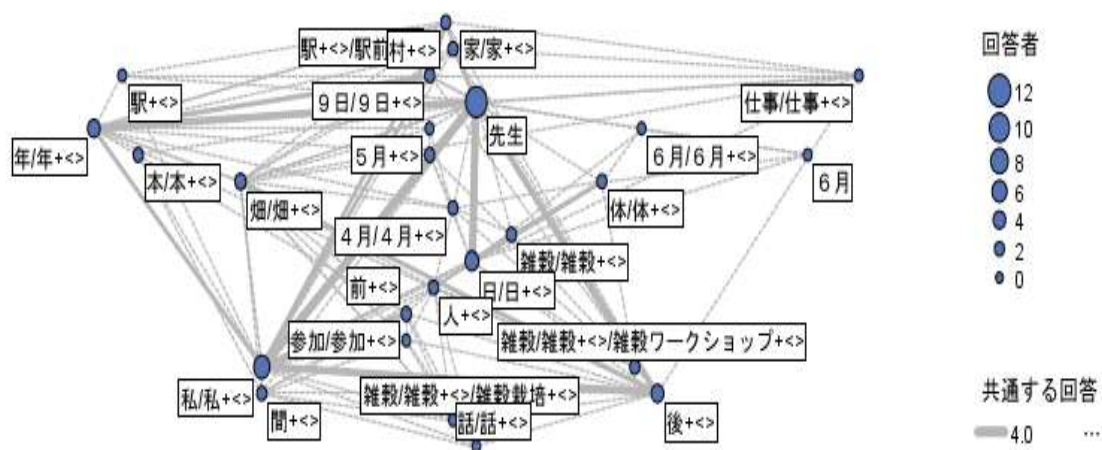


図 11. AtoZ 係り受け分析のグリッド・レイアウト；コンセプト＜雑穀街道＞
(レコード数；16、スライド 1/4)

3) 後日譚

A は E に電話で意見を述べており、その内容を Z は知らない。E は Z がこの間の経緯の一部を説明責任によって吐露した冒険探検粉塵記第 18 話のナマステへの掲載を一方的見解で、公正でないとして却下した。その後 (2020 年 6 月)、森とむらの図書室藤野分室は退去させられた。退去にあたっての経費は Z が支払ったが、これには A や藤野倶楽部への謝礼も含んでいた。自然文化誌研究会ないし Z が作業や借室に対して謝礼をするのは当然ではある。しかし、A が藤野へと活動を誘致しておいて、Z らは多大な労力を藤野での活動に注いできたが、その蓄積を一方的に排除する行為に対しては釈然としない。他方、藤野のローカル・シードバンクは G らの希望と F の厚意で設置したが、これに関しては移管後の管理責任者である G らの了承があったかどうかは不明であるが、相模湖のチーム五右エ門が継承することになったようだ。なお、2021 年 1 月、G は他界されたと聞いた。

A の自作自演の筋書きで、Z は操られてきたようだが、沈黙を保つしかなく、反論す

れば、ムラ社会では A と Z の諍いと受け止められ、他者に類が及ぶと思われた。このために、Z は沈黙して、冷静に公正な考察ができるように、1 年ほど経過を反芻、観察した。それでも、事例 4 で頓挫した雑穀街道普及会 (準備会) は会則を有し、責任の所在を幹事会とする小規模な雑穀街道普及会として、2021 年 1 月 31 日付で創立した。

4) 考察

雑穀街道普及会が頓挫していることへの説明責任を果たすためにこの論考を再開して推敲を重ねて、おおよそ一年がたったので公表する。本論では個別の事例研究でとどめ、さらに論考を深めることによって一般論化はしないでおく。一面的、一方的と言われようと、Z らの体験事実である。他方で、すべての事例の複数 A たち (同一者ではなく異なる数人) からの反証を求めることはできないので、Z らの論考の一方的見解として公正性が問われることもあるだろう。しかしながら、Z が沈黙した 1 年を過ぎても、ムラ撥撫という行為については改めて一部の関係者に見解を聞き直すことはで

きない。個別的な配慮や付度を排除することによって、むしろ Z の一方的見解であると明確に表明しておくの方が論考の公正性を担保できると考えるに至った。したがって、Z への実名での批判は受ける意思にある。

Z の主要な関心が、雑穀を山村で継承するために、雑穀街道を広域連携で普及し、FAO 世界農業遺産に登録申請することにあることは、テキスト分析によって明確に示されている。A の主要な関心は地域社会での人間関係にあり、雑穀はムラ社会に人間関係を繋ぎ止める用具という位置づけで、目的や目標への志ではなく、名目利用してきたのだと考えられる。したがって、用具としての雑穀街道が他地域から世界へと広がることは本音では望むことではなかった。A は FAO 世界農業遺産への登録申請主体となる雑穀街道協議会（公共の団体）を創ることに違和感があるから、雑穀街道普及会（準備団体）から退会すると最終的な事由を述べていた。

しかし、これは A の心の中での、責任回避ないし転嫁による違和感というべきではないのか。A の仲介によって、Z は相模原市まちづくりセンター長や緑区長にお会いして、FAO 世界農業遺産について主体として申請するように依頼した。緑区長は雑穀街道の現地を視察してくださり、その結果、賛同を得て、FAO 世界農業遺産への登録申請活動が第 2 段階の軌道に載ることになるはずであった。しかしながら、まちづくりセンターから出された企画案（付録資料 3、行政企画案であるので掲載しない）および相模原市緑区として支援すると推進窓口までが A と Z に提示された 2019 年 7 月から、A の心変わりが巧妙に仕組まれ始め、A を中心にムラ社会が形成され、Z 個人ばかりか雑穀街道や FAO 世界農業遺産登録申請活動を標的としたムラ撥撫を発生させたのだと考えられる。第 4 事例でムラ社会を構成し

ていたのは表 3 の A に関わる分析で人間関係として抽出された人々であった。彼らは地域社会で尊敬されている名士である。そうした人たちがムラ撥撫に加わったことに、Z はあまりにもひどく驚いた。

今回のムラ社会形成とムラ撥撫発生メカニズムは上述した経過と e-メールのテキスト分析でからおおよそ明らかになった。これまで、この付和雷同過程における同調者も、雑穀栽培の継承には A と同水準の認識であったのであり、雑穀街道の普及や FAO 世界農業遺産登録申請活動の重要な意義を認識してはいなかったのであろう。傍観者および不条理を承知で同調者になった人々は皆 I ターンとして田舎に移住してきた人々であり、ムラ社会の有力者には何らかの利害関係により異議申し立てをすることができなかったのだと理解する。彼らに抗えば、次にムラ撥撫の標的にされることがよくわかっているからだ。この過程で、唯一の救いはトランジション活動を進めている I のみが移行者の信条によって同調しなかったことだ。イジメにあった Z にはとてもありがたかった。Z は都市に居住しているので、日常のイジメ行為は回避できるが、地元の田舎に移住している人々は悪意にさらされるかもしれない。それ故に、Z はこのエッセイをまとめても、一年間は公表を保留することにし、二年ほどにわたって苦い思いをしてきた。

Z は A を長らく信頼していた。それが A の自作自演的行為によって、突如、信頼を裏切られ、かつ集団絶交宣言のターゲットにまでされた。A は支配欲や自己顕示欲を抑制できずに、流行語で言えば、マウンティング格付けできないことから、A の支配下にあるムラ社会から Z を撥撫したと考えられる。それにしても、地域社会で敬意を持たれている名士たちがすでにムラ社会を形成していたとしても、すぐさま共同絶交宣言に加わったのはどうしてなのであろうか。

属性から上下関係や利害関係がうかがわれるが、個人情報保護のために、これ以上の分析は公表しないことにする。

その後も A の撥撫行為は続いており、C に対して Z と付き合うなどと言っているようだ。しかし、C が地域で生計を維持するためには A にさからうことはできないから、Z との関わりにおいて葛藤が生じる。Z はその状況を理解するし、C が A を含めて誰と付き合おうと、C の自由であり、Z は A による撥撫行為（共同絶交）への報復行動はもちろんせず、自己の無実を明かすために、公正に行為の分析したのである。Z を介して A と親しくなった人たちも少なからずいるが、誰にも一切の事情を話してはいない。彼らが A と今まで通り交流するのに何の障害も与えてはいない。また、こうした内面への道を探ることで、心的外傷後ストレス障害 PTSD からの回復を得ようとしたのである。

ムラ撥撫が個人の醜い品性から発しても、ムラ社会は集団であるので、その個人を非難しても問題解決はできない。ムラ社会の形成とムラ撥撫の発生のメカニズムを根元から、白日にさらして、人々の教養（第七感良心）がその悪習に勝るようにならなければ、いつまでも解決には向かわない。今回の事例は Z が直接体験したことなので、詳細な事実データがあり、ここではムラ社会の形成核 A とムラ撥撫の標的となった Z の間で送受された e メールを分析材料として、テキスト分析により、仮設の検証を行うことができた。

むすび

上述した経験事実から次の 3 仮設が導かれた。仮設 1：旅人として訪れる田舎の自然は美しく、村人も優しい。移住して村人になろうとすると、ムラ社会に組み入れられるようになり、人間関係が厳しくなり、生活状態は急変する。このことは論考 1（木

俣 2021）および本論考から明示できた（表 2）。次に、仮設 2：自然文化誌研究会の環境学習活動が 10 年ほどして、厚意ある村民の協力を得て、成果を上げて定着してくると、地元有力者から撥撫される。このことは論考 1 および本論考の事例 1 から事例 4 において共通して明示できた。仮設 3：事例 4 の場合では、地域の中で、ムラ社会の形成と撥撫の発生は地元有力者の個人から生じ、居住者を巻き込み、移住者や常時往来者を排除する。このことも、第一論考の対談記録およびテキスト分析、第二論考（本文）のテキスト分析（表 2、表 3）から明確に認知できた。

村には古くからの居住者によるムラ社会がいくつも形成されており、新たに移住すると既成のムラ社会のいずれかに組み込まれていく。新規移住者がムラ社会の有力者に抗ったら撥撫される。地元有力者という人々は大方が封建的土地所有者である。敗戦後、農地解放で大農地所有者は減少したが、山村には山林所有の特殊性により、少数の大土地山林所有者が存在している。

地元ムラ有力者による排除は、論考 1 の農人降矢の言う「反射」で（木俣 2021a）、都会者を反射した都会者でないいわゆる田舎者のすることだろうか。結局、50 年ほど好意を寄せる山村社会のために、私の大事な人たちまでを犠牲にして、利他的任意で自費も持ちいて働いてきたが（別に、公的助成も多く受けた）、繰り返しムラ社会に撥撫されて、Z の人生は終わることになった。この世に恨みを残したくはないので、この事象をしっかりと分析することで、経験が無駄にならないように、多くの事実を記録しておく。心優しい良心を有する村人を信頼し続けることは猶更ながら、だからこそ、事実の解析は将来に意味がある。素のままの美しい暮らしを再創造するために、希望を残しておきたい。移住者など新住民が増えて、自由な気風が吹かなければ、民主主

義は根付かない。それには鎖国以来の年数と同じくらい、まだ何百年もかかるのだろうか。早まることを次世代に期待するしかないのだろう。

なお、論考 1 (木俣 2021) および本論考 2 (文福洞 2021) は実体験した事例から考察したが、さらに一般理論的な考察は論考 3 (黍稷 2021) において行ったので、学びを深めたい方は一連の三部作として参照していただきたい。

関連論文

黍稷農季人 2015、黙示録エッセイ：都市と田舎 ～ 生活文化の再創造による継承、www.milletimplic.net/essey/ruralcity.pdf

黍稷農季人 2017、黙示録エッセイ：哀しい私たちの日本、

www.milletimplic.net/essey/tragichome.pdf

木俣美樹男・土橋稔・篠田具視 1979、雑穀食の伝承、東京都奥多摩町水根部落の事例、環境教育研究 2 (1・2) : 77-89。

木俣美樹男・川上確也・岩谷美苗・小川泰彦 1990、環境教育の方法論とその実践に関する研究 I. 環境教育プログラムと冒険学校、東京学芸大学附属野外教育実践施設報告、野外教育 1 : 11-24。

木俣美樹男・岩谷美苗・川上確也 1991、環境教育の方法論とその実践に関する研究 II. 自然と一体感を得る統合プログラム、東京学芸大学附属野外教育実践施設報告、野外教育 2 : 19-23。

木俣美樹男 1992、環境教育プログラムの枠組みとエコミュージアム、環境情報科学 21 (2) : 16-20。

小川泰彦・岩谷美苗・山下宏文・樋口利彦・木俣美樹男 1993、環境教育の場としての農山村エコミュージアム I. 野外体験学習に

民族植物学ノオト第 14 号 : 76-115, 2021
関する埼玉県大滝村住民の意識調査、東京学芸大学附属野外教育実践施設報告、野外教育 4 : 23-32。

木俣美樹男・井村礼恵 2008、ホーム・ガーデンによる雑穀の生物文化多様性保全～エコミュージアム日本村「植物と人々の博物館」づくりを通じて、エコミュージアム研究 13 : 34-42。

木俣美樹男 2008、野外学習から地域社会の再生へ、環境情報科学 37 (2) : 52-56。

木俣美樹男、2009、ELF 環境学習課程、pp. 1-30. 植物と人々の博物館プロジェクト。

木俣美樹男 2015、生きるという任意・自律的な営為を動かす心情の省察、民族植物学ノオト 8 : 23-66。

木俣美樹男 2019、自分で日本国憲法を考える、自然文化誌研究会、電子出版、www.ppmusee.org/_userdata/constJapan2019.pdf

黍稷農季人 2020、素原の超個人主義、www.milletimplic.net/essey/

木俣美樹男 2021、山村農人の教養～降矢静夫 20 世紀末の山里暮らし～、民族植物学ノオト第 14 号 : 52-75。

文福洞先斗 2021、日本のムラ社会における撥撫発生の事例分析、民族植物学ノオト第 14 号 : 76-115。

黍稷農季人 2021、孤独と孤立～ムラ社会の撥撫に抗う心の構造と機能、www.ppmusee.org/goods.html/pdf

木俣美樹男 2011、森とむらの生物文化多様性～家族を守るための自給農耕と栽培植物在来品種の保全、社会的共通資本としての森とむら、財団法人森とむらの会、東京。

文献

文月煉 2016、

<https://fuduki-ren.hatenablog.jp/>

小松裕 2011、真の文明は人を殺さず一田中正造の言葉に学ぶ明日の日本、小学館、東

京。

Nakane, C. 1970. Japanese Society; A Practical Guide to Understanding the Japanese Mindset and Culture. Tuttle, Singapore.

中根千枝 2009、タテ社会の力学、講談社、東京。

大野晃 2005、山村環境社会学序説—現代山村の限界集 落化と流域共同管理、農文協、東京。

清泉亮 2018、誰も教えてくれない田舎暮らしの教科書、東洋経済新報社、東京。

徳野貞雄 2007、農村の幸せ、都会の幸せ—

民族植物学ノオト第 14 号：76-115, 2021

家族・食・暮らし、NHK 出版、東京。

鳥越皓之 1993、家と村の社会学増補版、世界思想社、京都。

ウィリアムス, R. 1973、田舎と都会、山本和平・増田秀男・小川雅魚訳 1985、晶文社、東京。

山下祐介 2012、限界集落の真実—過疎の村は消えるか?、筑摩書房、東京。

山下祐介 2014、地方消滅の罫—「増田レポート」と人口減少社会の正体、筑摩書房、東京。

養老孟司 2004、バカの壁、新潮社、東京。

付録資料 1. 雑穀街道提案の経緯

2021 年

1 月 雑穀街道普及会は準備会から創立

2020 年

2 月 藤野助成申請グループ（藤野あわきびひえの会）は雑穀街道協議会設立に賛同せず、相模原市緑区の提示した FAO 世界農業遺産に申請するための企画は中止を決定したと、まちづくりセンターに通告した。

3 月 藤野関係の発起人・賛同者（6 名と 1 団体）は雑穀街道普及会名簿からの削除を求めた。さらに藤野あわきびひえの会は FAO 世界農業遺産に関わらない活動助成をまちづくりセンターに申請した。

4 月 現在も雑穀街道普及会（準備会）の活動は継続している。

COVID-19 のために、活動は一時休眠した。

2019 年

冬季は雑穀腊葉標本、図書の整理

2 月 藤野で自然文化誌研究会。

5 月 相模原市緑区長に趣旨説明、東京学芸大学学生実習で雑穀街道への小菅村村民意識調査。

7 月 パーマカルチャー・センターで「雑穀

と地域」を講義。相模原市藤野まちづくりセンターで、企画について説明。相模原市緑区長が 2020 年度から FAO 世界農業遺産への申請準備活動を支援すると内定（区長は小菅村まで雑穀街道を直接視察）。藤野で助成申請グループづくりを始めた。

9 月 上野原市農業委員会会長と雑穀街道の話し合。

11 月 藤野助成申請グループは雑穀街道協議会設立に賛同できなくなった。

12 月 上野原市農業委員会および山梨県富士東部農務事務所と話し合。

2018 年

1 月 上野原市長、相模原市長、小菅村長、丹波山村長の賛同依頼状。

4 月 雑穀街道と FAO 世界農業遺産セミナー

8 月 日本環境教育学会イクスカーション来訪

9 月 丹波山村長及び役場職員に趣旨説明

12 月 藤野まちづくりセンター長に趣旨説明

2017 年

1 月 東京都公園協会講座で雑穀街道提唱・講義。関東農政局環境保全官を訪問。

4 月 雑穀街道普及会の賛同者募集開始(伝統知シンポジウム＝第 39 回環境学習セミナー／藤野)。農水省日本農業遺産認証・講演会。

5 月 展示解説、雑穀栽培講習会、小菅村。ミレット藤野講座開始。

6 月 植物と人々の博物館の移転。

7 月 雑穀街道巡検と 2 市 2 村の賛同者交流。

8 月 パーマカルチャー・トランジション交流フェスティバルで、在来種に関して講演。社会科教員グループの巡検受け入れ。

9 月 南アジア学会で雑穀の起源と伝播について発表。

12 月 宮崎県椎葉村 (FAO 世界農業遺産登録) の焼畑研究会で山村の現代的意義に関して講演。

2016 年

5 月 展示解説、雑穀栽培講習会、小菅村。

6 月 自給農耕ゼミ 7、藤野。

11 月 上野原市保健センターで、雑穀街道の講義。自給農耕ゼミ 8、藤野。

12 月 小菅村長および上野原市長に雑穀街道の提案。農水省環境保全官を訪問。宮崎県椎葉村 (FAO 世界農業遺産登録) の焼畑研

究会で焼畑雑穀に関して講演。

2015 年

5 月 展示解説、雑穀栽培講習会、小菅村。

9 月 雑穀街道展示、藤野倶楽部結びの家。

11 月 雑穀料理教室、藤野倶楽部結びの家。生物多様性アクション大賞審査員賞。

2014 年

3 月 雑穀標本を小菅村に移動、ローカル・シードバンクを藤野に設置

5 月 展示解説、雑穀栽培講習会、小菅村

11 月 雑穀街道の提唱、第 34 回環境学習セミナー／小菅。雑穀街道の講義、種市、藤野

前史：

2006 年 ミレット・コンプレックスを植物と人々の博物館に改称。

2003 年 ミレット・コンプレックス創立、雑穀栽培講習会を開始。

1988 年 雑穀研究会を事務局として創立。

・・・以後、国内外で雑穀の栽培調査研究

1975 年 東京学芸大学自然文化誌研究会創部、上野原町西原の調査を開始。

1974 年 関東山地における雑穀の栽培と調理の調査研究の開始。

付録資料 2. 相模原市の雑穀街道を FAO 世界遺産にするための企画案

(案として提示されたが公表しない)

付録資料 3. A と Z の往復メール

(個人情報保護により掲載しない)

1) 2020 年度初頭よりコロナウイルスによる影響で主催事業をはじめとするほとんどの事業の開催を見合わせる結果となりました。事業を見合わせている間にワーキンググループを作り、事業と経営の見直しを図ってきました。持続化給付金の交付を受け、会は存続することができました。

そんな中でも、会員および関係各位のご支援・ご協力があり感謝いたしております。

(1) 野外環境学習事業（冒険学校・のびと講座・ログ事業）

月日	事業	場所	参加者数	備考
5/3-5	むらまつりキャンプ	小菅村		中止
8/2-	こすげ冒険学校	小菅村		中止
12/26-28	まふゆのキャンプ	小菅村	3	中止、スタッフのみで感染研修会
4/19	野草のてんぷらとお茶のみ	東京学芸大学		中止
8/15-24	タイ環境学習キャンプ	タイ		中止
9/26-27	INCH まつり（ライブときのこと）	小菅村		中止

(2) ELF 環境学習中堅指導者（のびと）研修会（指導者養成事業）

月日	分類	事業	場所	参加者数	備考
11/21-22	E L F	のびと研修会	小菅村	4	ちえのわ学生と合同

(3) 植物と人々の博物館事業

月日	分類	事業	場所	参加者数	備考
通年		雑穀栽培講習会	藤野町		
通年	ゼミ	自給農耕ゼミ	藤野町、上野原市		

(4) 委託事業・案内など

月日	分類	事業	場所	参加者数	備考
12/4	委託	東京学芸大学実習	小菅村	4	オンラインで開催、1 講義時間のみ

(5) 広報事業

月日	分類	事業	場所	参加者数	備考
3/10	会報	会報ナマステ 139 号発行			300 部

5・6月	会報	会報ナマステ WEB 版発行			WEB 掲載の特別号
11/10	会報	会報ナマステ 140 号発行			200 部
常時	HP	ホームページ、ブログの更新			
常時	メルマガ	植物と人々の博物館メールマガジン			

(6) 共催事業

月日	分類	事業	場所	参加者数	備考
年間	共催	第 15 期 ちえのわ農学校	東京学芸大学	18	中止（年間 10 回＋宿泊 1 回）

(7) 会議・その他

月日	分類	事業	場所	参加者数	備考
2/16	総会	第 16 回通常総会・理事会	小菅村	25	
常時	会議	運営委員会	メーリングリスト	20	

●出版物：研究報告

民族植物学ノオト 13 号（電子版）

●会員（2020 年 12 月 31 日現在）

正会員：24 人 一般会員：24 人 家族会員：11 家族

学生会員：6 人 賛助会員：4 人 友の会会員 2 人 合計 71 人（年会費納入者）

事務局より

会の存続はできました。コロナウイルスによる事業の開催を見合わせの期間に多くのことが議論できました・・・としか言えません。

感染対策を進めながら、どのタイミングで事業の再開を行うか探っています。

オンライン（ZOOM）による会議は概ね好評でしたので、今後も活用していこうと思います。

〔付録 2〕 植物と人々の博物館 2020 年の活動記録
Appendix 2: A Record of Plants and People Museum in 2020

木俣美樹男
Mikio Kimata

1. 植物と人々の博物館

COVID-19 により、小菅村にはほとんど行くことができずに、開館、資料整理などの作業を休止。

- 1) 自然文化誌研究会総会にて、博物館の現状と今後の課題を確認。
- 2) ホームページの更新（石川西村さん）、国立国会図書館 e デポに登録。
- 3) 民族植物学ノオト第 13 号を発行、メールマガジン月刊発行。
- 4) 電子書籍の発刊、ホームページと国立国会図書館 e デポで閲覧公開。
- 5) 森とむらの図書室藤野分室廃止、藤野ローカルシードバンクの管理者移動。

2. エコミュージアム日本村（トランジション小菅）

- 1) 今後について打ち合わせ（小菅亀井さん、事務局）
- 2) トランジション・ジャパンおよびイギリス本部のウェブサイトに登録、リンク承認。

3. 雑穀街道普及会

- 1) 雑穀栽培見本園の維持（小菅守屋さん委託、藤野宮本さん、小金井木俣）、保存種子の配布普及。
- 2) 雑穀発泡酒ソビボ・ピーボ復活プロジェクト（東京学芸大学創基 150 周年記念）についての話し合い（東京学芸大学環境教育研究センター、藤野）。
- 3) 雑穀街道普及会は会則を確認して発足、幹事会の責任で雑穀普及活動を継続。

参考. 関連活動 ウェブサイト黍稷農季人『生き物の文明への黙示録』

- 1) ホームページの更新、雑穀街道普及会のサイト、雑穀の民族植物学、環境学習原論などの電子出版。
- 2) 雑穀栽培法などの資料提供
- 3) 環境市民連合大学の提案

もう1年以上になる。昨年はCOVID-19によりすべての旅行は中止して、どこにも行っていない。前号の編集後記に書いた社会状況よりも、一層嘆かわしい状況だ。

それでも、代わりに心の旅(内面への道)、あるいはinner transitionをして、環境学習の奥義に辿り着いた。『環境学習原論』(木俣2019)がこの領域における私の到達点だとしていたが、さらにその先に視界が開けた。環境や文明の適正化は科学技術の更なる発展によるのみではなく、特に心の在り様、言い換えれば自然観・世界観、であると何十年か前から気づいてはいた。

そこで、『心の先史時代』(ミズン 1996)に出会って以来、ELF 環境学習過程においても心の構造について考察を進めてきた。心の構造は一般的知能、博物的知能、技術的知能、社会的知能、および言語知能よりなる。この1年余りの心の旅により、心の構造には機能が一体として伴うことに気づ

いた。

心の機能というのは、五感(五官)、第六感(直感・直観)および第七感(教養・良心)であると考えた。そして、心の構造と機能を繋ぎ、心を統合するのは知能間の認知流動性である。ELF 環境学習過程における学習プログラム間を繋ぐ流れが、実に認知流動性のことであることに合致した。ここに環境学習原論の奥義があり、心の構造と機能、認知流動性のすべてが ELF 環境学習過程の枠組みとメビウスの輪のように縫合したのだ。

現代文明が科学技術による解決を過信することなく、環境学習によって自律、自給知足することを提案したい。次第に真の文明(田中正造)、生き物の文明に移行するように努め、できることなら若者たちに未来社会への希望をつないで、幸せになってほしいと、アニミストの私は自然のカミガミに祈願するのだ。

民族植物学ノオト 第14号 (2021) ISSN 1880-3881

発行日: 2021年3月30日

発行所: 特定非営利活動法人 自然文化誌研究会

発行責任者: 植物と人々の博物館 木俣美樹男

所在地: 〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村 3337-2
自然文化誌研究会

Ethnobotanical Notes No. 14 (2021) ISSN 1880-3881

edited by Mikio Kimata (Plants and People Museum)

The Institute of Natural and Cultural History,

3337-2 Kosuge, Kitatsuru-gun, Yamanashi Prefecture, Japan 409-0211